

争當時、國家の爲め特別任務に服して活動中、ヘルピンに於て敵の發見するところとなり、捉はれて銃丸のもと壯烈の死を遂げた。

先驅雜誌の一群

上述各種の刊行物は新聞若しくはそれに近きものであつたが、それらと前後して石版或ひは騰寫刷りの雜誌も刊行された。例へば「トモシビ」の如き、また山岸鐵篤によつて出された「桑港通俗」の如き、孰れも邦人雜誌の先驅をなすものであつた。或ひは河原兄弟の發行に係る繪入り雜誌「愛嬌」も一八九四―九五年に互つて續刊され、「ジャパン・ヘラルド」創刊の一人なる岡田依三郎の如きも、「東洋」、「桑港文庫」などを發行した。更に一八九六年には鷺津文三は滑稽雜誌「頭はず誌」を發行した。これは當時「梁山伯」なる會合起り、その機關誌として發行されたものであつた。執筆者は在桑港の氣鋭文士が匿名を以て寄稿したもので、諷刺漫罵調のものであつた。偶々第卅三號まで繼續した時、桑港福音會に關係ある白婦人に對する狂畫掲載のため、誹謗罪に問はれて、畫工高橋孤泉と、もに鷺津主幹は各九ヶ月の刑に處せられ、右狂畫掲載の「日本新聞」また起訴されて編輯長米田切水も厄を蒙つた。この爲め「頭はず誌」は廢刊となつた。この事件は在米邦人筆禍の最初のものである。なほ鷺津は入獄前「頭はず誌」を廢刊し、野口米次郎（英詩人ヨネ・野口）と協力して「頭はず誌」の後身ともいふべき週刊「太平洋」を發行したが、間もなく前記誹謗罪により收監された爲め永續に至らず三號雜誌に終つた。何分石版刷りの苦痛とするところは、新聞、雜誌ともに毎日記事を細筆を以て原紙或ひは原版に書きつけるを要し、その勞苦は尋常でなく、また當時なほ在留邦人の出版物需要多からず、經營も容易でなかつた。但しこれらの出版物——特に石版刷り新聞も日清戦争に際會して、情報掲載に或ひは對策に獻金事情報道に貢獻せるところ多大であつた。

活字印刷時代

一八九二年（明治廿五年）に至つて初めて日本より活字が輸入されて、茲に邦人出版界は漸く騰寫、石版時代より活字時代への移行を見始めた。この活字を利用したのは前項記述の「十九世紀」の發行者たる

互理篤治であつた。即ち互理はこれを用ひて「愛國同盟」の機關紙、末期の「十九世紀」を印刷した。素よりこれが邦人出版界に活字使用を見た最初のものである。試みに當時の出版界情況を知る爲に、一九〇五年川崎巳之太郎が「日米新聞」紙上に掲げた「半面の桑港新聞史」を左に採録する。

明治十八、九年頃來、黨を立て派を分ち、睨み合つた耶蘇書生と政論書生は、廿三年聯合して「大日本人會」を組織した。これが分子は、福音、美以、南美以の三團體と、東北五州會、關東會、九州會その他一二の政論團體であつた。而して正金の日原昇造や、耶蘇側の米山梅吉、服部綾雄、政論派の青原傳、渡邊勸十郎らは當時のチャンピオンであつた。然るに二十四年天長節會用の御眞影につき、青年會長石川定邦が何か非難せしとやら云ふを、佐竹某が聞き替めて騒ぎだした。翌春になつて前記日本人會から右青年會を除名する建議が出て、桑港新聞は全紙をあげて連日連號耶蘇教徒を不善不忠と怒號した。勢餘りに凄かりしかば、見かねて永井元が騒起し、二十六年二月十一日を期して「金門日報」を發行して之に對峙し、旁ら耶蘇教を庇護した。茲に於て火花は益々散亂して騒動いよ／＼擴大し、折角の日本人會も土崩瓦解に赴かんとした。さすがの珍田領事會長の敏腕も最早施すに業なきまで押詰り、同二十六年一月には一旦放逐した青年會を再び呼び戻して手を握つた。此間最も苦き經驗を嘗めたものは基督教青年會であつた。何を申すも、此の世は武裝するに不如と悟つて、青年會派の石川定邦、今井頼興、副島八郎以下面々贖金して活字を購入し、正金銀行流れの活字をも加へて、明治二十七年初めて活版刷り「新世界」を發行した。云々。

新世界新聞發行経路

「新世界新聞」の創刊に就ては前文川崎巳之太郎の説に書かれてゐるが、右に對しては些か敷衍訂加すべき史實あり、即ち一八九四年（明治廿七年）桑港ミツシオン街よりヘイト街に轉じたる「ヘイト青年會」に於ては、今井頼興主宰のもとに會報を發行しつゝあつたが、これより先、在留邦人数の増加ととも有力なる報道機關の必要を感じ、福音會、大日本人會、青年會の三者合同して基督教新聞發行の内議あり、一八九三年二月、青年會は理事會を聞いてこの案を討議し、委員として石川定邦、奥野武之助、今井頼興の三名を挙げ、他の團體と交渉し有力雜誌發行方の實行に傾きつゝあつた。（その頃青年會は活版設備を所有し「平都活版所」と稱して印刷營業をなしつゝあつた）然るに前記三團體の議未だ纏まらざるに先立ち、青年會の理事員副島八郎（鐵堂）は、永井東眠、田部井宗次郎と謀り、當時青年會寄宿中なりし東京秀英社の一等職工、梅田藤太郎、中澤（後ち石川）福太郎ら

と共同し、一八九四年五月廿五日「新世界新聞」第一號を世に出し、自ら主幹となつて續刊活動した。この活字日刊の嚆矢「新世界新聞」の出現によつて青年會との間に感情の疏隔を生んだ。素より平都活版所はその經營上、青年會とは別個のものであつたが、同一家屋に存在せる關係上、屢々新世界と青年會との間に紛擾が起生した。よつて一八九六年五月の臨時總會に於て協議の結果、平都活版所はその工場借受けの代償として青年會々報その他を無償にて印刷提供することに決定した。斯くて一應は双方互讓の歩を進めたが尙暗礁は依然として其の間に存した。終に翌一八九七年七月に至つて新世界社分離説は二對十七票を以て可決し、副島八郎の新世界新聞と青年會とは全く關係を斷つた。

北米日報の發刊

ヘイト青年會は新世界新聞と分離して以來一ヶ年後の一八九八年七月十一日に至つて臨時總會を開き、松永文雄を議長として新たな新聞發行案を議し、實行委員として松永文雄、山崎惣五郎、古谷貞次、藤岡紫朗、君島霜朔、今井頼興、平塚勇之助、島村武一、細貝富次郎を擧げた。各委員は「北米日報社」を組織し、同年九月古谷を日本に送つて活字並びに活字職工を得、主筆として川崎巳之太郎を聘して歸米し、同十一月「北米日報」を發行するに至つた。恰も川崎の同船者、牧師菅田勇太郎が日本矯風會と連絡し、桑港支那人街一帶の邦人醜業婦の救済を始むるや、北米日報はこれを後援し、當時桑港下町に開演手筈となつてゐた日本婦人の裸體踊りを攻撃してこれを未然に防ぐを得るなど、同紙は論陣を布いて矯風に努めた。その爲め北米日報は下町在住邦人にして利得に關係あるものより仇敵視され、誹謗罪などの提訴を受けるに至つた。但しこの提訴は有罪成立を見たもの一件もなかつた。

三新聞競争と合同

前々項に於て既述の岡田依三郎によつて發行された「桑港日本新聞」(前名ジャパン・ヘラルド)は、このとき既に岡田より安孫子久太郎の手に譲渡されてゐた。而して其後に創刊を見た「新世界」と、新

出現の「北米日報」の三日刊新聞が鼎立する形ちとなり當然そこに競争が惹起された。先づ新世界は率先して四頁より六頁紙に擴大、北米日報またこれに追従し、新世界更に八頁に増大するに至つて北米日報と桑港日本新聞は遂に合同の機運を促進される結果となり、北米日報は創立後五ヶ月にして一八九九年三月廿八日遂に終刊號を發刊して大要左の如き宣言をなした。

「一昨年來侃々の筆を揮つて當地に雄飛した桑港日本新聞と、昨多僅かに呱呱の聲を放ちしに似ず、天下の時事を痛論し旗幟堂々、利鋒當るべからざりし北米日報とは爰に双方の利便を計り、各々その舊組織を解體し、合同協力更に若干の新分子を加へ以て新たに一社を組織し、江湖大方に見みえんとす。故に予等は今に於て多言を贅せず、新たに武裝したる「日米」は來月三日(神武天皇祭)を以て諸君に見ゆべし。讀者乞ふ之を諒とせよ」

日米新聞の誕生

絛上の關係に於て一八九九年(明治卅二年)四月三日「日米新聞」は世に出でた。社長に安孫子久太郎、ヘイト青年會側からは理事川崎巳之太郎、日本新聞社側からは米田實(切水)等が引續き活動し、佐藤、市橋俊(現スタンフォード大學教授)、星野等新たに入社し、古谷貞治は支配人格、小林彦次郎は社主であつた。其後數年關係者の歸國により全權は安孫子久太郎の手に移り、一九三六年死去までの三十數年間の永きに互つて同社々長として活躍した。(別項参照)

太平新聞出づ

「新世界」或ひは「北米日報」等の新聞を世に出したヘイト青年會の理事員中より又も日刊紙の計劃をなすもの現はれ、同青年會は宛ら新聞の產婆役を勤めるかの奇觀を呈した。即ち一九〇三年(明治三十六年)八月に至つて青年會設備の活字に倚つて新たに「太平新聞」なる日刊紙が發刊された。社長高橋畫一、主筆桑原作太郎(閑畝)らによつて創設されたものであつたが、後ち青年會側との間に圓滑を缺き、青年會に云はしむれば「飼犬に手を吠まるる」紛擾などあり、結局翌年二月に至つて「太平」關係者と青年會は絶縁となり、同紙は高橋の手を離れて醫師西片朝三の手に移り、西片は改めて青年會に活字の再使用を申込んだが交渉成らず、遂に同紙は短命を以て

廢刊となつた。

羅府新報誕生 一九〇四年（明治三十七年）四月、羅府に於ては飯島立峰、山口正治、丸山某等によつて舊寫刷りの「羅府新報」第一號が呱呱の聲を擧げた。續刊數ヶ月、成績の漸く見るべきものあるに力づき日本より活字を購入し、同年十一月三日の天長節を期して活字印刷四頁とし新装を以つて活躍の一步を踏み出した。その出資者は大和商會、猪瀬榮吉、岡田、松浦兩洋服店、主筆には澁谷雪郷も参加し、社運漸次に伸展して南加州に於ける第一紙となつて今日に及んでゐる。

大鐵新聞 羅府に於て「羅府新報」に亞いで生れたのは「大鐵新聞」であつた。その創刊は一九〇四年十月、社同人は大山鐵之助、杉山啓二郎等であつて、桑港より田村松魚を聘して大いに伸展を圖つたが、社運意に任せず幾干もなく「平民」と改題し、翌一九〇五年十一月再度「羅府毎日新聞」と改稱日刊とし、脇嘉吉、平原豊等専ら執筆した。（後記参照）

桑港震災と新聞界への影響

一九〇六年（明三九）四月の桑港大震災は在留邦人一般に特記すべき影響を與へ、一種の轉換期をなすに至つたが新聞界に對する影響も尠少でなかつた。當時の桑港「新世界」、「日米」とも漸く社の基礎固定時代に移り、桑港附近より漸次地方に進出を見つゝあつた時代で、先づ「日米」は羅府に支社を設置（新聞支社の嚆矢）鷺津文三（尺鹿）を主任とし次いで「新世界」も羅府支社を開設、今城長緒（後ち金融社を創始）を主任となし、續いて兩社とも布市、羅府、佐市などに支社を設置した。兩社が夙に地方への伸展に着目したことは、その發達を早める結果となつた。比較すれば「新世界」一日の長あり「日米」もよく拮抗活躍し一九〇四年社屋をターク街に移轉、擴張し「新世界」はゲ

リー街の新築社屋に轉じた。この頃同紙は副島八郎の手より倉永照三郎に讓渡され印刷には輪轉機が据えつけられた。「日米」またよくこれに對峙して雁行しつゝあつた。折柄桑港大震災突發し、舊に桑港のみならず、その影響は王府、羅府、櫻府にも波及した。桑港に於ては「日米」「新世界」ともに社屋とその設備一切を焼失し、日米は王府第八街の太平洋印刷社（當時竹下靜馬經營）に據り「新世界」は同じく王府第七街ゼファーン街角に假事務所を置き、桑港ヘイト青年會所有の活字を利用して兩紙とも應急的に半紙大のものを發行、緊要記事のみを掲げて續刊した。但しその回復は案外に早く數ヶ月を出でずして舊態に復し得たが、前述の如くこの震災を機として新事業の劃策を誘致するに至り、各事業が舊地盤を失ひ又は事業縮少の餘儀なきに至つたを好機として、一部野心家は諸方面に新しく手を染め始め、新聞界に在つてもその例に洩れず、以下に説く二三の例は即ちそれであつた。

櫻府日報 櫻府（サクラメント）は加州々都であり、古くは金鑛により、後ち農業の中心地として繁榮し、夙に邦人も多きを數へたため、桑港に於て發行の「日米」、「新世界」兩社は早くより櫻府に支社を設置して一勢力を有してゐた。一九〇六年桑港震災後に設立された「桑港新聞」も櫻府に支社を置き水谷萬嶽（開教使出身者）を主任とした。水谷は自ら獨立の日刊紙を創立する計劃下に、同年十月、櫻府自由活版所（岡繁樹經營）に於て小型二頁の「櫻府新報」と名づくる桑港新聞櫻府版を發行し、これを「桑港新聞」ともに櫻府市内外に配布しつゝあつた。翌一九〇七年一月に至つて自由活版所主岡繁樹は「櫻府新報」の印刷を斷はり自から小型四頁の「植民新聞」を創刊した。これが櫻府に於ける獨立新聞の嚆矢であつた。但し同紙は三ヶ月後に廢刊され、續いて水谷萬嶽は官川活版所の印刷によつて小型二頁の「櫻府日報」を發行した。即ち一九〇七年三月であつた。其後水谷は櫻府に於ける佛教會の勢力によつて新たに日本より活字を購入し、同市エス街三一二番に社屋を移し普通型四頁紙として逐次充實を示した。一九二三年に至つて櫻府日本人會に内紛生じ、これを機として廣島派の武田久太郎、沖健二ら中心となり、水谷より

「櫻府日報」を買収、先づ武田は社長として數ヶ月活動し、次いで沖健二これを繼承、一九三九年まで繼續、同年五月に岡繁樹これを買収した。

桑港新聞 地元桑港に於ても一九〇六年藤井宏基（天彩）は「桑港新聞」を發刊した。藤井は紙面の嶄新を期して種々の新趣向を凝らし、渡米直後の中村吉藏（春雨、後ち故國文壇の一將となる）もこれに入つて助力し、酒豪の名あつた大塚則鳴らも馳せ参じ、美人投票或ひは十傑投票などを試みて活躍し、震災を機として桑港は又も三新聞を持つに至つた。但し一九〇九年金融界の恐慌來に會するや邦人經營銀行の倒産とよもに、新聞事業家は直接打撃を受け、桑港新聞の如きも藤井の手より吉岡金太郎、石川福太郎等に移り、藤井自身は記者として居残つたが、翌一九一〇年羅府に野菜市場問題の紛擾發生とよもに羅府に赴いて後述の「羅府毎日新聞」を經營するに至つた。なほ、「桑港新聞」は後ち吉岡等の手より更に光勢耕作（後ち羅府日本人會長）に移り、二宮利作（屏巖）は主筆として活動したが、二年後の一九一二年遂に廢刊し、桑港は二新聞の舊に復した。

羅府毎日 羅府に一九〇四年、日刊「大鐵新聞」が生れ、翌年「羅府毎日」と改稱、脇嘉吉、平原豊らこれを繼承經營したことは既に述べたが、沿岸新聞中同紙の如く波瀾曲折のうちに經營者の轉々したものは稀であつた。即ち前記の脇、平原らは久しからずしてこれを河原愛嬌、東平一郎に移轉し、間もなく南加印刷所に轉じ奥住猶文の主管となり、次いで西方朝三これを經營し、更に澁谷雪郷、小野純文等に轉じ、遂に桑港より赴いた藤井宏基の手に委ねられた。然るに外來者とも謂ふべき藤井によつて「羅府毎日」の經營されることは南加在留邦人の豫想せざりし所であり、そこに自から別派の擡頭を生じ、更に一新聞「朝日新聞」を生むに至つた。

朝日新聞 前記藤井によつて「羅府毎日」が經營さるゝや、これに對立する一派は一九一〇年田中彦三を社長とし、小野純夫、馬場天童ら協力の下に「朝日新聞」を起した。斯くて羅府には「羅府新報」「羅府毎日」「朝日」の

三新聞鼎立を招來し、更に宮村碧山の「日曜新聞」、佐村の主宰する「勞働新聞」兩週刊紙あり、桑港震災の結果南下移居せる人々によつて羅府の邦人々口は相當數を増加したと言へ、この多數新聞の竝立を仰ち、藤井天彩先づ敗戦して羅府を去り、伸展を目指して八頁に擴張した「羅府毎日」次いで間もなく廢刊するに至つた。

國民新聞 前述「羅府毎日」廢刊後に殘された活字は、一九一一年プレスノ市に起つた不敬事件（第二篇第五章「宗教欄参照）の餘波より併生した「國民新聞」に用ひられる結果となつた。即ち右不敬事件が世の聳々たる論難的とななるや、桑港「新世界」を退いて以來米人家庭に就働整居してゐた副島八郎の蹶起となり、王府の池田貫道布市の平智山等と協力呼應して王府を本據として帝國臣民義會を結成、騎虎の勢ひを驅つて同年日刊紙「國民新聞」を創刊、忠君愛國を強調、不敬一派糾弾に侃々論陣を張つたが、翌一九一二年不敬事件の終焉とよもに「國民新聞」は維持經營に困難あり間もなく廢刊されるに至つた。

中加時報 これより先、布市には若尾峽南（山梨出身）の主宰する「中加時報」があつた。同紙はプレスノ活版所（一九〇六年創立）主土井丙藏の創刊に係るもので反佛教系であつた。偶々上記不敬事件（基督教系）勃發とともに同紙も種々の迫害を受けた。（某日一團の愛國黨が同社を襲つて器具を破壊し、若尾に負傷せしめた、この時若尾は「若尾死すとも正義は死せず」と叫んだと言はれ、當時一般の昂奮状態を偲ぶ好個のエピソードとされてゐる）なほ「中加時報」は若尾の手より川島伊佐美（天涯）に移つて經營されたが、一九二三年偶々同紙に「水平」云々の記事掲載より物議を生じ、遂に川島は同紙を福島雷次郎に譲渡し、更に河西英治を経て長岡重彦これを繼承して今日に及んでゐる。

北辰 夙に桑港に「新世界」を起し、また前項記述の「國民新聞」を刊行した副島八郎（鐵堂）は。同紙の廢後を承けて操觚界に再起したのは「北辰」に依つてあつた。「北辰」は池田貫道の協力を得て一九一三年の創刊に

係り、謂は前記「國民新聞」の衣鉢を繼いだものと見做すべく、後々の氣骨を紙面に示して續刊すること十三ヶ年副島はメキシコへの進出を企圖し「北辰」は一九二六年四月大澤榮三（博信社社長）の買収するところとなつた。（副島は後ちメキシコに於て兇漢の爲め非業の最後を遂げた）なほ大澤の手に移る以前「北辰」は暫らく村井蚊（非物）海老名一雄（春舟郎）等によつて編輯された。大澤は「北辰」を「桑港週報」と改め、坂本正雄、木下壽夫、安曇穂明によつて順次編輯續刊され、一九二八年十二月大澤榮三の死去と、もに翌年二月安曇穂明これを繼承、紙面を刷新し文藝味を多分に盛つて異彩あるものとしたが、四年後週刊を廢して月刊雜誌となし、誌名を「ニッポンとアメリカ」と改題、今日に及んでゐる。（後記参照）

北米評論 曩に述べた中加布市の不敬事件に際して、副島八郎らとともに「國民新聞」を發行活躍した池田貫道は、同紙廢刊後、副島を助けて「北辰」を起し、幾干もなく自から王府に週刊「北米評論」を創始した。即ち一九一三年四月のこと、これには前記不敬事件の際に結成された「帝國臣民義會」の支援が僅少でなかつた。「北米評論」は爾來終始池田の主宰するところであり、アラメダ並びにオークランド學團事件、王府日本人會、同佛教會等の諸事件に常に義と信する所に筆陣を進め、爲に外部より壓迫を受けたことも屢々であつた。（後記参照）

新時代 「北辰」がなほ副島の手にあつた一九二四年八月、同誌客員格たりし村井非物、海老名春舟郎は新たに隔週誌「新時代」を創刊、主幹村井、監修海老名の陣容下に、青海川龍一、土田三太郎、安曇穂明、松枝空太郎等の新知識を准同人として斬新味を盛り、後期の半ヶ年は安曇穂明これを編輯したが、二ヶ年後の一九二六年八月廢刊した。

アメリカ新聞 一九二八年十月、金門印刷主岡繁樹は小型の「アメリカ新聞」を發刊した。同紙は以後不定期刊行物の形式としてゐたが、一九三八年二月より週刊として續刊、翌年五月「櫻府日報」を買収するに及び同紙に合併の形ちとなつて休刊された。

スタクトン・タイムス 一九一四年頃スタクトン地方は牛島謹爾の威大いに揮ひ、附近農耕地の開墾成り、邦人の數、事業ともに伸展したが、牛島を主導力とする一黨の勢力擴大を快しとせざる一派あり、當時スタクトン市に印刷所を有し居たる中村眞率發行者となつて一九一四年（大正三）に至り「スタクトン・タイムス」と名づくる小型週刊紙を創刊した。紙上には素より牛島一派攻撃の記事を續載したが、のち漸く報道機關たるの態を備へ、漸く發展途上にあつたところ、一九二二年明治大帝崩御の御事を公報以前に英字紙より譯載して不敬事件を起して中村は引退し、小室昌一（東涯）これを繼承、週刊を隔日發行の大型四頁となして續刊、一九三五年に至つて「櫻府日報」と合同した。（後記参照）

羅府新聞界 羅府に於ては一九一三年遠藤紫朗によつて「大正時報」が發刊され、一九一五年には佐村福植によつて四頁夕刊「北米報知」發刊され、「羅府新報」「朝日新聞」「北米報知」の三日刊紙の爭鬪時代に入つた。更に一九一九年には日本人會選舉競争の副産物として増田宇外によつて「日米時報」發刊され、羅府に刊行物の起伏間斷なかつた。後ち「北米報知」は四頁より六頁に擴大され、各社各々競争を展開したが、一九二一年經濟界の動搖來により「朝日」先づ廢刊し、翌一九二二年には「北米報知」墜落し、氣息奄々たる中に桑港「日米」に買収され、これが母體となつて後述の「羅府日米」を生むに至つた。

羅府日米 桑港「日米」社長安孫子久太郎は夙に南加に進出の希望を懐いてゐたが、一九二二年出版の「在米日本人名辭典」によつて相當額の資金を握るや、前記の「北米報知」を買収し、一九二二年「桑港日米」の姉妹紙として「羅府日米」を創刊した。支配人湯淺銀之助（龍門）采配を振り、編輯長に海老名一雄、記者に西方長平（更風）等を本社より送つて筆陣を張らしめた。のち島内良延（逆浪）は布市支社主任より轉じ來りて主筆となり、更に安孫子社長の依頼を受けて島内は寧ろ運営上の支配を司ることとなり、既に地盤を有する「羅府新報」に對抗して、

爾來拮据經營十餘年一九三二年に至り「桑港日米」に勃發せる従業員の總罷業の餘波を受けて遂に廢刊の止むなきに至つた。(後章参照)

南加タイムスと水平時報 なほ羅府に於ては一九二四年松本本光は週刊紙「水平時報」を出したが、幾干もなく廢刊した。また「羅府日米」記者たりし榎井喜左衛門(一劍)は一九二六年七月大型タブロイド版週刊紙「南加タイムス」を發刊、社會批判的方針下に同胞社會の情實面などを屢々剔抉し、或ひは社會事象を捉へて敷衍し、異色ある週刊紙として相當數の讀者を有したが、一九三〇年三月に至つて廢刊した。

南加沿岸時報 羅府以外の南加州唯一の新聞にはサンビドロ(散港)に「南加沿岸時報」がある。同紙は一九一五年創立の「サンビドロ・タイムス」を一九二七年繼承して改題發行されたもので、社長平賀重昌、主筆石田浩劍、サンビドロ市ターミナル・アイランドにて發行、今日に至つてゐる。(後記参照)

日米新聞社爭議と新聞界の變動

一九三〇年前後の經濟界不況は邦字新聞にも大打撃を與へ、第一紙を誇つた「日米」新聞社の如きも、賃銀の停滯漸次社員の不滿を醸し、一九三一年六月に至つて端なくも四至本編輯長不信認事件が起きた。安孫子社長は社内空氣の不穩を察知し、従業員側の要求を保留、間もなくその要求を斥けるとともに首謀者と目して三編輯部に退社を求めた。茲に於て従業員側は協議會を開いて交渉委員を送り、安孫子社長に對して(一)誠首者の復職(二)現存四記者の辭任(三)未拂給料の支拂ひの三點を要求した。但し社長はこれを容認しなかつたため遂に罷業は開始され、七月廿八日には「爭議真相發表演說會」を開いて氣勢を揚げ、日米社もまた諸種の對抗策を考究した。事態惡化とともに罷業側は「従業員ニュース」なる小型日刊紙を發行して宣傳に努め、また安孫子社長經營の姉妹紙「羅府日米」

社従業員に働きかける目的を以て南加訪問を試みることにし、一部を残して大部分の團員は羅府に赴いた。この結果「羅府日米」の従業員約半數は後ち罷業に入つた。

全社員に退社要求 桑港に於ては小池實太郎、山縣繁三ほか二三は、調停に起つて斡施したが解決に至らず、八月十二日安孫子社長は「整理一切を小池に一任、整理後再行豫定、その時期未定」との聲明を發表するとともに一應全社員に退社を申渡した。右の措置は調訂者間にも動搖を來さしめ、事件は更に錯雜かと觀られたが、日米社は間もなく罷業以外の舊社員並びに新雇備のものを用ひて四頁新聞を發行した。これを聞知した南加滞在中の罷業團は應急委員四名を歸桑せしめた。右四人は途上サンタマリア附近に於て乗車を顛覆し、委員の一人奈倉弘(二二)は即死し他の三名も負傷、サンタマリア病院に入つた。右事故は羅府殘留の罷業團員に深刻な衝動を與へ、遂に全員羅府を引揚げて歸桑した。

羅府日米の賣却 罷業團側は八月末に至つて委員二名を羅府に送り、未拂賃銀債権を以て安孫子社長兼營の「羅府日米」に對して差押へ手續をとつた。但し未拂賃金は桑港に於て支拂はれたため、間もなく右差押へも解かれたが、「羅府日米」は後ち渡邊鴻陽らに賣却され、總て「新日米」と改題幾干もなく廢刊となつた。(別項刊行物の章参照)一方「日米」社は同社の最大債権者たるセラバック紙會社が法的手段を以て日米社擁護の方策を執り、萬一を慮つて米國官憲による警戒を附して新聞を續刊した。

罷業員一應復職 其後多くの曲折を経て九月廿一日に至り罷業側社員の復職となつて事件は一應解決と見へたが、セラバック社による抵當權回收手續の執らるゝに及んで全社員は退社せしめられた。尤も日米社側は直後に於て罷業側以外の社員を再雇備して八頁新聞を刊行した。よつて罷業團員は再び失職し再度爭議に移つた。但し既に妥協の見込なきを知つて新日刊新聞の創刊に進み、同年十二月十九日、海老名一雄を中心とする四頁日刊紙「北米朝日」は誕

生した。

日米社争議の影響 この争議は桑港に於ては「北米朝日」の出現によつて一段落の形ちとなつたが、羅府に於ては「羅府日米」の罷業事件とともに、遠山則之を社長とする日刊八頁紙羅府報知現はれ、また「羅府日米」の後身たる「新日米」出で（後ち二紙とも廢刊）別に藤井整を主宰者とする日刊紙「加州毎日」が生れた。（後記参照）これらは孰れも日米社罷業に原因する同業界の起伏であり、また右争議には前述の如き變換招來とともに、争議の期間に於て外人勤勞系の應接あり、滯米中なりし淺原代議士一行の間接参加あり、或ひは死傷者を出し、傍系連累者間の確執起生など、その及ぼした影響廣く、その規模性質ともに邦人間最大の罷業事件とされ、また稀有の社會紛争と言はれるものであつた。

北米朝日出づ

前述の如く日米社罷業團員は最早や復職の餘地なきを察知して新日刊の創刊に進み、賛成派の團員約卅名はポスト街に社屋を求め、東洋印刷所の設備使用交渉纏り、一九三一年十二月先づ日刊四頁の「北米朝日」第一號を世に送つた。而してその創刊に努力した中心人物は海老名一雄（春舟郎）信藤寛其他であつた。恰も同年九月滿洲事變勃發し、東洋の一角に世の視聽集注され、新生「北朝」はよく健闘し、幾干もなく羅府より「加州毎日」編輯長を辭せる井上勇の來り加はるあり、一九三二年には社屋をラグナ街に移して擴張、また日本より新活字を購入し一九二四年に八頁となり、ゲリー街に社屋を再移轉しその存在は逐次重視されるに至つた。

新世界Ⅱ北朝合同

この間「新世界」社も不況時代の打撃をうけたが、セラバック紙會社は「日米」に對すると同様、「新世界」に對しても有力債權者であり、偶々勃發の「日米」社罷業事件と表裏相關々係を生じ、舊債に對する抵當證書の書替へ問題で社と争ふに到り、一九三二年九月に至つて社は「新世界」に對して抵當權回收手續を執つた。このため在米邦字紙最古の歴史を誇つた「新世界」社は遂に續刊卅八年の幕を閉づるに至つた。依て「新

世界」關係者等は總務三原時信等に協力し其再組織に進み、ゲリー街に新社屋を選定し、青木道嗣を社長に畠山喜久治を副社長に阿部豊治（前新世界社長）を主筆とする「新世界日日新聞」を發刊し、岡垣吉太郎、太田敏夫等も經營の任に當つた。また「日米」は罷業事件後漸次正常を回復し、「北米朝日」また徐々地盤の擴張に餘念なく、斯くて三社鼎立のまゝ推移しつゝあつたが、一九三五年六月六日「新世界日日」及「北米朝日」の兩社は同合を斷行し、新たに「新世界朝日新聞」と改題、一舉に兩社の人員、設備に讀者を合せて大新聞となり、社屋は舊北朝のそれを用ひ六月廿日を以て合同第一號を刊行した。

羅府新聞界の變動 「桑港日米」紙の姉妹紙たりし「羅府日米」は上記の如く「日米」社罷業事件の爲め創刊以來十年にして廢刊されたが、これを買収した渡邊鴻陽は鈴木庸等とともに同紙を「新日米」と改題して八頁紙を續刊したが、當時の不況と邦人社會の不安定下に經營の困難を來し數ヶ月にして廢刊した。これより先き遠山則之、泉寛吾、室中治夫等は「羅府報知」なる八頁日刊紙を發刊し、機を制して伸張を圖つたが、永續せず月餘にして廢刊された。

加州毎日生る

前記「羅府日米」従業員中「桑港日米」の罷業に同情罷業をなせる井上勇、加藤新一、中村秋季、松井豊藏等以下は一九三一年九月以來、桑港の罷業に呼應の形ちをとつて争議を續け、従業員報の如きものを刊行しつゝあつたが、同年十一月藤井整の傘下に集合して新たに日刊紙「加州毎日」を創始し、同月五日第一號を世に出した。同紙は編輯長井上勇らによつて新鋭氣分を漲らし、よく第一新聞たる「羅府新報」に拮抗し今日に及んでゐる。

日米社罷業再發

「新世界日日」及び「北米朝日」兩社の合同によつて桑港二新聞時代は再來したが、「日米」社は第一回罷業に因る創痕未だ完全に癒えず、また安孫子社長は健康を害して概ね第一線を退き、罷業事件によつて

有力債権者となつた保坂光重入つて支配人となり、更に「羅府日米」廢刊後、日米羅府支社主任たりし島内良延來り幾千もなく總務の席に就き、紙面を十頁として社運の挽回を圖つた。此間安孫子社長の病篤きを加へ一九三六年五月遂に世を去つた。即ち一八九八年創刊以來同社長とし、且つ邦人社會の先覺者たりし同社長の長逝は一巨星墜つたの感を與へたものであつた。安孫子社長の死後は夫人安孫子約奈子事業を繼承した。越えて一九三七年末には組織變更をなさんとして従業員の反對に遭ひ、その結果一九三八年一月に至つて編輯、事務、工場三部長誠首事件發生し、稍々久しく紛擾を續けたが社側は容易に三部長の復職を肯んぜず、爲に同年三月、利害意向を同じふする従業員は三部長に同情罷業を起し、茲に「日米」第二回の罷業事件は發生した。罷業團は争議本部に據つて約一ヶ月争議を續行、(此間新聞休刊せず)後漸く調停成つて無條件復職した。素より右争議には一九三一年のそれに比し規模小であり社會的影響も僅少であつた。

日米社出火

一九三九年六月十二日早曉エリス街の日米社々屋四層建物は原因不明の出火の爲め殆んど全燒の災禍に遭ひ、社員二名の燒死者を出し、設備大半は灰燼に歸した。依て同社は上町日本人町に假事務所を設け、新聞は金門印刷所及び王府「北米評論」社工場に於て應急二頁紙を發行、次いで四頁紙となし、間もなくサター街「保坂ビル」(日米社株主保坂光重所有、活字設備あり)後記参照)に移り、事あつて再びブッシュ街に轉じ、新活字の購入後八頁となした。この間エリス街の舊社屋は保險金によつて復舊工事進捗し、同年十二月新裝成つて舊社屋に復歸今日に及んだ。(後記参照)

加州外の邦字新聞及び刊行物

在米邦人各般の事業は加州を最とすること刊行物に於ても同様であり、たゞワシントン州方面は邦人の發祥古く新

聞事業も夙に相當の發展を示してゐるほかは、讀者數に於てその範圍に於て素より加州と同日の談でないこと極めて自然である。左に加州外の刊行物を一括敘述するであらう。

絡機時報

一九〇七年(明治四十年)ユタ州オグデン居住の飯田三郎(桑港日米銀行オグデン支店長)は山中部に新聞の必要を感じ赤澤赤人を援けてミメオグラフ刷りの「絡機新報」を發行したが、第三號を以て惜しくも廢刊となつた。偶々飯田の實弟飯田四郎は實兄の懇意に應じ齋藤功の援助を得、鹽湖並びにオグデンの有力邦人の賛同下に新聞事業を繼承することとなり、編輯所をオグデンに置き發行所を鹽湖市に設け、同年九月十六日活字刷第一號を世に送つた。當時同社には印刷設備なき爲め草稿を羅府に送り「羅府毎日新聞社」に印刷を依託し、週一回發行を續けたが、翌年三月羅府より舊活字を購入、印刷機を設置し週二回の發行となし、爾來着實なる伸展を續けて山中部邦人社會の報道指導機關として重視されたが、一九二七年「ユタ日報」これを買收合併し、續刊二十年の歴史を閉じた。

ユタ日報

一九一四年十一月三日、寺澤呷夫は前記の「絡機時報」に遅ること七年にして同じく鹽湖市に「ユタ日報」を創刊した。約一ヶ月は山崎東夢、菅回天も共同經營者であつたが、後ち寺澤の單獨經營となり、専ら「絡機時報」と同様、ユタ、アイダホ、ワイオミング、ネヴァダ諸州邦人社會に地盤を張つた。一九二七年に至つて前記の如く「絡機時報」を買收して山中部唯一の日刊新聞となり、同地方邦人の期待は尠少でなかつたが、山中部方面の在留邦人は逐年その數を減ずるとともに同紙も日刊としての經營を週三回刊行に變更、一九三九年寺澤社長死後は夫人寺澤國子事業を繼承して社長に就任し同時に從來の單獨經營より株式組織となし、副社長に足立博愛、事務長兼編輯長に足立光公を据ゑ、内一回の英文欄を設けて健闘中である。

格州時事

コロラド州デンヴァー市にて發刊されつゝある「格州時事」は一九一三年の創立に係り、山東部(コ

コロラド、ネブラスカ、ワイオミング東部)の在留邦人を讀者としてゐる。初め山東部在留邦人の多數であつた時代は日刊四頁紙であつたが、其後邦人數の減退ととも經營を縮少し、現今週三回の發行となつた。中川角太郎、貝原一郎等はその社長として經營に當つた。これより先きデングヴァーには「コロラド新聞」、「傳馬新報」があつたが、孰れも永續せず、兩社合同して「山東時報」となり幾干もなく廢刊された。

紐育週報

ニューヨークに於ける邦人新聞の鼻祖は一八九七年の頃、在留の大學生松本默が騰寫版を以て「紐育週報」を發行したに始まり、池田五六(後年桑港新世界社長となる)と足達竹馬等はこれを授けたが幾干もなく廢刊となり、一九〇四年頃守屋賢吾は支那人印刷業者並びに米人タイラーなるものと提携し、支那人所有の活字を利用して、タイラーを印刷の任に當らしめて「紐育時報」なる週刊新聞を發刊したが、これも經營困難のため一九一〇年廢刊となつた。

日米週報

一九二二年八月、星一、福富正利の兩人は「日米週報」と名づくる週刊紙を發刊したが、當初は四頁大の石版刷りであつた。一九〇四年セントルキ萬國博覽會の開設に當り一社を擧げて同地に移り、萬博文藝館内に於て十六頁大の和英兩文の週報を發行した。萬博閉會後再び紐育に移り星の歸國後安樂榮治その經營に當り、安樂また歸國するに及んで中原斗一これを繼承した。爾來川口一夫、次いで江頭勘三の手に移り、一九一六年に至つて高見豐彦、西富祐吉の共同經營となり、更に小森文輔これを經營した。

紐育新報

一九一〇年「紐育時報」廢刊後甲斐健一は林富平とともに「紐育新報」社を創立し、一九一一年六月廿二日初めて四頁大の週刊新聞を刊行した。これが後年の「紐育新報」の起原である。發刊當時はニューヨーク市郊外ヨンカース町の米人印刷所に於て四百乃至五百を印刷し、これをニューヨークの本社に運び來つて發送した。一九二二年に至り新たに活字を日本より輸入して自力印刷とし、また英文を添へて一時八頁となしたが收支償はず再び

四頁に復した。一九一五年一月甲斐歸國の爲め千本木正治經營に當り、翌一九一六年千本木の歸國後水谷涉三新たに社主となり、一九一七年週刊を週二回刊行に變更し爾來擴張を續けて現時に至つた。

東洋通信其他

日露戰爭後、世界に日本を正解せしむる必要生じ、ニューヨークに在つては主として高峰讓吉博士、ロンドンに於ては郵船支店の根岸鍊次郎ら故國の有力者に海外平和宣傳の必要を力説し、政府部内にあつては伊藤博文公もこれを必要として朝野に勸説した結果、京濱の實業家二十名協力下に年額一千圓宛を贈出し、先づニューヨークに經濟通商の通信事業を起すこととなり、頭本元貞は馬場恒吾を伴ひ一九〇九年ニューヨークに入り、當時文部省留學の期滿ちてロンドンに在つた本田増次郎加はり、頭本は澁澤榮一(實業團長)に隨つて米國各地を巡歴し、小規模の新聞通信が他の有力なる同業の勢力と競争することの至難なるを發見、月二回發刊の英字雜誌を米國政府部内及び民間新聞通信に配附することに定め「東洋經濟評論」と名づけて一九一〇年十一月第一號發行され、一九一一年二月の第八號より「東洋評論」と改稱した。蓋し經濟記事のみを以てしては他の有力雜誌との競争は不可能であつたからである。右雜誌第二號出版後は頭本社長歸國し本田増次郎これに代り、一九一一年十一月第一號より月一回發行として漸く讀者の注目を惹くに至つたが、一九二二年十二月號を以て資金窮乏によつて廢刊の止むなきに至つた。一方邦字雜誌としては一九〇七年六月朝井外門、中村吉藏(春雨)兩人が月刊雜誌「大西洋」を發行したが間もなく廢刊し、一九一二年渡部民三はコネクチカット州ニューヘヴンに於て評論雜誌「日本人」を發刊した。また紐育日本人教會の月報なる「進歩」、教師松永文雄と大堀篤の共同編纂に係る「東光」なども發行された。

央州日報

オレゴン州ポートランド市に於ては一九〇四年、印刷所米眞舎(下村眞鋤經營)より週刊「オレゴン新報」が發行され、其後週二回の新聞として續刊してゐたが、一九〇七年阿部豊治(照洋)これを經營するに至つてポートランド市有志の後援により、翌一九〇八年米眞舎を買收して央州印刷所を起し央州日報と改題、日刊新聞に

進展した。更に従來の四頁を六頁に擴張して現在に及んでゐる。中央同胞間の有する唯一の報道言論機關である。社主阿部豊治、社長小山巖、主筆中島勝治。

タコマ週報

ワシントン州タコマ市に於て發行される『タコマ週報』は一九二二年二月十一日藤本吉三郎、飯野道眞呂によつて發刊された月刊雜誌『タコマ』に始まる。越えて一九一四年五月大塚俊一はこれを繼承して『タコマ週報』と改題、四頁紙を發行、翌年十二月に至つて更に『タコマ時報』と改め、一九二〇年には週刊を日刊紙に擴張したが、一年餘にして経営困難より日刊を廢し名を『自由』と改め、小型十六頁の週刊雜誌として續刊した。二年後の一九二二年五月に至つて『タコマ週報』に復名し、四頁の週刊新聞として再起一九二六年八月、繼續經營十二年の大塚俊一歸國し、新村安彦これを繼いで一九三四年二月に至るまで續刊したが、新村は南米アルゼンチンに移住し、後繼者なく同紙は一時中絶するに至つた。但し邦人間に再刊を望む聲援し、同年七月印刷業經營者なる福井周一、村井勇吉共同を以て『タコマ週報』の名を踏襲再刊した。翌年福井退社して村井單獨經營となり、一九三九年村井歸國の爲め再び福井周一の經營に復歸して今日に及んでゐる。

シアトルに於ける刊行物の變遷

シアトル週報

シアトルに於ては一九〇七年（明治卅年）頃、村上十太郎、島村久之助ら發起し有志廿數名を糾合して日本人會類似の團體を結成し、その機關紙的役割を持たしめた『シアトル週報』なるものを前記村上が藪版を用ひて發行し、島村久之助、山田鈍牛ら執筆した。但し右團體の短期消失とともに同紙も永續せず廢刊されたが、これシアトルに於ける出版物の嚆矢であつた。更に一九〇九年十月野間里治、遠藤源吾が興味本位の雜誌『おもしろ誌』なる謄寫刷り週刊紙を發行した。遠藤はシアトル日本人會最初の書記であり、文才もあり、當時の平出商店（現

ユニオン停車場前）を本陣とした。間もなくボートランド浸禮教會幹事であつた秋山某や植原悦二郎もこれを助け、植原は執筆とともに集金係りも兼ねた。翌一九〇〇年末に至つて早川萬次郎並びに濱岡文治らはこれを譲り受け、晝家中山も加はり、着色五度刷りにボカシなどを入れて特色あるものとして刊行した。従つて同誌は比較的永續し、一九〇二年六月に活字購入に成功した。その経緯は前記濱岡の知人佐久間が東京秀英社の當時の社主であつたため、容易に購入し得たのであつた。云ふまでもなく活字のシアトルに輸入された最初のものであつた。斯くて活字を得た『おもしろ誌』同人は飛躍を期し、誌名を『西北新報』と改め、濱岡は事務と社會面を擔當し植原は翻譯に任じた。間もなくシカゴ大學在學中であつた坂上幽花來つて主筆となり、社屋を第七街、デアボンの角近くに移轉した。

西北新報

然るに『西北新報』の前身『おもしろ誌』時代からシアトル邦人勢力が二分され、日本人會機關紙なる『日本人』——後ち『新日本』となつた——が、東洋貿易社を背景として論争を續けてゐたのであつた。斯る間に『おもしろ誌』が『西北新報』となるや、東洋貿易社中最も勢力のあつた築野兄弟の人身攻撃をなし、爲に『西北新報』は築野より告訴され、社長は名譽毀傷罪により禁錮處分を受け、坂上主筆は實弟とともに再びシカゴに遊學を志して退社し、權太なる遊び人は何者かに使噓されて『西北新報社』の活字を顛覆する事件を演じ、暴行罪として收監されたのもこの頃のことと屬する。同紙は間もなく再刊されたが遂に一九〇三年新年號を最終として廢刊した。同社の活字と機械は、曩に東洋貿易社と『西北新報』との確執を仲裁調停した服部綾雄が買収した形式となり、現今のリチモンド・ホテル附近に於て『西北新報』を再刊した。社長は伊東壽一郎、記者としては宮崎湖處の弟、佛語に堪能な澁谷馬頭らが執筆したが、同業『北米時事』並びに『新日本』と鼎立することは結局に於て経営困難を來し、遂に活字は古屋商店の手に渡り『西北新報』は完全に亡んでその活字によつて古屋印刷所が生じた。

北米時事

東洋貿易社を背景とした日本人會の機關紙として『日本人』が一九〇一年に發刊されたが、初代

の日會幹事遠藤源吾去つて渡邊萬藏就任するや渡邊の献策によつて同紙を山岡晋高の手に移し「新日本」と改題し、活字刷日刊紙となつたのは一九〇二年十二月のことであつた。「新日本」の命は短かつたが、その反面には「日本人會の機關紙」であることに反感を持つた隈元清、平出倉之助、矢田貝柔二、山本一郎らが出資して新日刊新聞「北米時事」が生れた。山田作太郎（鈍牛）が歸國して活字を入手歸米し、機械は月賦支拂によつて購入し、山田主筆となり元郵便報知新聞記者馬村、中山安太、米國文學士弘田一郎、著作家坂本喜久吉（春峰）大西彦巳（南岳）などが編輯に當り、山崎寧（カナダ大陸日報創立者）川崎信一郎らが事務を司り、ジャクソン街平出商店階下に於て初號を發行したのは一九〇二年九月一日であつた。一九〇五年に初鹿野梨村、青柳らが勞働争議を起したが、時の社長隈元清は條件を容れず、記者側は連袂退社事件が発生した。依てニューヨークより藤岡紫朗を迎へ、荒井建彌入つて社説を書き、東洋貿易の工藤今次郎は翻譯を擔當し、興業社の鈴木など活動して發刊を繼續した。斯くて「北米時事」は一九〇一年以來「年鑑」を發行し、一九一五年一月に至つて日曜版を加へて伸展を續けた。一九一三年隈元社長は歸國に先立ち社の陣容を改造、有馬純清、杉尾正一を加へて三人共營と改めたが、一九二〇年に至つて完全に有馬の手に移り、後ち息純義及び純雄の代營となつて今日に及んだ。

旭新聞生る 一九〇五年に「旭新聞」が新たに生れた。が、これは雑誌「玉手箱」を母體として發生したものであつた。「玉手箱」は一九〇三年十月、師岡紫紅、山下雅英（狂人堂）瀬戸岡敦、濱岡文治、成石義一らが狂人堂を本陣として發行した純文藝雑誌であつた。偶々日刊「旭新聞」發行の議纏り、社長伊東壽一郎（精堂、後ち照崎に復姓）共同出資者は篠原吾一郎、土屋瀧三郎（蘆水）であり、主筆師岡紫紅、事務一切は濱岡文治の陣容を以てデアボン・ホテルの地下室を社屋として一九〇五年三月一日第一號を世に送つた。後ち師岡去り、上田臺蔭代り阿部豊治（照洋）入つて主筆となり、間もなく輪轉機を使用と、もにメーン街に移つた。後ち阿部オレゴン州に去り、加藤十四郎

（肥峰）桑原閑談、名取稜々、飯野五洋らが編輯に當つた。一九〇五年三月五日、片山景雄（風雲）は「アメリカ」なる月刊雑誌を發行したが、後ち旬報とし更に週刊に進め、一九〇八年三月の三週年記念日より「あめりか新報」と改題して新たに日刊新聞となつた。同年また日刊紙「華州日日新聞」が創刊され高橋櫻州、官田虹雨、太田虹村、鈴木康三らが執筆した。

斯くてシアトルの新聞界は「北米時事」、「大陸日報」、「旭新聞」續いて生れた「あめりか新報」及び「華州日日」の四紙が存在し、各々地盤の伸張に努めつゝあつた折柄、一九一三年十一月不敬事件勃發し、北米時事、大北日報、旭新聞三社が三巴となつて抗争を續け、遂に故國當局の注意するところとなり、太田房太郎送還問題生じ、領事高橋清一これに干與して餘波古屋銀行に及び、旭新聞強効決議となつた。茲に於て「北米時事」、「華州日日」、「大陸日報」支社、「加奈陀新聞」支社、「あめりか新報」と共に「旭新聞」もまた署名して記事統制の合議成立したが、この時既に「旭新聞」發行兼編輯人たる吉村平太郎は少女兒玉セイ事件の記事によつて檢舉され、井上良民、井上織夫、岡崎福松の三牧師、岡島金彌、秋吉辰次郎、古屋政次郎、高橋徹夫ら百方調停を試みたが及ばず、吉村は有罪判決を受け、これを契機として「旭新聞」は没落の一途を辿つた。越えて一九〇九年一月一日竹内幸次郎（青樹）は日刊紙「大陸日報」を創刊した。爾來二十餘年、一九三三年七月同人永眠まで社長として活動、歿後川尻慶太郎社長となり、一九三九年一月以來竹内の長子千尋新たに社長となつて今日に至つてゐる。

シアトルに於ける雑誌の變遷 既に説いた如くシアトルは邦人夙に定住してその歴史古く、附近に多數邦人居住して加州に次ぐ一社會を形成し、新聞と、もに雑誌も早くより發刊された。左にその主なるものを掲げる。「シアトル週報」は西北部最初の雑誌として一八九七年に發行し、續いて「おもしろ誌」並びに「玉手箱」が現はれたことは上記新聞の項に於てこれを説いたが、前記「シアトル週報」に遅るゝこと二年の一八九九年、山田作太郎

(鈍牛)は滑稽雑誌『ドンチキ』を発行した。これは諷刺的評論滑稽を主としたもので、爾來百廿三號まで續刊し、一九二一年一月彼の死とともに終つた。(山田鈍牛は東京の人、作太郎は其本名である。彼は明治廿九年ヴィクトリアに至り、卅二年雑誌『ドンチキ』をシアトルに於て發行した。鈍牛は滑稽諷刺文の大家で沿岸彼の右に出でる者はなかつた。人物頗る恬淡、終日酒をあふり、塵埃濛々たる書齋に籠居して世を嘲り俗を罵つたのである。『鷲津尺魔評』續いて一九〇五年二月には領事館書記生芝間喬吉によつて『華盛頓』なるものが發行されたが間もなく廢刊され、同年片山景雄によつて出された『アメリカ』は後ち日刊新聞となつた。(新聞の項参照)。また初鹿野梨村は『北米時事』を去つて一九〇五年七月に『やまと』を發刊、青柳獄堂も同人であつたが、一九〇九年秋より年二回發行となり遂に姿を沒した。一九〇五年十月に至つて庄川昇之助は『日米商報』なる月二回刊行の雑誌を出し、後ち松見大八、植原悦二郎これを繼承したが、間もなく松見は古屋商店に入り、植原はロンドンに去つて深野春雨、森正次郎代つて經營、一九〇九年廢刊。前記山田鈍牛が米人電氣電話會社に代理人となつてゐて、年一回營業住所録案内に便覽式の記事を加へて『西北部日本人營業案内』を刊行し始めたのもこの頃であつた。

また本願寺開教使中井玄道は一九〇六年春『佛の教』なる月刊誌を出して佛教布教用とした。村山白洋が『シアトル誌』なる雑誌を刊行したのも同年春期であつた。一九〇七年師岡紫紅、松倉松影、大塚漁夫らは『天聲』なるものを發行し、後ち池田石佛がこれを繼承し一九一一年まで續刊した。一九〇八年日本基督教會牧師井上織夫が教會の機關雑誌として『みかど』を發刊、英文欄も加へ、後ち井上が日米興業、クラッカー會社を起すと、ともに同誌も改題して『日米時報』とし相當永續した。一九〇八年力行會支部の中村迷羊は『力行文學』を發刊、繼て『沙港文學』と改稱し數ヶ月續刊した。同年二月には岩村次郎が月刊『藝備人』を起し、廣島縣人會の機關紙として刊行、一九一〇年に至つて月二回の發行となし改題して『萬事報』と呼んだ。また佐々木勝成は勞働組合の機關紙として『同胞』を發

刊、太田虹村これを執筆した。

一九〇八年には橋口次平によつて『日本潮流』なる英文雑誌が現はれた。橋口はワシントン大學通學の傍ら發刊したものであつた。同年十一月には『あめりか新報』を退社した片山景雄が『日米評論』を發行、漢詩はこの雑誌の特色であつたが、一九二四年片山の病歿とともに廢刊となつた。一九〇九年二月、伊達北里、中川馬骨は『凸凹』なるものを企てたが、印刷半ばにして古屋政次郎らの壓迫によつて流産した。この頃美以教會からは機關紙として『北米教報』が發行され、牧師吉岡誠明の執筆に係るものであつた。組合教會の井上良民の『希望』同久布直勝の『喜峯』なる宗教雑誌を刊行したのも其頃であつた。一九一〇年、横山南山、宇野木人が『シアトル』なる月二回發行の雑誌を試み、後ち宇野去つて杉山變之丞これを繼承し、横山、杉山去つて濱口曉星が主宰した。更に後ち一旦中絶、竹島素水これを再興した。一九一一年一月には山岡音高主筆にかゝる『日米貿易時報』が生れ、繼て改題して『東西洋』と呼んだが永續せず廢刊した。同年同月緒方林蔵が『實業のアメリカ』を刊行したが四號にして中止した。一九一二年五月川尻北沢は家庭向きの雑誌として『家庭』を刊行、中島梧街がその後を繼承した。

大正年代に入つて、同三年(一九一四年)八月、大島枯楊が『時代研究』を出したが永續せず、中村壽郎(赤蜻蛉)は『産業時報』を刊行、秋山蘇南によつて『沿岸時報』が刊行されたのも同年四月であつた。なほ前記『家庭』を刊行した中島梧街は後ち夫人とともに家庭雑誌『ホーム』を發刊し、大久保等は同年『スポーツ』を出した。更に吉田公重は『新日本』を發行し十數年續刊した。一九一六年一月熊谷梅子(五月女)は『大北日報』社を去ると、ともに『女の聲』なる婦人評論雑誌を刊行した。また一九二〇年十二月には宮田主計によつて『勞働』が發刊された。右は勞働組合の機關雑誌であつたが、一九二五年に『大衆』と改題、今日に及び週刊誌として續刊されてゐる。

一九二一年に中邑史朗、名取稜々は『北米公論』を刊行したが、これは日本人會の赤白兩派のうち、赤派の機關雜

誌たる観があつた。一九二五年三月高橋清治郎は「人間評論」を出し、同年十月組合教會牧師安部清藏は農學博士若杉拾一と共營を以て「精神生活と産業」なる雑誌を出した。なほシアルトに一時滞在した上山草人と夫人浦路は協力にて「家庭」を發行、主として浦路が執筆、草人は傍ら現代劇協會と往復してゐた。前記のほかになほ「大陸農業」「大陸公論」「北斗」等があつたが、孰れも永續せず、一九二五年よりは神部利治によつて「日米公論」が刊行されてゐる。

加州に於ける雑誌の盛衰

一八九〇年前後、桑港に於てミメオグラフ刷りによる小雑誌が相次いで發行されたことは既に述べた。當時これら諸雑誌の發行頻繁を極めたことは、未だ邦人社會の出版界がなほ混沌時代に屬し、倚るべき中心的報道乃至言論機關が存在しなかつたに起因する。即ち後年活字の輸入によつて先づ日刊新聞が飛躍的發展を遂げるに及んで、邦人出版界の體系は漸次完成されるに至り、報道と論評の舞臺をこれに求めるに及んで群少雑誌は漸くその存在價値を低下し其後も雑誌並びに週刊紙は斷續的に刊行されたが、その數多からず、また概ね勢力伸張の餘地はなかつた。

雑誌並びに週刊紙は北に於てはシアルトを中心し、加州に在つては桑港、羅府を中心し發行されたことは言ふまでもないが、前述の如く日刊新聞の大をなすと、ともに、雑誌乃至週刊紙にして中央的勢力を有するもの甚だ少く、その主なるものは新聞の部門に於て述べた如くである。大體に於てその發行地の附近を地盤とし、新聞の報道に對して雑誌は論評又は中間的記事掲げたるものを最多とした。桑港に於ては一八九六年鷲津尺魔の如きも、その主宰した「顎はずし」の記載畫より筆禍事件を起して心機一轉農園入りを決行、農園に失敗して「日米新聞」櫻府支局を起し、その主任となつたが、その間、川島天涯、山村四郎らとともに月刊雑誌「新國民」を發行、八號を以て休刊した。

その以前桑港美以教會は「喜の音」なる騰寫刷り雑誌を發行した。羅府に於ても同様のものが湯淺龍門らによつて出されたが久しからずして廢刊された。一九〇二年には王府學生會より「湖畔」なるもの現はれ、一九〇五年村井非物は「征露記念誌」を、保坂歸一は「植民の友」を發行し、一九〇七年王府の原田凡午は「鷓埠」を、同獨立教會は「獨立教會」なる機關誌を刊行し、青木大成堂は「宇宙」と名づくる綜合雑誌を發刊した。これは綜合雑誌の體を備へたもので、在米邦人社會の雑誌としては優秀なものと云はれた。次いで山形春吉(莫越)は「四千裡外」を一九〇八年より創刊發行し、時事評論、趣味、隨筆、文藝、其他を掲げ、また自ら活版所を持つて爾來長く續刊し相當重視された。一九〇九年には加州大學邦人學會より「麥嶺學窓」が出され、新天地社は一九一〇年「新天地」を刊行、沙市の久布白直勝は「喜峰」を刊行した。當時より概して月刊發行物は教會、學生會乃至日本人會などの機關紙的色彩のものが多く、また永續したものが僅少で認むべき史實に乏しい。スタンフォード大學學生會による「スタンフォード」(一九二〇年)、上山草人の「東西時報」(一九二二年)、沼田惠範の主宰した「大海」(一九二七年)、田島準一郎によつて刊行された「星と太陽」(一九二七年)など現はれたが概ね永續しなかつた。此間、救世軍日本人本營發行の「ときのこと」佛敎團本部發行の「教壇タイムス」はその讀者の範圍廣く且つ基礎ある團體の出版物として永續してゐた。

羅府に於ても幾多の雑誌が斷續的に刊行されたが、荒谷浮太郎出版の婦人雑誌「在米婦人の友」は相當永續し、矢崎天洋による「太平洋」、文學雑誌「ハイト春秋」、俳句雑誌「たちばな」、羅府を本據とし一九三八年發刊した文藝聯盟の「收穫」などは比較的永續した。最近のものうち出色のものは羅府商工會議所の發行に係る「商工新報」同第九街市場發行の「マーケット週報」、同ガーデナー聯盟の「ガーデナーの友」、泊良彦主宰の和歌雑誌「とづくに」、佐々木修一發行の「ロスアンゼルス」其他現在發行中の宗教雑誌は「護教」「北加の光」「在米婦人新報」等である。

邦字新聞現況一瞥

在米邦字紙の沿革は上記各項に於て大略を述べ來つたが、左に現況（一九四〇年）を一瞥してその一覽表を末尾に添へて本稿を結ぶこととする。

南加地方

羅府を中心とする南加州は近年長足の進歩を遂げ、在米邦人にして同地方へ轉住するものも亦逐年増加し、全米に於て最も邦人々口の稠密地方となり、従つてこの方面に於ける邦字新聞事業は他地方のそれに比して經營上の好條件を具備してゐる。而して夙に南加に覇を稱へつゝあるものは『羅府新報』（一九〇四年創立）で、同紙は南加最古の歴史を有するとともに、その歩調は堅實であり、羅府を地盤として附近並びに南加一圓、北加及び沿岸の各一部にも讀者を有する。然も紙面の充實に意を注ぎ、ハポイント活字を用ひたのも同紙を以て嚆矢とする。續いて南加に大を誇るものは『加州毎日』（一九三一年創立）であり、その地盤は『羅府新報』と同様で、特に農家方面に支持者を有する。『米國産業日報』（一九三六年創立）は初め加藤新一が南加農會聯盟幹事としての傍らその週刊機關誌を發行しつゝあつたものを、後ち沼田利平其他の協力と、佐々木雅實らの有力者後援下に『加州産業日報』なる日刊紙となし、一九三八年改組、名を『米國産業日報』と改めたもので、その讀者は前記二社と同様、南加一圓を地盤としてゐる。現社長村井蛟（非物）。『南加時報』は主として羅府市内外に讀者を有する週刊紙、日刊紙の間にあつて中間的記事を盛つて刊行しつゝある。サンビドロには『南加沿岸時報』（一九一五年創立）あり、その讀者はサンビドロ市を中心とする附近一帯、青少年の教育並びに體育に盡す所あり、嘗ては社内には水泳部の設置もあつた。

中北加地方

中加及び北加は在留邦人多數であるが、桑港並びに羅府に於て刊行される大新聞が夙にこの方面に進出したため、地方としての新聞は孰れも大をなさなかつた。その中にフレズノ市にて發行される『中加時報』

（一九〇六年創立）はフレズノ市を中心に、中加一帯を地盤とし、地方新聞としての使命を果しつゝあり、サクランボには『櫻府日報』（一九〇六年創立）ありて、櫻府を中心に附近に相當多數の讀者を持ち、一九三五年にはスタクトン市にて發行されつゝあつた『スタクトン・タイムス』を併合、毎號に『須市版』を加へてスタクトン方面へ配布してゐる。なほ『スタクトン・タイムス』は前記の如く一九三五年『櫻府日報』と合併したが當時の社長小室昌一は依然その社名を持ち、スタクトンに在つて社務執掌中である。

桑港地方

桑港は別項沿革の項に述べた如く在米邦人發祥の地であり、過去半世紀間に幾多の變遷はあつたが、今日と雖もその地位は在米邦人新聞界の中樞をなすもので、發行される下記の兩日刊紙の如きは、その讀者は殆んど全米に亘り、發行部數に於ても素より他に比肩すべきものがない。『日米』（一八九九年創立）の如きは米國最古のものであり、社長故安孫子久太郎は終始同胞の伸展を思索しつゝ新聞に指導と使命の重きを忘れなかつた。また『日米』社は新聞發行のみならず『日米住所録』（一九〇四年刊行開始）なる年鑑刊行を續け、其他『日米大鑑』『在米日本人々名辭典』等を出版し或ひは農業伸展を唱へて安孫子社長自から中加に耕地を開拓するなどの實踐を怠らず更に第二世日本見學團を屢々組織し、他に率先して英文欄を設け、或ひは『週刊日米』なる教育と家庭本位の週刊誌を刊行するなど、その方針は常に進歩的であつた。而して現在も安孫子夫人社長として故人の意志を繼ぎ、依然その社勢力を保持活躍してゐる。（現主筆片瀬多門、編輯長淺野七之助）

『日米』と雁行するものは『新世界朝日』である。同紙は一九三五年『新世界日日』と『北米朝日』の二社合同して成つたもので嚴密にはこの時を創立時とすべきであるが、溯れば『北朝』は一九三一年の創立であり『新日』また一九三二年第一號を出してゐる。然も『新日』は『新世界』（一八九四年）の衣鉢を汲むものであり、『日米』が終始安孫子久太郎の主宰する所であつたに反し、新世界系は創立者副島八郎より谷口文彦、池田五六、山本宗兵衛、阿部

豊治、青木道嗣、再び阿部豊治とその経営者の變更を見たことは奇なる對照とすべく、然も「日米」ともに「新世界」は在米邦字紙中の白眉としその地位を保持し來つた。素より讀者は全米洽く存在し中央新聞たること並びに指導的機關としての使命を果し來つたこと「日米」の場合と同様である。

新朝・日米兩社陣容 在米邦人社會に於ける二大新聞たる「日米」及び「新世界朝日」の現在の陣容は左の如くである。

▲日米 社長安孫子余奈子、副社長安孫子恭雄、總務川島伊佐美、主筆片瀬多門、編輯長淺野七之助、支配人津田次郎

▲新朝 社長阿部豊治、副社長島山喜久治、主筆海老名一雄、會計岡垣吉太郎、總務三原時信、編輯長大田敏夫、支配人一丸嘉久藏

右二新聞のほか桑港には「太平洋時代」なる週刊紙あり、小笠原謙藏の發行に係り、初め一九三九年五月第一號を發刊したが、偶々同一工場より日刊「北米朝報」が發刊された爲め中途休刊、一九四〇年二月より再發行を續けつ、あり、讀者は主として桑港及び附近、記事は中間讀者を主としてゐる。「北米朝報」は一九三九年十一月、永田繁らによつて日刊八頁紙として創刊され、桑港サター街保坂ビルディングを社屋とし、同所の活字並びに設備を用ひ、伸張を企劃したが、陣營固からず資金に乏しく二ヶ月にして一時休刊を發表再び起たず無期休刊となつた。別に桑港を根據として月刊雑誌「ニツボンとアメリカ」がある。安曼穗明の主筆する所。同誌は舊「北辰」（一九一三年創刊）——「桑港週報」の改題せるもので、日米をつなぐ橋を標語とし、讀者を日布米加の各地に有ち、在米邦人間唯一の中央的綜合雑誌の體をなしてゐる。その他岡繁樹主幹の「アメリカ新聞」もあるが、これは不定期刊行物であり、現在は休刊してゐる。更に王府に池田貫道主宰の週刊「北米評論」（一九一三年創刊）あり、内容は

概ね是非々の論評、隨想を掲ぐ。讀者は主として桑港一帯。

電通、同盟通信

邦字新聞と密接關係ある「通信社」の米國に創設されたのは、一九二四年竹内吉之助（當時新世界記者）が桑港に「東洋通信社」を設立したに始まる。竹内は初め個人經營に依つて東京「電通社」と連絡し

主として新聞電報の交換を行ひ、日本及び東洋方面ニュースを各新聞社に提供したが、翌一九二五年に至つて「電通社」と解消合併し、改めて「電通桑港支局」となり、爾來長く竹内支局長として活動、殆んど全米及びカナダの邦字紙に東京特發新聞電報を供給した。斯くて事業を繼續すること十二ヶ年、一九三八年に至つて「電通本社」は國策會社たる同盟通信社に合流した。ゆゑ、桑港支局も改組となり、同年皆藤幸藏の同盟社より派遣されて桑港に着るともに、皆藤新たに同盟支局主任となり、竹内これを援けて新組織下に活躍、クロニクル・ビルディングにオフィスを新設し、事業は電報の接受配給以外に、外電の中繼整理をも兼ね、茲に「同盟支局」は海外重要支局としての任務を遂行しつゝある。後ち竹内去り、皆藤ロンドンに轉じ友松新たに支局を擔當、今日に及んでゐる。

山中、山東地方

ユタ州ソートレーキ市には山中部唯一の邦字紙「ユタ日報」（一九一四年創刊）がある。元日刊であつたが、一九三八年に至つて週三回刊行とし今日に至つてゐる。讀者はユタ州を主とし、アイダホ、

ネヴァダ、ワイオミングの一部に互つて散在する。「格州時事」は一九一三年の創刊。山東部唯一の邦字紙として存在であり、讀者はコロラド州を主とし、ネブラスカ、ワイオミングの一部に互る。

オレゴン州

ポートランドに「央州日報」（一九〇四年創刊）あり、五千の在留同胞を背景として同州及

びワシントン州の一部に讀者を有し、堅實の經營をなしつゝある。別に同市に週刊「コースト時報」も發行され、主としてポートランド市及び附近を地盤としてゐる。

ワシントン州

シアトルは桑港と、もに在米邦人文化方面の先驅をなす地、今日に於ても同地を根據とする

刊行物は相當に多い。日刊紙『北米時事』（一九〇二年創刊）は附近の第一紙を誇り、シアトルを中心にワシントン州全體、オレゴン、モンタナ、ダコタ、アイダホ各州方面にも讀者を有してゐる。『大北日報』（一九〇九年創刊）も前者と同様の地盤に立ち、雁行して西北部に雄飛してゐる。週刊紙『ジャパニーズ・アメリカン・コリア』はジェームス坂本義徳（日系米人）の經營するところで、斯界唯一の純英字紙。一九二八年一月一日の創刊に係り、讀者は主として日系市民（第二世）その範圍は少數ながら廣く全米に互つてゐる。このほかに週刊邦字紙『大衆』あり、月刊『日米公論』いづれもシアトルより刊行されてゐる。またタコマには『タコマ週報』（一九一二年創刊）續刊され、二千の在留邦人間の報道言論機關としての使命を果しつゝある。

紐育地方 ニューヨークに現存する邦字紙の一つは『紐育新報』（一九一二年創刊）であつて、ニューヨーク市を中心にワシントン、シカゴ、ヒラデルフィア方面に讀者を有し、週二回刊行し報道と言論の機關として健闘しつゝあり、他は週刊紙『日米時報』で前者と同様の立場にあるが最近『ジャパニーズ・アメリカン・レビュー』なる英字別刷りを發行し、米人並びに第二世に日本及び東洋事情其他の紹介に努めつゝある。

カナダ西部 英領カナダは米國北部に接壤し、同地在留邦人は北西部米國在留邦人と往時より密接關係を有してゐる。新聞の如きも同様、兩地方の新聞は相當數の讀者を互ひに相手地方に有してゐる。而してプリティッシュ・コロンビア州の要都ヴァンクーヴァーに於て發行されつゝあるものうち『大陸日報』最も古く、即ち一九〇七年の創刊であり、『加奈陀新聞』これに次ぐ。但し同紙の前身『晚香坡週報』は一八九七年發刊の光輝ある社史を有してゐる。これと鼎立をなすは『民衆』で、三者ともヴァンクーヴァー、ヴィクトリア等の主邑を地盤に西部カナダに多數の讀者を持ち、また全カナダにも及んでゐる。（詳細第二篇第十五章、カナダ地方欄参照）

新聞の收縮期 本稿冒頭に於て在米邦字新聞は高度の讀者率の上に立つ點を述べたが、經營上よりこれを見れば斯る事情にありつゝ尙且つ甚だ收支不償を嘆じつゝある。その理由は實に讀者の分布甚だ疏散廣大の範圍に互る爲め購讀料の徵集に經費の嵩む故であり、同時に在米邦人は少數の所謂歸米市民を除いて、後來者を斷たれ、現存者は逐年減じつゝ、然もその子女たる日系市民は邦字新聞に倚ることの必要感稀薄であることなどを指摘し得べく、これらの諸要素より觀て在留邦字紙の有する讀者層は一率固定の第一世であり、之等讀者の上に立つ邦字紙は、既に久しき以前にその頂點（一九二〇—二五年）を過去に置き、一九四〇年現在は既に收縮時代移行の途上にあることは否むわけにはゆかぬのである。但し別項（社會相の變遷）にも説いた如く、邦字紙の過去の貢獻はその苦闘の歴史と共に長く輝くものであり、第一世より第二世への過渡期に當る現在の責務も同様、重要使命を負ふことに變りなく、聽て本事業は當然第二世によつて繼承される運命にある。

在米・カナダ邦人經營新聞一覽（一九四〇年現在）

新聞名	發行地	種別	頁數	内邦文	内英文	備考	社長又は代表者
羅州府新報	羅州府	日刊	八	七	一	每日發行	駒井豐策
加州產業日報	羅州府	日刊	六	六	一		藤井整
米國日報	羅州府	日刊	八	六	二		村井蛟
新世朝報	桑港	日刊	八	六	二		安孫子余奈子
櫻府日報	桑港	日刊	四	六	一		阿部豐治
中央州日事	櫻府	日刊	六	四	一		岡繁樹
北米時報	ボートランド	日刊	七	六	一		小山巖
	シアトル	日刊	七	一			有馬純義

大	ユ	格	紐	南	南	中	太	北	コ	タ	大	日	南	日	加	大	民
北	州	州	育	加	沿	加	平	米	米	コ	大	日	南	日	加	大	民
日	日	日	新	新	岸	時	洋	評	時	週	時	報	報	報	報	報	報
報	報	報	報	報	報	報	代	論	報	報	報	報	報	報	報	報	報
シ	鹽	デ	紐	羅	散	布	桑	王	ボ	タ	シ	シ	羅	桑	紐	シ	シ
ア	湖	ン	育	府	港	市	府	府	ラ	コ	ア	ア	府	港	育	ア	ア
トル	市	バ	育	育	港	港	港	府	ント	マ	トル	トル	トル	港	育	トル	トル
日	週	週	週	週	週	週	週	週	週	週	週	週	週	週	週	週	週
刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊
七	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形	形
竹	寺	貝	水	山	平	長	小	池	境	福	坂	村	安	羅	神	梅	山
内	澤	原	谷	田	賀	岡	笠	田	野	井	本	岡	曇	府	部	月	崎
千	國	一	沙	作	重	重	原	貫	文	周	義	安	穂	業	利	高	重
尋	子	郎	三	次	昌	彦	謙	道	郎	一	德	男	明	組	治	市	三

(※印 カナダ・ヴァンクヴァーにて発行の邦字紙)

在米邦人既刊書籍一覽

在米邦人によつて著述發行された書籍は甚だ多く別表に示すものゝみにても四百程に近い。この外なほ多數あるものと観られるが、その完全調査は至難事に屬する。但し別表には既刊書籍の重要なものを殆んど採録した。而して單行本刊行にはそれ〴〵動機あり、時代色あり中には營利を目的としたもの、或ひは出費を厭はざる程の餘裕あるに任せて出版したものも觀られるが、總じて邦人の文化率度の低からざるを示すものとなすべく、また好學心の反映であり、更に著述によつて史實の一斑を遺し得たものあり、概観すれば在米邦人の讀書力、餘裕の豊富を窺知すべきで、文化方面に於て寂寥感深き邦人社會にありては、これらの出版物は兎も角も誇るべきものゝ一つたるを失はない。而して既刊書物の個々には夫々傳ふべき興味乃至價值あるものも含まれてゐるが、こゝにはそれらを詳述すべき紙幅を持たず、單に表を以て左に一括紹介するにとどめた。

在米邦人既刊書籍一覽 (一九四〇年八月現在) (※印英文)

史籍及び發展史	加州廣島縣人發展史	一九一六	開原榮
米國事情	タコマ邦人發展史	一九一七	タコマ週報社
在米同胞發展史	日米年鑑産業號	一九一八	日米新聞社
マウンテン同胞發展史	北米愛知縣人誌	一九二〇	大野吉五郎
※フロリンの日本人	在米岡山縣人發展史	一九二〇	片山景雄
絡機と同胞	アメリカに於ける日本人	一九二二	E.M.ポデー
山中部同胞發展史	加州と福島縣人	一九二二	佐藤一水
	北米の高知縣人	一九二二	岡直樹

和歌山縣人發展史	一九一	富本 巖
紐育日本人發展史	一九二二	水谷 涉三
岡山縣人發展史	一九一	遠藤 紫朗
米國西北部發展略史	一九二二	沙市 藤
在留日本人發展略史	一九二二	桑港 日本人會
史料展覽會記念誌	一九二六	藤賀 與一
在米日本人發展史要	一九二七	根岸 橋三郎
幕末外交史と新島襄	一九二八	森田 重光
布哇五十年史	一九二八	齋藤 重光
福岡縣人發展史	一九二九	大北 日報社
米國西北部日本移民史	一九二九	竹田 順一
廣島縣人發展史	一九二九	鷺津 尺魔
在米日本人史觀	一九三〇	迎田 正勝
在米肥後人	一九三一	中村 新
日米大觀	一九三一	日米新聞社
北加四郡日本人發展史	一九三二	原田 惟一
日米外交史	一九三二	川島 伊佐美
カリフォルニア開化異聞	一九三二	河村 蘭川
我家の歴史	一九三三	藤賀 與一
ヤキマ平原日本人史	一九三五	ヤキマ日本人會
サンタマリア	一九三六	坂久 五郎
平原日本人史	一九三七	大橋 實造
スタクトン同胞史	一九三七	叔井 一劍
北米劍道大觀	一九三九	在米日本人會
在米日本人史	一九四〇	在米日本人會

在米日本人事情

日本人營業案内	一九〇六	山田 作太郎
北米ワシントン日本人事情	一九〇七	石岡 彦一
英領コロムビア日本人事情	一九〇八	日米週報社
紐育の日本人	一九〇八	松藤 久吾
シアトル案内	一九〇八	丸山 千曲
亞郡同胞大勢一覽	一九〇八	金井 重雄
北米の日本人	一九〇九	伊藤 五郎
南加日本人及事業	一九〇九	高田 喜三
加州日本人問題の真相	一九一一	高田 喜三
※日本人の推移	一九一三	若林 橋
産農吟實業家の面影	一九一四	市橋 玄郎
パナマ博覽會案内記	一九一四	白兼 屏
北米及びカナダ	一九一五	二宮 榮
日米人現狀	一九一五	阪田 榮吉
パナマ太平洋博覽會記念誌	一九一五	新世界新聞社
在米同胞婦人の使命	一九一九	小林 政助
在留民登録統計	一九二〇	羅府 日本人會
タコマ日本人會	一九二〇	タコマ日本人會
※加州と日本人	一九二一	加藤 文護
※日本人問題の真相	一九二一	神崎 誠一
日本人問題	一九二二	河上 清
同胞存亡の危機に處するの道	一九二四	原田 助
加州及び布哇に於ける日本人	一九二四	小林 政助
羅府日本人事情	一九二五	千葉 豐治

在米開史錄	一九一	中川 無象
南部加州概観	一九二六	羅府 新報社
第二期ハワイ	一九二六	奥村 多喜衛
日米問題解決運動	一九二八	藤賀 與一
日米兩國人の美點と長所	一九二八	新里 貫一
移民地哀話	一九三三	同 人
聞に聞く聲なき聲	一九三三	同 人
アリゾナ排日事件	一九三四	アリゾナ 日本人會

日米關係諸問題

在米日本人聯合協議會報告第一號	一九〇七	在米日本人會
※對日本人區別待遇	一九〇七	H. B. ジョーンソン
日米の新關係	一九一〇	高橋 作衛
日米問題	一九一五	ギウリック
日米問題と日本民族の世界的使命	一九一九	小林 政助
米國に於ける日米關係	一九二〇	神崎 誠一
米國の排日問題	一九二一	千葉 豐治
※日本の太平洋政策	一九二一	河上 清
米國加州排日事情	一九二一	千葉 豐治
合衆國加州政治の傾向	一九二二	大山 卯次郎
※加州排日問題	一九二二	原田 助
※日米關係	一九二二	柳原 資丞
日本人排斥問題評論	一九二二	大山 卯次郎
布哇日本人の重要性	一九二四	小林 政助

日米非戰論	一九二五	浮田 和藏
太平洋の彼岸	一九二六	渡邊 金藏
※華府會議と其後	一九二八	大山 卯次郎
米國社會運動	一九三〇	市橋 俊
太平洋時代と米國	一九三三	關口 野齋

米國事情

米國勞働便覽	一九〇二	清水 鶴三郎
渡航必携の米國事情	一九〇三	河野 信一
米國權力論	一九〇四	岡田 溪水
新選渡米必携	一九〇五	宮川 益次
最近米國通覽	一九〇八	秋吉 辰次郎
布哇實業案内	一九〇九	生方 貞一
加州の	一九〇九	林 三郎
オレゴン事情	一九一〇	永井 松三
北米踏査大觀	一九一一	阿部 豐治
米國苦學實驗	一九一一	形 影
我輩の見たるアメリカの上下	一九一三	保坂 歸一
面白く桑港	一九一五	二宮 利作
巴奈馬萬國博覽會	一九一五	杉山 利三郎
加州の富源と名勝寫真	一九一七	池田 實道
碧眼の見たる太平洋問題	一九一八	阿部 豐治
米國人と人種的差別の研究	一九一八	小林 政助

ウイリソンとデモクラシー	一九一九	細井柳汀
無敵の米國	一九二〇	開原五郎
米國に於ける排日思想	一九二〇	千葉原
黄金の排日	一九二〇	大山卯次郎
米國の排日	一九二二	有馬純清
るつぼの米國	一九二二	徳牧師
米國に於ける軍備制限	一九二四	千葉豊治
合衆國の通覽	一九二五	E.C. ベール
紐育事情通覽	一九二六	紐育日本人會
米國の政治經濟と其文化	一九二八	百々正雄
米國研究の栞	一九二九	百々正雄
アメリカのワイルド・ウエストを展望して	一九三三	松澤敦

米國諸法律

アメリカ合衆國憲法	一八八八	吉田清成
加州外人漁業法案	一九〇〇	那須生平
米國歸化法	一九〇六	上田駿一郎
米國法制綱要	一九一七	市川藤市
加州の法律	一九二〇	谷越勝太郎
米國新移民法	一九二五	柴田市太郎
米國法律要義	一九二六	谷越勝太郎
加州土地法に就て	一九二九	藤井整
在米同胞の心得べき法律	一九二九	時政得二
米國移民法講話	一九三〇	赤名精一

教科書及び教育關係

英文書簡文大成	一九〇〇	青木大成堂
英語會話と職業篇	一九〇四	渡邊四郎
會話キ	一九〇五	ライアン
加州讀本一、二、三	一九〇五	高田喜三
西洋料理法大全	一九〇六	山田嘉三
在米成功の友	一九〇八	田畑喜三郎
加州實業案内	一九〇八	山田嘉三
パーテンダー	一九〇九	青木道嗣
デザート秘訣	一九〇九	山田嘉三
アントレー及びサラド	一九〇九	右馬頭吉
西洋料理書	一九一〇	宮川陽
二十世紀英和書翰	一九一〇	大畑勝
支那料理法	一九一九	安田勝
支那料理問題	一九二二	二宮きみ子
米國職業學校一覽	一九二四	須藤和四郎
米國職業學校問題	一九二四	瀧本爲三
家庭と小兒	一九二五	津田彌三郎
第二世教育と日曜學校	一九二九	白石清
加州日本語學園沿革史	一九三〇	河村清
二世高等卒業演說集	一九三二	廣畑恒五郎
二世の教育	一九三二	佐藤傳
二世の級方集	一九三八	鈴木七郎

説論及び隨筆

國家改良論	一九〇〇	稻岡正吉
亞米利加土産	一九〇三	植原悦次郎
日本外交論	一九〇七	宮崎右夫
非社會主義論	一九一〇	C.マンソン
國家は主權論	一九一〇	大塚則鳴
い浪は十年學	一九一〇	同
放浪の十年學	一九一三	在米革命社
東西の選民	一九一四	高橋豐念
強敵の選民	一九一九	河田琴風
特選の選民	一九一九	小林政助
日米皮肉哲學	一九一九	阿部豐治
無抵抗主義精神同盟	一九二一	小部政助
無抵抗主義精神同盟	一九二一	山崎露川
難局に處するの道	一九二二	久能芳三郎
旅心の禮讚	一九二二	安部清藏
猫と人	一九二六	同
白く塗れる墓	一九二六	小林政助
春の第一線	一九二六	安曇徳明
相對性原理と主の禱	一九二七	須藤和四郎
春の樓	一九二七	春舟郎

宗教及び宗教關係

民族發展の先驅者	一九二七	藤岡紫朗
大陸の二十五年	一九二八	小室篤治
三階の窓から	一九二九	岡村政人
母と私	一九二九	小林政助
排日戦線を突破しつつ	一九三〇	河村清
紛争の子滿洲國	一九三一	小林政助
日本民族の世界的膨脹	一九三二	小林政助
祖國朝野に懇ふ	一九三三	小林政助
白人稱呼廢止論	一九三三	新井省五郎
あめりか生活	一九三九	佐々木修一
心のかけ	一九三九	山元麻子
心象現象研究	一九〇九	有馬梅岳
信仰の道	一九〇九	小島政一
在米日本人長老教會史	一九一一	稻澤謙一
米國に對する私の使命	一九一一	G.佐藤
孔子教の眞髓	一九一一	高原安
キリストの模範	一九一二	前川眞次郎
桑港日本人美以教會	一九一三	桑港美以教會
切支丹の來歴	一九一五	中村順三
東洋入宗教經驗の心理	一九一五	加藤勝治
キリスト教の美觀	一九一七	今井三郎
宗教と民主思想	一九一七	今井三郎
基督に復れ	一九一七	金森通倫

傳道團小史	一九一八	邦人傳道團
兒童と家庭	一九一八	馬場久成
一寸待て	一九一九	小林政助
賭博者の救ひ	一九一九	小林政助
マキキ教會歴史	一九一九	小村多喜衛
義人の血空しく流れ	一九二〇	小林政助
田駒佛教會報	一九二四	田駒佛教會
オレンヂ郡日本人傳道師	一九二四	中村順三
心を強くし且つ勇め	一九二四	小林政助
我を愛するか	一九二四	小林政助
北米の眞宗	一九二五	羅佛教會
大谷尊田講演筆録	一九二六	北米佛教會本部
※佛教A・B・C	一九二六	鈴木
北加基督教便覽	一九二六	基督教北加同盟
美以教會四十年史	一九二六	桑港美以教會
ミッシェン物語	一九二七	高橋乙治
愛兒の追憶讚美歌集	一九二七	西宮又治
生命の歩み	一九二七	德憲
タルソンのパウロ	一九二八	高橋乙治
神佛に就て	一九二九	藤賀與一
※佛教より基督教	一九二九	同
他力本願と母の信仰	一九二九	二宮屏上
佛教と勢一覽	一九二九	桑港佛教會
※佛陀とその弟子	一九三二	村野孝顯

農業及び商業關係

社會問題と聖書	一九三二	高橋乙治
信仰と信仰生活	一九三二	清水宗四郎
實生活途上の基督	一九三二	安部清藏
小林政助論文集	一九三三	小林政助
開教卅年記念史	一九三三	桑港佛教會
死後に靈魂なし	一九三四	池田貫道
北米開教沿革史	一九三六	佛教會本部
明るい人生觀	一九三六	小村政助
天理教米國布教十年史	一九三八	天理教
北米米教壇	一九三八	アメリカ傳道廳
五尺を出て	一九三八	藤賀與一
北米教壇其二	一九三九	岩永友記
日米銀行營業案內	一九〇五	日米銀行
牛乳と製品論	一九〇八	池田貫道
老農懇親記念	一九〇九	中央農會
蔬菜栽培	一九一〇	池田貫道
養老貯蓄一生の寶	一九一〇	永井元
米國純良食品法	一九一三	在米日本人會
株式會社經營の心得	一九一三	在米日本人會
農業講義錄	一九一三	高橋庄三郎
農家大福帳	一九二〇	在米日本人會
米國加州農業事情	一九二〇	千葉豐治

文藝關係

株式と金融	一九二〇	大澤榮三
歩合耕作契約書々式	一九二一	在米日本人會
加州の米作	一九二四	片瀬多門
農家の米作	一九二四	藤井整
何のその十萬圓	一九二六	岩城徳藏
加州日本人花園發展史	一九二九	加州日本人花園株式會社
米國西部庭園植物	一九三〇	野村文哉
※クリサンシモン	一九三〇	林廣吉
南加州花園	一九三二	
※いゝは文庫	一八七七	齋藤修一郎
※見え見えみ	一八七七	野口米二郎
※東の海より	一八七七	野口米二郎
華津陽	一九一一	華陽會
宇津良	一九一一	うづら會
櫻府平原の錦	一九一一	開原五雨
俳句四年の間	一九二二	沙原香會
旅句の華も	一九二二	菅野衣川
北加の華	一九二二	市野衣川
※創造の黎明	一九二三	菅野衣川
くつあまと	一九二六	レモン詩社
加州を去るまで	一九二七	下山逸蒼
雨	一九二〇	長谷川咲子
アメリカの記念帳	一九二〇	トシ
トシと無窮	一九二一	永遠
ミッシェン・ブレ	一九二二	如關鳴稿
沙漠の旅より	一九二二	沙漠の旅
春の心	一九二二	春の心
夜になげ	一九二二	夜になげ
※李白詩集	一九二二	李白詩集
蟬蛙會俳句集	一九二二	蟬蛙會俳句集
※我輩は猫である	一九二三	我輩は猫である
移樹	一九二三	移樹
霧の植	一九二四	霧の植
燕の集	一九二四	燕の集
逸句集	一九二四	逸句集
ロイズとウキツチ	一九二五	ロイズとウキツチ
霧の笛	一九二五	霧の笛
懺悔の行	一九二五	懺悔の行
別天詩稿	一九二五	別天詩稿
放浪の詩集	一九二五	放浪の詩集
復浪の詩集	一九二五	復浪の詩集
板子のボ	一九二八	板子のボ
何處へ行	一九二八	何處へ行
桃色の憂	一九二八	桃色の憂
白線	一九二八	白線
水上瀧太郎		水上瀧太郎
直原敏平		直原敏平
清水夏長		清水夏長
大山卯次郎		大山卯次郎
和察知吟社		和察知吟社
下山英太郎		下山英太郎
清水夏長		清水夏長
永原宵村		永原宵村
小畑薫良		小畑薫良
寺田拔山		寺田拔山
夏目漱石原著		夏目漱石原著
日米新聞社譯		日米新聞社譯
霧の繭同人		霧の繭同人
永原宵村		永原宵村
下山逸蒼		下山逸蒼
吉岡青村		吉岡青村
下山逸蒼		下山逸蒼
土田三太郎		土田三太郎
牛島謹爾		牛島謹爾
山崎一心		山崎一心
松田午三郎		松田午三郎
村野孝顯		村野孝顯
林野盛雄		林野盛雄
井上種伸		井上種伸
白線同人		白線同人

北米文藝選集	一九二八	山崎一心
青永井多	一九二九	南詠會同人
永井多	一九二九	永井元
素顔のハリウッド	一九三〇	上山草人
こんなのが...	一九三〇	沼田利平
アメリカ文藝集	一九三〇	山崎一心
※ハイデン・フレーム	一九三〇	加川文一
※警風信	一九三二	柳川春葉原吉
海へ	一九三三	中村郁子
エバン・ゼリン	一九三五	花田土城
あしあ	一九三六	下山英太郎
三宅太郎記念句集	一九三七	著 山口野書齋
山東歌集	一九三九	池上耕房
半山僕全集	一九四〇	遊佐半僕

旅行記、實情帖、辭典

※米國俗語字引	一九〇三	中島直吉
實用いろは字引	一九〇五	一柳謙治
南加同胞發展寫真帳	一九二二	文林堂
母國觀光團寫真帳	一九二二	鈴木宇兵衛
極光をたづねて	一九二五	塚本嶺南
世界實情寫真	一九二五	内藤民治

働きながらの世界漫遊	一九二〇	阿部豊治
在米日本人名辭典	一九二二	日米新聞社
羅府名所案内	一九二五	イーグル旅館
アメリカの旅	一九二五	蜂谷經一
中加日本人寫真帳	一九二六	川島天涯
加州讀本字典	一九二六	水野謙之助
在米同胞發展寫真帳	一九二八	赤司郁
漢英辭典	一九二九	須々木榮
北米國立公園遊記	一九三二	中村秋季
北米アルプス踏破記	一九三二	木下糾
子午線南北	一九三八	村山有
第二世アルバム	一九三九	新世界朝日社
金門萬博記念誌	一九三九	同
ヴァガボンド通信	一九三九	坂井米夫
金門萬國大博記念	一九三九	日本人協賛會

傳記、其他人物關係

在米成功の日本人	一九〇一	櫻府隆士
古川古松軒	一九一一	橋本修吾
※太閤秀吉	一九二二	ストリヂ
在米日本人人物月旦	一九二六	松本本光
父島	一九二〇	久布白落實
新田島	一九二二	根岸橋三郎
毛利美佐尾	一九二四	松田午三郎
	一九二八	毛利元一

高峰讀吉成業傳	一九二八	傳記出版委員
ドーター・オヴ・トゥ・ツール	一九二九	國友信彌
聖者タミエン	一九二九	小室篤治
山本茂牧師追想錄	一九二九	自由美以教會
南加同胞人物大觀	一九二九	松本本光
※ラングランドとチヨース	一九三三	飯島郁三
犬養毅	一九三三	片山景雄
中林	一九三三	中河頼覺
田中	一九三九	佐々木修一

その他

排姦始末	一八九三	金門日報社
波濤的顯理	一九〇五	中内光則
大和の顯理	一九〇五	宮川益次
太平洋沿岸の友	一九〇六	河野信一
羅府の情け	一九〇七	柏村桂谷
南米の事情	一九〇八	東洋雜會社
懷舊談	一九〇九	青木大成堂
通俗臨牀醫學	一九一〇	鍋谷傳二郎
カナダの醫學	一九一〇	大陸日報社
手風琴樂譜	一九二二	無名子堂
青年洗滌	一九二二	齋田初次郎
頌徳文法	一九二二	齊木仙醉

暗黒の羅府	一九一三	鈴木榮四郎
米國土產亂調子	一九一三	開原五郎
和漢英論物語	一九一五	山野政太郎
百人一首歌もどき	一九一八	吉池寛
※正義に訴ふ	一九二一	牛島謹爾
大寶庫メキシコ	一九二四	古屋晃
甘蔗の搾り滓	一九二四	瀧沢富三郎
加州の論	一九二四	勝沼富三郎
久遠の像	一九二四	木下準一郎
試練の坩堝	一九二五	フレズノ佛敎青年會
燃ゆ世の小靈	一九二六	田中義一
注目すべきメキシコ	一九二七	齋藤重光
子供の權利	一九二八	米窪太刀雄
S.S世界大會記	一九二八	吉山基徳
洋食博覧會	一九三〇	幸田宗平
世界文化の粹	一九三〇	堀越徳次郎
満蒙の文化の空	一九三二	三原時信
病者のガイ	一九三三	尾澤寧次
在米五十七年	一九三九	山田光造
		堂本誓之進

第八章 運動競技

緒言

スポーツが社會組織の一要素として尊重せられてゐる現代に於て、在米邦人の運動競技界を見るに、その初期移民時代は所謂運動會なるものが各處に催されたるに過ぎず、組織的な運動競技は呼寄青年の渡米、二世の接頭、赤毛布や花ござを勝手／＼に大地に敷き持よりの辨當を開いて眞に有頂天の奉祝をやり、女子供には旗取、スポン、絲通し、算術、御手玉、二人三脚や又新案赤十字競争等、又青年達には短距離より一二哩の長距離、高飛、巾飛、障物、ホーロク割、綱引、角力、二百三高地占領競技等があつた。當時桑港在留同胞の家持大部分は所謂下町組特に花柳界の連中など巾をきかしておつたものと見え、同祝賀會の延長である奉祝吹寄會が、ポスト街とスタイナー街角の舊ナショナルホールにて催された時など、舞臺面の前方一體の椅子に座蒲團を敷きつめ紅や白粉をこたく塗つた連中が座を占め、上町組即ち福音會や美以教會等に寄宿して居つたスクールボーイの青年達に憤慨の思ひをさせた。其後年々前桑港日本人會等の主唱で春秋の二季、又は出雲、八雲艦などの練習艦隊來航の機會を利用して此種の野外運動會が屢々催され、同時に各地に於ても亦縣人會や、郷友會等が一日の清遊と親睦を兼ねて繼續されつゝ、今日に至つておる。現代に至つて、長足の發達を示してゐるのであるが、千九百年早々時代の運動會なるものは眞のフィールドエヴントを運動規則に従つて行つたのではなく、フィールド・デーつまりピクニックの餘興として子女青年の爲めに各種の競技が催され、大體は喰つたり呑んだり踊つたり歌つたりする方が其主體であつた。此時代に最も大々的に催されたのは桑港に於ける在留同胞の催した旅順陥落奉祝大運動會で世界脅威的であつた大露西亞を徹底的に

やつつけたと云ふので、一般米人間に於ては恰もヘビウエイトと、フライウエイトの拳闘勝負を見て居るやうな氣持で居つた。此の勝負彼等の小弱者と見てよせた同情は、日本の大勝に依つて一轉驚異的米人間の人氣を呼び、或ひは日本人に對し稍恐怖心の根ざしがあつたのかも知らぬか排日の氣分などなく、在留同胞の一人一人が東郷元帥であり、乃木將軍であるの概を以て大道を活歩した勢であつた。朝早くからノースビーチの古き運動場に詰めかけ薦被りの四斗樽の鏡を抜き、一方健全なる精神と、健全なる體育の修養を目的としてのスポーツに於て古き歴史を有する桑港富士俱樂部と、學生會が常に好敵手として永き間練磨奮闘を續けて來ておつた。やがて時代の要求に依つて産れたるJ、A、A、Uは同胞青少年達の健全なる發達を示し、今日にては彼等の所屬する各學校に選手として對米人學生の統計比較の結果より見ると、可なり大なるパーセンテージを以て大に將來ある事を如實に物語つておる。試みに同胞青年の此地方大學選手としての二三の例を引けば古き時代に於てはスタンホード大學機械體操の三輪鶴彦、フットボールの平澤孔明彦、籠球の木庭道雄、加州大學にては輕量級レッツリングの井木繁喜、テニスの田中某、籠球の大橋傳、フェンシングの小島希美雄、現在にては蹴球の新田光雄、レッツリングとサッカーボールの那生貴、走巾飛城戸某等實に各方向に涉り民族としての大成に向つて輝しき光を添へており、日本古來の武道を核心とする、柔道、劍道、弓道、相撲等の諸機構が整備され、二世青年の指導機關として輝しき活躍を續けて居る。猶陸上競技に關しては選手が總て二世であり、本欄には記載せず、本編『日系市民篇』を参照され度い。

柔道

柔道の米國進出

柔道は日本古來の武道として心身鍛練の上に缺く可らざる武技であり、武士道への精進練

磨である。此の柔道が米國に進出したのは一八九五年日清戦役直後、矢部八重吉が英語で柔術の通信教授を桑港で試みた事があり、一八九六年（明治二十九年）鹿兒島縣人吉井助一が桑港オツフレル街に起倒流柔術稽古場を開き一九〇〇年（明治三十三年）東勝熊が柔道教師として東部紐育で西洋相撲（レスリング）に挑戦し、時の選手スワンソン等に識られ、紐育各地の警察巡查に柔道を教授した。一九〇二年（明治三十五年）廣島縣人谷本正明が桑港で澁川流柔術の稽古場三ヶ處を設けた。これらが柔術教授の元祖である。其後一九〇三年（明治三十六年）九月講道館指南役故山下義昭（當時六段）が米國の鐵道王サミュエル・ヒルの招聘に應じて渡米し、一九〇七年（明治四十年）迄滯米五ケ年の間アナポリス海軍兵學校及びハバート大學等で柔道を教授して我が國技柔道が如何に卓越せるものであるかの宣傳紹介に大に努める所があつた。時の大統領ルーズベルトは特に山下師範をホワイト・ハウスに聘して、自ら柔道の稽古を爲し、外交官婦人團體等へも之れを紹介するに至り、柔道は忽ち世界的に日本武道の精華たるの認識を深からしめた。其後千葉兵藏（當時四段）富田常次郎（當時六段）前田光世（當時四段）佐竹信四郎（當時四段）河野威太郎（當時二段）伊藤徳五郎（當時四段）大野秋太郎（當時三段）三宅多羅治等が相次いで渡米し、近くは新免伊祐（當時五段）高廣三郎（當時五段）岡部兵太（當時五段）庄司彦男（當時四段）太田節三（當時四段）高垣新造（當時四段）西部及び東部紐育シカゴに於て米人へ柔道を教授し、倭少なる日本人が、雲を衝くかの如き白人大兵を手玉に取つて投げる柔道の妙技は、米人の心膽を寒からしめたものである。

各地に道場設立

爾來太平洋岸各地に日本人の在住者激増するにつけ柔道の心得ある者も漸く多きを加へ第二世の増加と共に體育的にも精神的にも日本人としての人格練磨には武道たる柔道を根幹とする教育の必要を認め各地に柔道場は設置され、今や各道場の入門者は日米人を加へ數千名となり、有段者又一千餘名を算するに至り、第二世指導機關として重大なる役目を承つておる。柔道の始祖講道館長故嘉納治五郎師範は、一九三二年羅府に、オリ

ムビツク大會の開催を期に來米し、各地道場を歴遊すると共に、太平洋沿岸北部、中部、南部に有段者會を設立して斯道發達に拍車をかけ一段と進境を見るに至つた。一九三四年講道館指南役永岡秀一（十段）一九三八年飯塚國三郎範士（九段）等も渡米し、自ら道場員の指導講習に任じ、技術的にも精神的にも長足の進歩を示した。一方羅府の山内俊高（當時五段）が母國訪問柔道武者修業に日本見學團等を組織引率して數回渡日し、各大學武徳會選手と試合を行ひ、米國に於ける柔道の實力と其發達を遺憾無く發揮した。現在米國に於て柔道の最も普及し盛大を極めておるのは西部沿岸の羅府、桑港、沙港等が多數の道場もあれば又有段者も數百名以上に達して居る。羽石幸次郎（當時四段）田口利吉郎（當時五段）桑島省三郎（當時三段）は紐育、シカゴ方面の柔道開拓者として、多數米人の入門者を有し、柔道の紹介宣傳に努めておる。羽石四段はシカゴ陸軍士官學校へ一九一七年より柔道を正科として教授した。現今太平洋沿岸の柔道指導者として主なる者は、羅府、山内俊高（六段歸國中）桑港、黑江湖（五段）沿岸、吉田幸平（六段）沙港、熊谷康之（六段）須市、川崎哲（四段）等である。

有段者會と會長

米國柔道界の現状は大體に於て講道館有段者會が其中心となり、各地の有段者會の會長には其所在地の總領事、領事が任に當り統轄指導しておるのであるが、今主なる道場並に有段者會の沿革並に現況を左に列記するならば

北加道場及び有段者會

沿革

一九一七年頃相前後して柔道家伊藤徳五郎（當時四段）京野順八郎（三段）等が渡米し、數年後川勝正之（五段）高橋精造、谷口貢、富永啓介、針重（各二段）等が、桑港基督教青年會、レフオームド教會教育館、佛教會等で柔道の練習を兼ね青年指導に努め、又或時は白人レスリング選手との對抗試合等を行つておつた。これより

先き一九〇九年頃桑港に相澤金丸、宮本孝内等により北米柔道俱樂部なるものが組織され、後年墨國の陸軍中將となつた横山醒舎、白尾高象、武藤武記等が桑港、王府で柔道指南に當つておつた。其後黒江湖（當時四段）渡邊慎吾（當時三段）青木巖（當時三段）横山文三（當時四段）等が桑港に在住するに至り、一九三〇年（昭和五年）九月、黒江湖五段が主任となり、渡邊慎吾、青木巖、河西勝智與、明石傳一、土井口祐太郎等の後援で桑港サター街一七二六番に、桑港柔道場を設立し、同年十一月十五日發會式を兼ね各地柔道家を招待して柔道大會を催した。これ北加における柔道大會なるものが正式に催された嚆矢である。次が一九三一年南加選手と南北對抗大會を催し、同年明治大學柔道部選手（監督牧野政治六段引卒）の渡米より柔道熱は再び勃興した。斯くして一九三二年には南加羅府で第二回の南北對抗大會を開き何れも優秀なる成績をあげた。同年羅府に第十回オリムピック大會が開催され、日本よりは體育協會名譽會長として嘉納治五郎師範が渡米したので、桑港柔道々場は主催して中北加各地選手を網羅する歡迎柔道大會を、一九三二年八月廿四日桑港金門學園ホールにて開催の上、嘉納師範より昇段入門を許されたる者が多數あつた。嘉納師範は北米の柔道今日の隆盛と、特に二世選手が多數斯道に精進する現況に鑑み、時の總領事若杉要を説いて有段者會設立の議を諮つた。若杉總領事は直ちに官邸に柔道關係者を集め協議の結果一九三三年二月北加柔道有段者會が創立され初代會長として若杉要を推し、中北加に於ける柔道指導の本部となり、統一的に活躍する事になつた。其後一九三四年十月講道館指南役永岡秀一（十段）歐米視察の歸途來桑し同月十四日金門ホールに於て中北加の各道場員出場歡迎柔道大會を催し、永岡指南役の柔道講演實習を爲し、時の會長總領事富井周は、斯道獎勵の爲め優勝大銀杯を寄贈し、爾來毎年桑港に於て秋季中北加柔道大會を開き此優勝杯爭奪戦を行つてゐる。一九三六年十月廿七日獨逸伯林で開催された第十一回オリムピック大會の歸路米國を經由した嘉納治五郎師範の來桑を機會に嘉納師範の希望により時の總領事臨崎觀三が斡旋して十月廿八日桑港日米協會が主催となり、フエヤメントホテルの階下大

演技場に於て、米人方面に對する柔道講演と實演の夕を開催した。當夜の出席者は米國陸海軍西部司令部の代表、在郷軍人團代表、スポーツ界知名の人等五百餘名に及んだ。嘉納師範は當時七十六歳の高齡にも拘はらず壯者を凌ぐ大元氣にて自ら壇上に立ち、流暢なる英語を以て自由自在に柔道の發達より其の精神的方面に及ぼす日本武道の精華を説き、山内俊高五段を相手に電光石化的妙技を演じ、精力善用の極致として柔道が如何に科學的且つ精神的に卓越してゐるものであるかを如實に證明して滿堂を吃驚せしめた。一九三七年早稻田大學柔道部選手及び明治大學柔道部第二回渡米選手（監督葉山三郎當時五段）等の渡米するあり、一九三八年には慶應義塾大學柔道部選手が飯塚國三郎師範（九段）に引率されて渡米、各地に於て對抗試合を行ひ在米同胞選手の伎倆は著しき進境を示した。一九三九年には宇土虎雄（七段）鈴鹿五段等が南北各地に於て講習指導する所あり、北米に於ける柔道は年と共に盛大に赴き、現に中北加州には十九ヶ所の道場と有段者百三十二名、道場員一千二百餘名を有するに至つた。現在北加有段者會管轄内にある柔道々場所所在地は左の如し。

△北加柔道有段者會幹部氏名

桑港、王府、ベスカデロ、サリナス、レッドウッドシテ、モントレイ、ワツソンビル、コンコード、須市、ローダイ、櫻府、ウオナツグロブ、コートランド、ブラザー、フレズノ（二ヶ處）パリア、デラノ、ベカスフィールド（一九四〇年現在）

會長 佐藤敏人（總領事）△主事 築山忠雄（書記生）△幹事 土井口祐太郎（有段者待遇）△各地道場指導者 黒江五段、玉那覇五段、渡邊四段、川崎四段、岡本三段、松田三段

南加道場及び有段者會

沿革

南加柔道界は羅府を中心に發達し、現今柔道を修業する者二千餘名を越え、第二世青少年指導機關と

して、重要な位置を占めておる。其の沿革は、一九一八年（大正七年）講道館の伊藤徳五郎五段が、羅府柔道道場を新設して以來各地に道場の開設を見たが、一九二八年（昭和二年）東部より山内俊高四段が來羅し、モネタ道場を開いた。當時第二世指導問題が、同胞社會の中心問題である學園と共に、日本人たるの精神的修養機關の缺如せるを如何にして補充すべきやに行き悩んでおつた時代として、忽ち柔道々場は全南加に普及し、嘉納治五郎師範數度の來羅に依り一段と柔道熱を高め、一九三〇年三月、北米南加柔道有段者會が創設され、管轄下の統一を圖ると共に、母國觀光武者修業團を毎年組織し、日本、朝鮮、滿洲各地に、海外に生れたる日本柔道の精華を、其母國に發揮して斯道進展に不斷の努力を續け、毎年大會を開き南北對抗試合等を開催技を練つて今日に至つておる。一九四〇年（昭和十五年）現在、北米南加柔道有段者會に屬する道場は、廿九ヶ道場となり、其道場員約千五百名、有段者は六段一名、五段五名、四段六名、三段四十四名、二段百〇五名、初段二百名、合計三百六十五名に達しておる。

道場所在地

羅港、聖林、サンデーブル、オレンヂ、ハーバシテ、グレンデル、サンタババラ尙武館、北聖林、モネタバングル、ベニス、リードレー、パロスバーデス、羅府、上町、デラノ、ノーオーク、ホーソン、洗心、ペーカスフィールド、オクスナード、カヨテバス、ランポーク、アロヨグラデ、サンフアランド、プロレイ、西南、サンタマリア、ガタルビー。

△南加柔道有段者會幹部氏名（一九四〇年度）

會長 羅府領事吉田寛△副會長 新田松太郎、長野喜郎△會計 村上清五郎△會計監査飯田彌重△總務幹事辰野龍二
△指導者及び師範 吉田孝平、松浦安太郎、西森信雄、山田彌重、飯田董、長野喜郎、玉那朝光洋、村上清吾郎、萩尾太助、國行要、菊地隆士、文谷四郎、上島友祥、福田澤一

沙港道場及び有段者會

沿革

在米日本人の分布経路は、先づワシントン州シアトルより發して、漸次南下し今日の狀勢を示してお

るが、柔道界の發展も同様在米柔道々場の設立されたのは沙港を以て嚆矢としておる。シアトル市に柔道々場が始めて設立されたのは、一九〇八年（明治四十一年）二月で、日本講道館柔道が北米合衆國に進出し、道場を設けて一般青年に柔道修業の道を開いた最初である。道場はシアトル道場と稱し、北部地方の中心道場として支部道場十二ヶ所を有し、太平洋沿岸に於ける有力道場である。創立以來二十四ヶ年の星霜を閲し、現在四段、三段、二段、初段の百數十名の有段者を出し、名實共に充實した道場である。六年前現在の土地建物を購入、道場の所有財産として疊八十五疊敷き、沿岸第一の大道場たるの威容を示しておる。創設者は講道館現七段伊藤徳五郎で自ら師範として四ヶ年道場員指導の任に當り後全米の武者修業に出かけた留守中は、宮澤保太郎現四段が師範となり、其後に鈴木乾二五段、鈴木英太郎五段、白仁恭四段、横山四段が夫々教授し現在は熊谷康之六段、宮澤保太郎四段、柴田政太郎四段が其衝に當つておる。

沙港道場

一九〇八年開設當時は會員二十名前後に過ぎなかつたが、一九一八年には三十名前後となり同年地方道場としてタコマ、ファイフに新道場を設置し、一九二八年當時は道場員數百廿九名に増加した。此の頃より米國生れの第二世の幼年少年の柔道修得者を見るやうになり、會員は益々増加し現在では本道場（本部）の他、シアトル市に天徳館道場あり、全道場數は十八ヶ所。オレゴン州七ヶ所、カナダ洲に五ヶ所あり最近（五ヶ年以内）に於ける柔道修業者數はシアトル市を中心に各地方を合し約一千名に達しておる、各道場名は

シアトル道場、天徳館道場、グリーンレーキ道場、ベンブリツチ道場、ベルビュー道場、サニデル道場、ケント道場、白河道場、ファイフ道場、タコマ道場、エトンプイル道場、ヤキマ道場、央武館、修道館、尙武館、ミルオーキー道場、フードリバー道場、スポーケン道場、體育道場等である。

△道場員一千名 △有段者四百名

嘉納師範と有段者會

一九三二年講道館長嘉納治五郎師範來沙し北米シアトル柔道有段者會の組織成り、

シアトル道場を本部として各地の統一を圖り毎年大會を開いて指導普及に當つておるが、最近米人の柔道研究者多く其修業者も各道場に増加して來たが、現在有段者の大部分は二世で、言語の關係からも彼等は日本人と同様の稽古振りを示し、其成績又見るべきものがある。殊に二世は體格も良く、體力的にも精神的にも柔道を體得する事早く、其の進歩は著しきものあり、將來有望なる柔道家を期待さるゝ選手を多數に有しておる。各道場の對抗試合は屢々行はれており、一九三八年には熊谷康之六段官澤保太郎四段等が道場員廿五名を引率して南下し、羅府に於て南北對抗柔道大會を開催したが、米國における最大の對抗試合として斯界の注目を惹き斯道發展の爲めに多大の効果を擧げた。現在本部各地方道場の師範は、熊谷康之七段、官澤保太郎四段、柴田政太郎四段、新田准四段、望月五郎三段、坂野市郎三段、坂上松男三段、矢野滿三段、堀内武夫三段、西森三段、田村三段。

ポートルランド道場

央州ポートルランド市に柔道場の設立されたるは一九〇八年で（主任河野威太郎）同一〇年伊藤徳五郎師範として多數の青年に稽古を付けてゐた。其後暫く道場廢絶してゐたが近時二世青年の成長に伴ひデヴィス街に新道場を設け盛大に武道教養が行はれ現在に及んでゐる。

米國警察とヤワラ

講道館の指南役故山下義昭（十段）が一九〇六年渡米し（當時七段）時の大統領セオドル・ルーズベルトに柔道を教授して以來米國に於ける柔道は日本の武道として各方面の注意する所となり、一九一五年には羽石幸次郎三段が米國陸軍中尉の資格を以て紐育のロングアイラント、アプトン兵營の陸軍將校に柔道を教授し、後シカゴの陸軍士官學

校へも教官として聘されてゐる。其他各地に柔道を教授する柔道家が在任して廣く米人間に識られるに至つたが、現在桑港市フルトン街五六六に宏大な個人道場を多年經營する柔術師範松山篤雄（宮崎縣都城出身）は「水の流」拳法より工夫したる「ヤワラ」を米人間に教授しておつたところ一九二九年米國警察學の權威オーガスト、ヴォルマア博士が、加州パークレー警察署長兼加州大學講師に就任するや、松山は聘せられて同署の警官に約一ヶ年「ヤワラ」を教授すると共に、自ら案出した「ピストル奪取法」を教へ現在全米の警察官は此方法を使用しておる。右の外松山は警察棒（警官の携帯する棍棒）を改善するなど米國警察界に貢獻する所尠からず、其後各州各地の警察より招聘されてヤワラ指導に従事し、武道を通じての日米親善に努め其の道場には、二世及多數の米人が入門しておる。

劍道

緒言 武道の精華劍道が米國に紹介されたのは、萬延元年新見豊前守一行が渡米した際、隨員等に依つて桑港、紐育、華府の歡迎會席上で實演されたに始まり、其の後勉學のため渡米した留學生等は何れも士分の出身であり、劍道は身を持つる唯一の精神的訓練として必ず一刀を座右に置いて勉學修養に努めたものである。確實なる史料を得るに困難であるが、明治二年最初の移民として渡米したスネールの一行中に士族上りの快男子があり、常に大刀を腰にしてコルマの町を悠々活歩し、一日支那人と激論の結果鬭争となるや一刀の下にこれを刺し、當時世界の荒くれ男の集合地と謂はれた、ブラザビル界限に其の雄名を誦はれ、日本人の一刀は神技なりと彼等を驚嘆威伏せしめたと傳へられて居る。これらは單に其の一端を物語るものであるが、劍道を體得して心身を練るの必要は遠く海外に航した、我が民族の等しく把持しておつた信念であつた。然るに渡米後は境遇の變化、社會情勢の急變、生活上の奮闘

等の理由に依つて、これに遠ざかるの己なき事情になつたものの生活の安定も出来、第二世後継者の出るに及んで、剣道に對する憧憬はこれを第二世に體得繼承せしめ、眞の日本人たる第二世を養成すべきである、第二世指導の機關として剣道場の設立と良師範の招聘に着手し、今日多數邦人の在住する太平洋沿岸に於ては、大日本武徳會の流れを踏むものと、中村藤吉教士の指導開設に係る北米武徳會に屬するものとの二團體に依り、非常なる勢ひを以て發展し今や柔道と共に、各地到る處に道場は設立され、第二世指導機關として重要な活躍をなし、今日進展の一路を辿り、益々盛大に赴きつゝあり。今二團體を中心とする北米の剣道沿革と現況を左に記述する。

大日本武徳會南加支部

南加州に於ける剣道界は、大日本武徳會北米南加支部と、北米武徳會南加支部との二支部に依り、劍士二千餘名有段者三百名を越ゆる盛況を呈し、青少年指導啓發に多大の貢献を爲してゐる。

北米南加支部沿革

一九一四年（大正三年）十月羅府北サンビードロ街二一九番で、剣道有志主催の下に大會を舉行し、之を動機として同街一三三番に剣道場を開設し熱心に稽古に精進する者二十數名を算へ、南加剣道發展の第一歩を踏み出した。一九一五年十月同街二一九番羅府道場に移轉し、羅府青年會劍道部の名稱の下に大村一心を師範とし、笹森順造、木島謙治等が指導して専ら青年劍士の養成と剣道の普及に努力し、毎年二回劍道大會を開催して剣道熱を振興しておつた。爾來青木龜之助、木島謙治、久保田豊、志茂多盛五段、瀧口喜信三段等の熱心なる努力に依り、一九二九年（昭和四年）以來南加各地に道場の設立されるもの増加し、従つて之を統一して斯道の普及と發展を計る必要上、一九三一年（昭和六年）四月南加剣道同志會を組織し、木畑辰夫を會長に推し幹事久保田豊就任専ら第二世劍士の指導に盡力した。一九三二年八月高野佐三郎範士が早稲田大學劍道選手一行を引率し

て渡米し、各地で對抗試合を行ひ、南加に於ける剣道熱は一段の進境を示した。一九三四年（昭和九年）一月青木龜之助氏の主唱の下にハンテントンビーチ道場に有段者有志の會合を開き、其席上大日本武徳會北米南加支部設立の件を可決し、京都大日本武徳會本部と連絡する事となり、南加剣道同志會會長醫學博士木畑辰夫を代表とし交渉を重ね、青木龜之助は歸國して、木畑博士と協力の結果一九三五年（昭和十年）二月二十一日大日本武徳會總裁 梨本宮殿下より、南加支部設立の認可あり同年三月六日附を以て、總裁 梨本宮殿下より役員の囑託があり。

同年七月久保田専務主事は本部連絡の要務を帯びて渡日し、同年十二月十九日 梨本總裁宮殿下御旨並に支部旗を拜受して歸米し南加支部の基礎は彌々鞏固となつた。支部に於ては之れを機會として、關係委員總動員の下に會員募集と劍士養成に全力を傾注した結果、全員數は壹千五百名を超過し劍士一千名内有段者二百名を擁するに至り、一九三六年（昭和十一年）五月三日、第一回武徳祭並に演武大會を支部所屬道場日加青年會館で舉行し、爾來毎年之れを開催、武神を祀り武徳の涵養に資してゐる。更に春秋二期に互り支部優勝旗並に早稲田大學劍道部寄贈優勝刀大試合を催し斯道の獎勵に力めつゝあるため、修業者第一世、第二世劍士間に於て心技共に著しき進境を示すに至り、我民族發展上大に意を強するに足るものを痛感する次第である。

猶南加支部所屬道場は現在左の廿五ヶ所に設置されてゐる。

ボルドウインパーク△プロローレー△中央學園△コーチエラ平原△チエラピスタ△エルセントロ△エルモンテ△ガーデナ學園
△ガーデナ體育會△ホーンソン△ハンテントンビーチ△アルバイン△キーストン△ロミタウオルテリア△パサデナ△羅府正道館
△羅府上町△レドンドビーチ△リバサイド△ソーターレル△サンバナデノ△サンデゴ△サンタモニカ△西南劍道部△禪宗劍道部

高野佐三郎範士渡米

一九三八年（昭和十三年）七月、日本劍道界の先輩高野佐三郎範士が早稲田大學劍道部劍士一行を引率して再渡米し、令息高野弘正教士と共に、沿岸各地道場と試合を行ひ、特に米國諸大學、宗教團體體育協會等に自ら範を示して、武士道の眞髓を説き、日支事變に關連して米人の感情動もすれば悪化せんとする折

に不拘、剣道を通じての日米親善に寄與する所大なるものがあつた。

現在大日本武徳會北米南加支部の役員氏名は左の通りである。

支部長 吉田寛(領事)△副長 迎田勝馬、仲村權五郎△監査員 藤岡紫朗、熊本俊典△常議員 青木龜之助、木島謙治、野村晴之輔、志茂多盛、竹野儀次郎、宮原廣次、濱崎廣一、島田里、原豐頼、天野實、新田松太郎、安倍俊吾、古屋博、原田須萬次郎、力丸勳、吉田美樹△主事 上野喜之助△事務主事 久保田豊△幹事 保坂廣次、辰野龍二△事務幹事 東佐一△外交部委員 石丸鐵哉、山本庄作△委員 藤井整、駒井豐策、野澤謙次郎、佐藤春吉、高村勘吾、上條勇、松浦安太郎、山田彌重、中澤健、小池四良、立花親守、小篠徹

北米武徳會

沿革

一九二九年(昭和四年)九月廿七日、布哇經由で、南加羅府に上陸した朝鮮武徳館々長、大日本武徳會劍道教士中村藤吉は中原、秋田の兩劍士を伴ひ、南加州一圓の巡歴を終つて、一先づ、沿岸サンビドロに旅程を止どめ、同地の藤井登六劍道練士と協力して、青少年二十八名に劍道の手ほどきをしたのが、北米劍道界今日の隆盛を見る端緒となつたのである。中村藤吉教士はサンビドロの講習を第一階段として、翌一九三〇年一月より、沿岸ガタループ、サリナス、ギルロイ、ワツソソビル各處に劍道講習會を開き、劍を通じて第二世青少年男女の指導教化に當り、奮闘努力を續けて、滿十ヶ年の間、加州各地に劍道聯盟五個、五十數ヶ所の支部を設立し、更に遠くオレゴン、ワシントン兩州にも其の開拓の歩を進めて、西北部聯盟と九支部を設立し、今や北米武徳會は、南加、中加、沿岸、北部サンオーキン、西北部の六個聯盟を結成し、

サンビドロ、ドミングスヒル、ロングビーチ、ノーオーク、羅府、サリナス、モントレイ、ワツソソビル、キャンベル、アラバド、コンコート、セバストポール、スースン、バカビル、サクラメント、ルーミス、メリスビル、オーバン、大正區、フロリン、スタクトン、ローグイ、リビングストン、マデラ、バイオラ、フレズノ、フアラ、リードレー、ハンホード、ダイ

ニューバ、バイセリア、リンゼー、デラノ、ベカスフィールド、央州ポートルランド、グレシアン、華州シヤトル、サウスポーク、ホワイトリバー、サムナー、タコマ

現在四十一支部を有し、劍士の數、一萬名を突破するの盛況を呈するに至つた。

然して北米武徳會の二世劍士の中より練士二名、四段四名、三段、二段、初段五百五十名を出し、此の外、二世外劍士に練士三名四段三名、有段五十餘名を有して居る。又一九三二年(昭和七年)夏よりアラバド本部道場に、北米武徳會夏期武道專修學校を創設し、暑中休暇中各地の劍士を收容して、劍道と日本語を學ばしめ、爾來六ヶ年續し、好成績を擧げて居る。同年六月三十日中村藤吉教士は、二世母國武者修業團を組織し、自ら一行十四名を率ゐて歸朝し、東京を振り出しに日本各地を見學修業し、更に朝鮮、滿洲に足歩を進め、到る處北米の天地に劍道が斯くも盛大に發達せるかを紹介し、母國劍道界をして驚異の眼をみはらしめたのであつた。引續き毎年母國見學武者修業團を日本に送り、斯道練磨と共に、日本文化の吸収に努力して居る。又中村教士は、一九三七年(昭和十二年)歸朝し、母國の後援者頭山滿、丸山鶴吉等の盡力にて、東京市杉並區天沼三丁目六四六番地に、堂々たる北米武徳會皇道學院を新築し、現在二十數名の二世劍士を收容し、劍と語學を學習せしめつゝ今日に及んで居る。

北米武徳會幹部 (一九四〇年現在)

名譽顧問 頭山滿△總裁 丸山鶴吉△顧問 教士中村藤吉△名譽會長 塚本松之助△會長 岡田治郎(櫻面都聯盟會長)△副會長 橋本數市(南加聯盟會長)△同 桂源輔(中加聯盟會長)△同 壽村逸發(沿岸聯盟會長)△同 藤森壽一(産黄金聯盟會長)△同 奥田平次(西北部聯盟會長)△事務理事 高井誠吾△會計 片岡實一△會計監査 佐伯彌三郎、渡邊正藏、村田繁、久安龜一△總師範 練士藤井登六

北米武徳會南加聯盟會

一九二九年(昭和四年)十月、朝鮮武徳館長中村藤吉教士が、羅府本願寺ホールに於て初めて大日本帝國劍道型に則つた、劍道講習を開始以來、南加全帯に互る劍道熱は頓に勃興するに至り、サンビド

口剣道師範藤井登六は、中村教士來訪を期に同地に剣道講習を始め、ロングビーチ、ドミングスヒル、ノーオーク各地の剣士何れも欣然之に参加し、各地に道場は簇出した。其後中村教士は北行して沿岸中北加各地に同様、剣道場の設立を見、北米武徳會の結成さるゝや、其支部は南中北加合して、四十一ヶ處に及び南北の同志相連結するの必要上一九三四年七月、北米武徳會南加聯盟が設立された。本部をサンビドロ港ターミナル、ウエー二三〇番に置き、翌一九三五年十一月多數有段者の輩出するに至り、南加聯盟有段者會を組織し、之が統一指導を爲し今日迄、倦まず撓まず二世劍士養成に努力精進しておる。

南加聯盟事業

△一九三四年 桑港で開催の日米新聞社主催剣道大會並に全米剣道大會に出場す。

△一九三五年 チウラビスタへ遠征、同年八月十八日櫻府に開催されたる、全米剣道大會に出場し優勝旗を獲得す。

△一九三六年 六月フレソノ市に開催の、全米剣道大會に出場再び優勝旗を獲得

△一九三七年 七月四日五日サンビドロ道場に、全米剣道大會を開催す、参加劍士は中加、サンオーキン、北加、沿岸、各聯盟より一千名出場 南加側劍士又も優勝旗獲得

△一九三八年 有段者の總數は四十餘名に達し今日に及んでおる。

北米武徳會中加聯盟

中加方面に於ては、古くより剣道、柔道は青年間に練磨され武徳會の設立を見てお

つたのであるが、一九三二年中村教士の來布と共に、剣道熱は再び勃興し、同年五月十五日、布市ライアンホールに於て、中加四個武徳會が主催して、中村教士の送別剣道大會が開催され、翌一九三三年四月十五日、フワラーに於て中加五個武徳會の、聯盟剣道大會が開催され、中加に於ける剣道熱は其の高潮に達したので、一九三四年五月二十日リードレーに於て、北米武徳會中加各地の代表聯合協議會を開き、北米武徳會中加支部の設立を見、六月三日フレソノ佛教會堂に於て盛大な發會式を舉行し今日に至つておるが、中加聯盟は、役員の弛みなき努力と、一般父兄の惜み

なき後援とにより、爾來益々健全なる歩みを続け約二千名の剣道講習者を出しておる。

中加聯盟事業

△一九三四年 六月三日フレソノ佛教會堂に於て、支部發會式を行ふ、十一月四日布市ライアンホールに於て、中村教士の送別を兼ね、中加支部秋季大會を開催す、中加十個支部参加、劍士三百五十餘名出場

會衆二千名

△一九三五年 二月十日佛教會堂で、建國祭祝賀剣道大會を開く七支部参加す。

△一九三六年 三月十五日ライアンホールで永田師範送別を兼ね、春季大會を開く

六月二十日、二十一日ライアンホールに於て全米剣道大會を開催す。

△一九三七年 六月六日ライアンホールで春季大會を開く、七月廿五日森寅雄、藤井登六兩鍊士の率ゆる、南加武者修業團來布歡迎剣道大會を開催す。

△一九三八年 三月六日リードレー武徳館内に有段者、聯盟幹部、各支部長會合協議の結果、中加聯盟有段者會を創立す。

北米武徳會北加聯盟

一九三一年十一月、中村藤吉教士來櫻を機として、剣道講習會を開き、同四月サクラメント、オーバン、大正區、フロリン、ルーミスの五ヶ處代表者が櫻府に集合し、北米武徳會北加地方聯盟を組織し、本部を櫻府に置き前記各地を支部となす、其後メリスビル、バカビル、スースン、セバストポールに支部設置され、劍士二千名を有する、北米武徳會聯盟中の最大のものとなり、北加剣道發達の上に多大の貢献を爲し、銳意今日に及んでおる。

北加聯盟事業

△一九三二年 六月十二日櫻府に於て、中村師範送別剣道大會を開催、同六月廿日中村教士に

引率されて、本聯盟より二世母國遠征武者修業團に参加角谷、原兩劍士出發す、同十一月十三日、不老林日本人

ホールに、北加聯盟秋期大會を開催す。

△一九三二年 一月十日聯盟代表者會を櫻府に開き、春秋二期剣道大會を開く事に決定。

△一九三三年 一月バカビルハイスクールでは、今回日本剣道を正規科目として採用する事になり、同校運動場を白人の剣道々場として使用を許さる。三月十三日櫻府に北加聯盟剣道大會を開催、八ヶ團體参加の外に桑港、オーランド、スタクトン、フレスノ方面よりも出場剣士五百名を越ゆ。六月四日中村教士昇格祝賀及送別大會を大正學園ホールにて開催、十一月二十六日櫻府アモリホールに於て聯盟大會を兼ね、中村教士歸米歡迎大會を開催す、出場剣士一千名。

△一九三四年 三月四日バカビル高校大ジムにて、北加聯盟春季剣道大會を開催、出場剣士三百餘名、六月三十日七月一日桑港で開催の、全米剣道大會に出場す、觀衆四千名と註され盛況を極む。

△一九三五年 三月三十一日メリスビル佛教會ホールに於て、北加聯盟春季剣道大會を開催、五月五日ローダイで開催の産黄金平原聯盟大會に出場す。八月十八日中村教士歡迎、全米剣道開催、十二月一日櫻府アモリホールにて芦澤師範送別兼秋季大會を開催、劍士五百餘名出場。

△一九三六年 一月二十五日フレスノ市に於て、北米武徳會聯盟代表者開催、北加聯盟より岡田會長、片岡幹事出張し、各地代表者と共に、大日本武徳會との連絡問題を協議の結果、交渉打ちりを決議す。三月八日オーパンのブラサ高校内に於て、平野師範の送別を兼ね春季大會を開催す、六月二十日、二十一日フレスノ市に開催の全米剣道大會出場す。

△一九三七年 三月櫻府に於て春季大會を開催す。七月四日五日南加サンビドロに開催された、全米剣道大會に出場す、八月五日、櫻府佛敎青年會大シムで中村教士送別及秋季大會を開催す。

△一九三八年 三月十四日櫻府佛敎青年會館に於て、春季大會を開催す。

北米武徳會産黄金聯盟

北加各地に剣道熱勃興するにつれ、歴史には古い、スタクトン市、ローダイ、リビングストン、コーデス各地に北米武徳會の支部が設立されるに至り、之が將來の發展と、圓滑なる統轄の必要上一九三四年十一月、前記各地支部代表協議の結果、北米武徳會サンオーキン聯盟の組織を見た。十一月二十三日スタクトン支部道場に於て、剣道大會を開催し、爾來毎年大會を開き、劍士指導と品性の陶冶に全力を注ぎ、著しき成績を擧げておる。

産黄金聯盟事業

△一九三四年 十一月二十三日中村藤吉教士寄贈の優勝刀争奪剣道大會を、スタクトン市旭座に於て開催、各地より劍士多數出場盛會を極めた。

△一九三五年 五月五日スタクトンに於て産黄金聯盟大會を舉行す。十一月二十四日リビングストンで、第二回聯盟大會を開催す。

△一九三六年 聯盟總師範として、野澤保四段を招聘す。

△一九三七年 春産黄金聯盟第三回大會をスタクトン市に開催。

△一九三四年より 毎年桑港サクラメント、フレスノ、サンビドロ各聯盟所在地で開催された、全米剣道大會に所属劍士を多數出場せしめ、何れも其非凡なる技倆を示し今日に至つてをる。

北米武徳會

西北部聯盟

一九三六年九月十二日北米武徳會の創立者中村藤吉教士は、丸山、助金兩鍊士外三名を卒るて、沿岸西北部及び、オレゴン、ワシントン兩州を巡遊の途上、シアトルに立寄りたるを機會に、剣道講習會を開き、間も無く、第一回剣道講習會はシアトル剣道會の劍士を中心として開催されて以來、剣道熱は非常なる勢ひを以て勃興し、同年十月十八日タコマ支部の設立を見た。之れ西北に於ける北米武徳會支部の嚆矢である

同年十月二十五日ポートランド市に中央支部設立され、同十一月二十五日サムナ支部の設立を見、同十二月十二日サウスパーク支部の發會式を挙げ、一九三七年中村教士は再び沙港に至り、シアトル佛教會にて劍道講習會を開き同二月二十二日白河支部を開き、同三月八日シアトル支部の設立さるゝに至り、西北部の劍道界は、中村教士の指導に依り、短期間に於て良く今日の普及を見た。如斯北米武徳會の支部が各地に簇出したので、同年三月二十一日タコマ市に於て、中村教士送別を兼ね、北米武徳會西北部聯盟の發會式を舉行して、茲に統轄的機關を設置し、西北部青年指導の爲め組織的活動を開始する事となり、今日に及んでをる。

西北部聯盟事業

△一九三七年 三月二十一日タコマ市コルシウム會館に於て北米武徳會西北部聯盟發會式並に劍道大會を開催す、出場劍士二百餘名、觀衆七百名と註された。同六月二十六日米人側の要請に依りワシントン州白河支部に協力し、サムナ、サウンスパーク、タコマ、シアトルより劍士、百二十名、原師範指導の下に、セント市のレタス祭に出場、日本劍道の眞髓を堂々紹介し、數千の觀衆より多大の賞讃を博した。同十月五日西北部聯盟有段者會を組織す。同十一月二十一日ポートランドにて、中央支部創立一周年記念劍道大會を開催す、六團體の劍士参加し非常な盛況であつた。

△一九三八年 三月十三日、シアトル市ワシントンホールに於て、西北部聯盟第二回劍道大會を開催す、参加團體はオレゴン州中央支部（ポートランド道場、グレッツシヤム道場、慈知道場）タコマ支部、サムナ支部、サウスパーク支部、白河支部、シアトル支部。

北米武徳會

北加沿岸聯盟

一九三〇年一月七日結成された、北米武徳會北加沿岸劍道聯盟は、折からの劍道熱の波に乗る、アリナス、ワツソソビル、マウントエデン、ロスアルトス、マウテンビュー、サンノゼ、アルバラド、メンローパーク、モントレイの各支部を網羅し、劍道の隆盛と、民族精神の發揚に努力し來つた。

が、一九三五年中村教士歸朝と共に、適當の師範なき爲め積古不能となり、今日に及んでおる。

北加沿岸聯盟事業

△一九三一年 六月二十一日サンノゼ佛教會ホールにて聯盟總會を開催

△一九三二年 五月廿九日桑港で開催の、早稲田大學劍道部選手歓迎劍道大會に出場、同十月十六日モントレイ市に於て劍道大會を開催す。

△一九三四年 六月三十日、七月一日桑港に開催の全米劍道大會に出場す。

弓 道

北米弓道界

弓道は日本古來の武道として日本人の心身鍛錬の上に、劍道柔道と共に永い傳統を有し北米の天地に於ても同胞間にかなり古くから行はれておつた。一九〇六年の桑港大震災前までは桑港市デュボント街を中心にして所謂大弓場なるものがあり、千葉縣人野中彌三郎、和歌山縣人田中竹之丞等が經營し、主として娛樂本位の遊戯であつた。眞の弓道道場が設置されたのは一九二五年前桑港金門公園萩原茶寮の萩原五郎が日置流の弓術家今泉和三郎を師範として同園内庭園の一部に矢場を設け、眞櫻會を組織し、北加州各地の同好の士四十餘名が會員となり、毎月例會を持ち春秋二季大會を開き、金的額を同庭園神社前に掲げ斯道に精進したが弓道として纏つた團體の出來た最初である。其後桑港に於ては前記眞櫻會の外に、一九二六年海老名春舟郎、山崎千吉、永田繁等によつて弓道擧月會が生れ、一九三〇年王府には鹽澤徹四郎、青木實治等の王府弓道會あり、南加州では羅府弓道會が山内惠罔等により組織され、南北加州共に弓道熱は盛んとなつた。然るに今泉師範は歸國し、萩原五郎、山崎千吉、は没し、眞櫻會擧月會共に振はず、後ち桑港田中小一郎等により、桑港弓道會が生れ、現今に於ては王府、羅府、桑港の三弓道會が

毎月例会競射會を持ち、米人社會へも進出して弓道の妙技を振つておる。東部地方紐育では一九一七年豊川順彌が始めて弓道を米人に紹介して以來、同好者に依つて紐育弓道會が生れ今日に及んでゐるが米人の入門者も多數あり盛會を極めておる。

相撲

緒言

日本人の到る處必ず相撲は附きものである國技相撲道は、單に之れを運動競技趣味として見るよりも我が日本人の精神力と其性格を遺憾無く發揮する點よりして、北米の天地には古くより相撲が興行され、又所謂素人相撲なるものは到る處に催された。近年に至つては第二世選手が輩出して、青年聯盟相撲なるものを組織し、相撲道の精華を發揚すると共に相撲道を通じこの青年指導に多大の貢獻を爲しつゝある事實は、海外植民史上の一異色たるを失はない。殊に無味乾燥なる移民地に於ては娯樂として相撲興行が大に歡迎され、今日迄横綱常陸山、梅ヶ谷、太刀山、大錦、鳳の如き現役横綱一行が渡米し又元横綱栃木山の春日野親方等も歐州よりの歸途來米し、第二世選手指導の任に當る等、四千哩の異境に四本柱を建て土俵を作つて、眞裸の壯者青年が潑刺たる相撲氣分を漲らし輪贏を決する壯觀は日本の姿其ものを展開してあり、民族發展の第一線に立つ、在米日本人の意氣と不撓不屈の剛健なる精神力を涵養する源泉として、同胞社會に國技相撲道が根強く培はれてをる事は寔に意義深いものがある。

常陸山の渡米

一九〇七年（明治四十年）八月四日東京相撲の横綱常陸山は和歌の浦、近江富士、平田山、他に柔道家佐竹信四郎四段の一行を引き連れて、日露講和に幹旋の勞を執つた米國大統領ルーズベルト氏に、日本刀を献上すべく渡米した。一行は八月廿三日郵船加賀丸でシヤトル港に到着シカゴを経て紐育に赴いたが、ル大統領

は亞弗利加に猛獸狩りに出かけた留守中であつた爲め、紐育に三ヶ月間滞在し翌一九〇八年一月華府ホワイトハウスに於て青木駐米大使の幹旋でル大統領に面接（鹿島神社の寶刀であつた出羽大椽藤原光圀の銘刀を陣太刀に作つたもの）を献上し終つて、同處に於て横綱土俵入りの盛儀を見せて大喝采を博した。常陸山は二月ルシタニア號で歐洲へ向つたが一行中の和歌浦、平田山、佐竹の三人は其儘米國に残り、和歌浦、平田山はシカゴ、シヤトル、桑港、羅府等沿岸各地で相撲を指導し、和歌浦は引續き滯米、現今に至つておる。一行の渡米に依つて日本の相撲は始めて世界的に紹介されたのである。一九一五年（大正四年）桑港にパナマ萬國博覽會が開催され、常陸山は、梅ヶ谷、西の海玉格の一行三十名を引率して再び渡來し大博を中心に各處で相撲興行を爲し大成功を収めた。其後一九二〇年（大正九年）大阪相撲朝日山一行も渡米し各地の興行何れも大入滿員の盛況を呈し、興行的にも多大の成果を擧げて歸朝した。

相撲熱の勃興

恰度此時代は在米同胞の平均年齢四十四五歳前後であると共に、日露戰爭、歐州大戰に依る日本の立場が、世界列強と伍して何等遜色無きのみか、我が民族の有する優秀性は寔に卓越しておるものと云ふ一種の矜りを感じると共に、堂々と國際競争裡に打て出たかの如き自負心は、海外に在る者の等しく懐いた所であつて、自ら剛毅なる精神力の發揚である國技相撲、劍道、柔道は身心俱に最も旺盛な時期に在つた同胞間に歡迎され、其興行が何れも成功した所以である。其後布哇へ太刀山、鳳一行の渡米あり此等職業相撲の渡米に依り、在米同胞間の相撲熱は勃興して各地に青年相撲大會が催されるに至つた。

相撲協會組織

桑港では有志の發起の下に一九一五年相撲協會を組織し、職業相撲の興行を援助し、米布對抗相撲大會を開催する等の催があり、サクラメント、サンノゼ、フレズノ、羅府、サンビードロ、バーバンク、チワナ等の各地にも相撲協會が組織され、優秀選手が續々と出場して相撲道は、非常な勢ひを以て進展した、一九二五年（大正

十四年) 羅府に組織された、南加相撲協會が中心となつて、中北加、沿岸各地相撲協會と連絡を取り、當時技師伯仲と見られた。日本大學生相撲選手一行十五名を招聘し、八月羅府、桑港で對抗相撲大會を開催した。桑港に於ては折しも、故駐日米國大使バンクロフト氏遺骸護送の使命を帯びて來桑した帝國軍艦多摩乘組員相撲選手一行をも加へて盛大に催され、青年相撲指導發展に多大の効果を與へたのである。其後學生相撲の渡米は第二回日本各大學選拔選手(關東關西聯合)で、南加相撲協會の招聘に應じ一九二七年(昭和二年)渡米し、七月三日羅府に於て對抗大相撲を盛大に舉行した。大學選手の渡米は、其後中絶したが、一九三一年(昭和六年)七月大阪毎日新聞社後援の全國中等學生選拔相撲選手一行十二名が渡米し、八月羅府、櫻府、桑港で對抗試合を行つた。之等學生相撲選手の渡米は、在米同胞相撲界を刺戟し、特に青年相撲は各地に於て組織的發達を見るに至つた。一九三七年に米國相撲協會が主となり北米第二世相撲選手見學團一行十名が渡日し、各地の學生相撲と試合を行つて好成績を挙げた。

栃木山の渡米

各地に相撲協會が生れ、有力選手の續出するに至り、一九二四年(大正十三年)十一月九日サクラメント體育會が主催となつて、同地佛教會敷地土俵にて青年大相撲を開催し、桑港、サンノゼ、フレズノ各地の青年力士が多數出場し、北加空前の青年大相撲を舉行し一九二七年(昭和二年)一月元横綱栃木山の中田守也が歐洲よりの歸途羅府、桑港、サクラメント、サンノゼ各相撲協會の選手に稽古をつけ、斯道獎勵に努力し特に第二世選手の養成方針に就て種々劃策盡力する所があり、東京相撲協會と密接なる關係を生ずるに至り、同氏の斡旋によつて左の相撲師範を日本より招聘し何れも一年乃至二年滯米して各地の選手指導の任に當り、北米の相撲は本格的のものとなつた。

一九二八年 小金山、一九二八年 花甲、一九三〇年 常陸嶽、一九三七年 栃ノ峰、一九三八年 栃ノ峰、一九三九年 千葉昇

青年相撲聯盟生る

現今北米相撲界の中樞となつて、相撲道普及に精進しつゝあるものは、南加州の米國相撲協會(一九二五年羅府に創設)中北加州の中北加青年相撲聯盟(一九二七年サクラメントに創設)の二團體である。其所屬力士は總計約一千名に達し、歸米青年、第二世青少年が多數を占め各地に於ける大會には所屬以外の青年も加はり盛況を呈してゐる。毎年大會を催し、南北對抗優勝旗(大日本相撲協會寄贈)爭奪戰を舉行するが、中北加青年相撲聯盟は一九二七年第一回をサクラメントに開始以來、毎年二回多きは三回各地に大會を開催し、一九三七年十月三十一日布市に於ける第三十二回迄約十年間繼續してゐる。

北加青年相撲聯盟組織

青年相撲聯盟の選手は之れを年齢並に經歷に依りA組とB組に分つて聯盟戰を繼續して來たのであるが、A組選手の中には相當年輩者も出で種々の事情で相撲を中止するものあり且つ技術上の相違もある點より、一九二八年二月十四日、櫻府體育會が主催となつてB組選手を中心とした櫻府地方青年聯盟なるものを新に組織して、前記中北加青年聯盟戰とも連絡を取り、一九三六年(昭和十一年)迄十四回、サクラメント、コートランド、アイルトン、エルクグループ、スタクトン、バカビル、ワードランド、ローダイ各地に於て大會を開き何れも盛況を呈して來た。然るに一九三六年六月バカビルの大會に於て物言ひより紛擾を來したので一先づ此の聯盟は解散する事となり、翌一九三七年一月改めて北加青年相撲聯盟をサクラメントに組織し、日米新聞社よりの寄贈による優勝旗爭奪の聯盟戰第一回を同年七月三日櫻府で開催し爾來引續き各地に開催し一九四〇年三月よりは新世界朝日新聞寄贈優勝旗爭奪戰となし第十六回に及んでゐる。

參加團體は櫻府、コートランド、アイルトン、エルクグループ、スタクトン、バカビル、ワードランド、の七團體である。

猶同聯盟は一九三八年十六歳迄の少年組をも組織し毎年前記青年聯盟と共に大會を開き今日に至つてゐる。

第二世力士の進出

米國相撲協會と日本相撲協會との關係は前述栃木山の來米を機として今日迄連續し、毎年師範を選択して渡米せしめ相撲指導啓發に力を盡してゐるが、同時に第二世選手の中より力士として有望なる青年を日本相撲協會の力士たらしむる爲め渡日練習させてゐる、今日迄在米同胞第二世で同協會の力士となつたものは、

- △平賀將司(羅府出身)春日野部屋に入り昭和十一年五月序の口二段目に進む後歸米
- △福錦事福山定次 春日野部屋入門 昭和十一年一月場所八日目に出世相撲同十二年一月序の口六枚目序二段に進む、後歸米
- △筑紫海事塚本勝士 昭和十三年春日野部屋入門 昭和十四年一月出世相撲同十五年序二段西五枚目に進む、現在第二世力士として大日本相撲協會の番附に就くは筑紫海だけである(年齢廿二才身長五尺九寸)

他に昭和二年栃木山關來米の際所望されて歸朝したローダイ小畑清は春日野部屋の秘書役として相撲稽古の傍ら勉學中であり、昭和十四年羅府の今井青年が望月圭介氏の紹介で出羽海部屋に入門目下稽古中であるが身長五尺八寸五分、體重二百七十三斤で將來を囑望されてゐる。又シャトル方面で尾崎青年が同様出羽海部屋に入門してゐる。

正式免狀の行司

北米相撲界の正式行司は櫻府の高橋倂助で昭和十一年歸朝し、大日本相撲協會、木村庄之助より正式免狀を得て歸米し目下北米各地相撲協會の行司として活躍してゐる。

北加聯盟の幹部

北加青年相撲聯盟は本部を櫻府におき各地との連絡を取つてゐるが、一九四〇年度の幹部役員並に各聯盟指導者は左の通りである。

- 顧問 八木初三郎 伊藤善吉 高井誠吾 △頭取 福島平次郎 △副審 日向灘、朝日山、敷島、雪嵐、花勇、小石波、小港、土州山 △行司 木村倂助、基下薫、彈固山(進行) △師範 福錦 △監督及指導者 △スタクトン 檜坂、徳永、山崎 △アイルトン、富田、藤本、緒村、松本 △コートランド 井神、井芹、梅田 △エルクローブ 杉本、星野、山田 △バカビル 浪井、松尾、西郷 △ワードランド 津川、武田、國部 △サクラメント 佐藤、清水、西田、川平

野 球

同胞と野球

野球の本場米國に在る在米日本人の野球界が其の環境からしても、當然盛んである事は議論の餘地が無い。然し乍ら初期移民時代の同胞は主として學生生活の經驗無く野球に對する興味は比較的に微弱で働きの餘暇ある場合には多く一攫千金を夢みて支那賭博場に入出入りしたり、勝負事に没頭する有様であつたが一九〇〇年頃より新渡米者の激増と家庭生活を営むもの多くなり、漸く同胞社會を形成する時代となつて趣味の向上と相俟ち米國の國技野球に對する關心は段々と深くなつて來た。而して一九〇五年早稲田大學野球部選手が安部磯雄に引率されて渡米し、各地大學と試合した結果、在米日本人に與へた刺激は大なるものがあり野球熱は大に昂騰した。其後早稲田大學の外に慶應、明治、關西、法政等の各大學より毎年の如くに野球選手團が渡米する一方、在留邦人の子弟が成育して一般的に興味を喚ぶに至り、各地に野球團が組織され、一九二〇年以後の野球團は都市到る處に簇生し中には專屬野球場を有するものもあり、一九二四年には布市野球團(監督・笠井、主將・錢村)の日本遠征となり、翌一九二五年には佐市及櫻府野球團も續いて日本遠征に赴くと云ふ、在米邦人野球團の黄金時代を現出した。當時櫻府、須市、佐市、布市、羅府等の野球團は一ヶ年の費用約二千五百弗内外と云はれ、加州同胞間で野球團に使用する金額は裕に一ヶ年十萬弗を超過した。其の後一九三三年北加野球聯盟が新たに結成され引續き今日に及んでゐるが、同聯盟は旭(佐市)太陽(サリナス)大和(須市)體育會(アラメダ)ミカド(櫻府)野球團に依り組織されてゐる。此の外一九三五年には日本職業野球選手一行(監督市岡忠男)の渡米するあり、第二世の成育と共に野球は益々同胞運動界の王座を占めて發展の勢ひを示してゐる。

庭球

日本人庭球界

日本が一九一七年（大正六年）庭球デビス盃世界争覇戦に参加してより、在米同胞間の庭球熱は一段と昂まり、四季練習に適する沿岸地方殊に桑港、羅府の邦人間より優秀なる選手が續出するに至り、毎年開催さるゝ南北對抗試合の如きは年中行事の一として重視されるに至つた。現在桑港、羅府、王府、櫻府、須府、サリナス各地に倶楽部並に専用コートを用意するものもあり、屢々米人主催の大会にも出場し、スポーツを通じての日米親善に貢献して居る。庭球倶楽部として最も古い歴史を有して居る桑港日本人庭球クラブは、一九一七年日本がデビス争覇戦に始めて熊谷一彌選手を日本代表として、米國ニューボート選手権大会へ出場せしめた年、桑港の秋野、加藤、朝倉、高羽等によつて組織されたのであるが、當時は排日運動の最も熾烈なる時代であり、公開コートの使用等になみなみならぬ苦勞を重ねたものである。當時事務所をアッシュ街とウエブスター街の角に持ち、會員はA組、B組に分ち其數二十餘名であつた。會長山手笹人、米元次一郎、春日井義治等の熱心なる努力によつて何等他よりの補助も仰がず倶楽部を維持し來り、三保周一、鈴木誠之、古木勇、田丸圓平等が幹部員としてその發展に盡力した。現在は事務所をサター街一七七一におき、會長志村暢勇、幹事三保周一、會計鈴木誠之、鈴木讓治、書記鹽田、競技委員岡本靜夫等により運用され會員四十餘名に達して居る。毎年恒例の南北庭球争覇戦、其他の選手権大会等を主催し、羅府南加日本人庭球協會と提携して、在米庭球界の進展に不斷の活躍を續け今日に及んで居る。

籠球

沿岸諸大學の邦人學生の多數在學する處では、籠球チームがあり、青年會團體等にも同様第二世選手によつてチー

ムが多數組織されて居る。一九二八年には早稻田大學籠球選手が渡米し、各大學選手と競技し大に籠球熱を煽つた。現在桑港基督教青年會の昭和軍を中心として毎年聯盟選手権大会が催され、特に南北對抗戦は運動界の豪華版と云はれて居る。

蹴球

一九〇八、九年頃桑港ポリテクニク學校の學生で飯田善三郎と云ふのがあつた。彼は桑港名物の一人たりし黒澤格三郎醫士のもとにスクールボーイとして働きポリ校のフットボールチームに加はつて居つた。野球も遊ぶので富士倶楽部に加して居つた關係上富士倶楽部内に蹴球團を組織する事となり又同時代にローウェル高校の生徒であつた小谷ヘンリー、ポリテツニツクの平澤孔明彦等が兎に角亞米利加式フットボールを知つて居ると云ふので早速練習にとりかゝる事となつた。練習として日曜日毎に金門公園内第三十三街近くの公立ステータムに行くが其以外には毎晩スクールボーイの皿洗ひを終つて後、バイン街ゴルフ街からフエツトスコヤ等でシグナルや球をかゝえて走る稽古をした位のものであるが、元氣だけは向ふ見ずの概があり早速支那人チームに試合の交渉をした。當時ポリ校の選手でマーと云ふ六尺豊かの支那青年が主となつて恰度支那人間にもチームが出来た時とて、直ちに交渉まつまり一九〇九年の晩秋、王府コーストリーグ野球場に於て決戦試合をする事となつた。

日支對抗試合

何分コッターバックのヘンリー小谷、エンドの平澤、フルルの飯田等をのぞいては蹴球に就ての知識も足らず練習不足も原因して衰れにも十點對〇（當時タッチダウンは五點）で大敗したものの、ゲームで種々話の種が残されたが、足が早いのが取柄と云ふので左エンドになつた野中など支那人選手が球を抱いて走る先を超越して堂々ゴール入りをしたり、右翼をつとめた千浦は支那チームのコッターバックをフィールド線外迄追かけまし引倒

して喉じめを喰はし、選手は泡を吹きスイートハートの支那娘が泣叫ぶなどと云ふ様なども奇々怪々のゲームであつたが何分日本人最初の蹴球競技と云ふ點よりクロニツクル紙のスポーツ欄などチョンマゲに日本着姿の日本人選手一同がゴールポストの前に集まつておれ達はゲームに敗れたから切腹あるのみなど云ふボンチ繪迄掲載してある、斯くて富士俱樂部蹴球團は必らず見苦しき大敗の雪辱をせざるべからずと衆議の決果情報をつたり四方に可然選手を探索し強き結合をうながした結果タマルバイ、ミリタリーアカデミーの選手古谷賢男、ミルバレーの高校選手越智與一サクレットハートカレージの草間末吉(酒巻商會主)野口オ一(北米旅館主)山田輔也等の新顔を加へ小圃千浦の假偶に合宿しポリテクニツク高校のコーチ、ビシヨツプ氏を依屬し競技前の如き約二ヶ月晴雨に不拘三十三街のステーディアムに於て猛練習をやりコーチ、ビシヨツプ氏の紹介にて高校チーム等とも練習試合をなし格段の新境を示し意氣天を衝くの概を抱いて雪辱戦の日を待つたのである。試合は一九二〇年十二月廿五日場所は今のノースビーチマリナ近くプレシデオスターデアム前記の俱樂部會に於ては前祝として勝栗昆布の古式賽應など特に擧げ、大に精神を鼓舞したのである。今當時のラインアップ示せば、

左エンド 越智與一 左タツクル 江崎衛 左カード 野口才助センター 山田輔也 右エンド 平澤孔明彦 右タツクル
中根時藏 右ガード 草間末吉 コワターバツク 三輪鶴吉 右翼 小圃千浦 左翼 渡邊健之助 フールバツク 古谷賢男

リザーブに奥野、飯田其他等でさて當日は大降雨にも不拘觀衆は場をうづめ其六割方が支那人三割が日本人残り一割が米人と云ふ割合日本人側の聲援隊は青木道嗣(故)が音頭取りをやり佐野の日本學校よりボーイス達を連れ來りカーウベルやブリキキャンを吐いて大聲援をやり日支選手は惡泥の中に大激戦苦闘を續け、遂に十點對〇の雪辱戦を見事に果したのである。而し残念の事にはあらかじめ競技前審判官立會の上、球は勝者軍の獲得と決してあつたにも不拘一支那人選手が競技終了と共に球をかへて俱樂部ハウスに走つた結果日本人側でも黙してをらず俱樂部ハウス

に行き球を取返して來たのをきつかけに多勢をたのむ支那人觀衆が其の日本人選手をかこみ遂にたゞき合の大喧嘩となり騎馬巡查大勢乗込み漸やくにして取鎮むるが如き大騒擾を來した。此の騒ぎが極めて大であつた爲めに次年より日本人側からの申込みには支那人の方で不承知にてやむなく此の古き日支蹴球競技は中絶の如き有様であつた。

昭和軍生る 其後桑港に産れたる昭和チーム等又も試合競技が返り咲き最近日支事變發生迄年々の行事としてキーザ・ステーデアムに於て舉行されておつた。此間灣東各地にも野球チームの如き組織にて今日も引續き日本、ハ運動聯盟の下にそれ／＼發展しておる。

尙從來米人と比較し日本人の均勢的體格の差違は高校位迄はボツ／＼選手の中に其名を見たのであるが大學チーム等に進みては殆んど稀にて遺憾の極みなりしが昨秋のシーズンには加大農科の選手新田の如き同校の至寶として對校競技の得點は殆んど新田エンドの獲得するところであり、日本人として將來に進む新らしき記録を樹てて居る事は慶賀の至りである。

ボクシング 野球とボクシングは米國の國技とも云ふべく、スポーツ界の王座を占めておるが、日本人で此方面に進出した者は、一九二二年頃渡邊勇次郎(現東京日本拳闘俱樂部經營者)が桑港のドリームランドリングに出場したのを以て嚆矢とする。渡邊は一九〇六年渡米し、苦學の傍ら黒人拳闘家ターナーやムーズ師範(桑港レブンウォース街拳闘練習所主)に就て練習を積んだ、連戦連勝二十四回のレコードを有し、始めての日本人ボクサーとして其試合振りに現れる日本人獨特の國民性敗けじ魂が非常な人氣を呼び、一九一九年沿岸唯一の強豪ウキリーホツピーと闘ふに及んで一躍名聲をあげた。同年歸國し日本拳闘界の祖となり、東郷郡山等を渡米せしめ、次で萩野貞行、木村久雄等が各地に轉戦しておつた。一九二六年渡邊は自己の俱樂部で養成した。中村(金雄)、高橋、河田の三選手を卒るて再渡米し、沿岸各地の試合に好成績を擧げて歸朝した。一九二七年明治大學拳闘部選手白田金太郎は中村金雄と共に

に渡米し、臼田は其の年桑港で開催の米國體育協會主催西部十一州拳闘選手権争覇大會に出場して、力闘克くウエルトー級の米國選手権を獲得するに至つた。日本人として最初の選手権保持者である。臼田はオリンピック大会出場のため歸朝し中村は引續き滞米して斯道の研究と試合に勵んだ。一九三二年五月渡邊は徐延權選手を率ゐて再び渡米した。徐はバンナム級の選手権獲得を目標として在米三年、全米に亙つて數十回の試合を試み、屢々強敵を仆した。滞米期間満了の爲め歸國し熊谷一郎が引き代つて渡米し、一九二八年には玄選手が渡米各處に試合して好評を博した。

レスリング

柔道と相撲に酷似してゐるレスリングは、日本人の好むスポーツであり、興味も亦相撲、柔道と同様に深く、古くより在米日本人間に歓迎されておつた。殊に柔道はレスリングとの對試合に於て技術的に同型のものもあり、日本人柔道家は屢々マットに立つて輪贏を争ひ、日米人のフワンをして熱狂せしめたものである。日本人のレスラー（西洋相撲選手）としては一九〇九年頃王府の白尾高象、武藤武記等の柔道家が、興行師のマツクレアン（愛蘭人）に頼まれ出場したに始まり、横山醒舎が其の當時の強力マツク・ブラウンと試合つたりしてゐる。一九一六年頃から三宅太郎、伊藤徳五郎、野口柔道家（八段と稱しておつた）等がアドサンテル其他の力士と柔道、レスリングの混合試合等を行つて喝采を博した事がある。其後三宅太郎は職業レスラーとして世界選手権者ルイス・ロンス等の一流選手と闘つておる。一九二二年頃よりは高橋精造、樋上高雄、太田節三、松田マチイ等が活躍した。（松田マチイは永らく輕量級世界選手権を持ちエルバソ、ニュオルレアンを中心に南部方面の覇者として押へておつた）一九三〇年頃よりは、佐藤哲郎、沖謙名、志熊俊一（柔道五段京都武徳専門學校卒業）等が日本人選手として殆んど毎週開催される。羅府、桑港、王府其他の競技場に出場しておつた。一九三二年には日本人力持ちの第一人者と稱する鹿兒島縣人北畑兼高が渡米し、アドサンテルに就てレスリングを研究し後興行界に於て相當の成績を挙げた。近年に至つては前記佐藤、志熊、沖の他に工藤、濱中等の優秀レスラーが活躍して今日に及んでゐる。

杖球

杖球が同胞間に流行し出したのは、一九二〇年頃であるが此の以前東部紐育方面では貿易界の先達、新井領一郎が一九〇〇年（明治三十三年）病後靜養の目的で、北カロリナ州バインハースト地方で杖球の練習を開始し、爾來在紐育邦人間に流行を來し、日本杖球協會が生れ現在二百有餘の會員を有してゐる。沿岸地方では一九二二年桑港に霞俱樂部が生れ、一九二五年須市の江崎雷八がスタクトン市立ゴルフ場建設當時芝の植込み方法に關し、時々市當局に注言したに始まり、一九二八年須市ゴルフ俱樂部が組織された。此の外櫻府には一九二二年陽災俱樂部があり、華村サリナスにはイーグル、等の俱樂部が設立され、一九三二年北加日本人ゴルフ聯盟を組織し、毎年競技大會を開いてゐる。同胞が生んだ選手として佐藤儀一（目下日本滞在）須市の森本夫人等は何れも米人競技會に出場し、優勝決戦迄漕ぎつけ邦人スポーツ界の爲め多大の氣を吐いてゐる。

撞球

撞球も流行を極めた一九二〇年頃には、山田浩次、松山金嶺、菅沼忠雄等が職業選手として米國各地を巡業し、世界選手権を争ふに至り、邦人間にも撞球熱は昂騰し、桑港、王府の邦人球場には、競技臺を設備するものもあり、素人間には種々の競技會が開催されておつたが、近年は他種スポーツの勃興につれ撞球熱は下火となり、現在では昔時の面影なく僅かに同好の士に依り、競技會が行はれてゐる。

第九章 人口及び職業

緒言

在米同胞の消長を知る確實なる人口統計は近年に至り米國政府の國勢調査が十年毎に實施され、比較的精密なるものを察知し得られたるのであるが、在米邦人の移動は一九二四年新移民法施行を契機として、其後大なる變化無く、第一世は漸次其の數を減し、第二世が年と共に増加して行くのは、これ數的入國に制限を加へられた日本人として當然の歸結と謂はねばならぬ、本稿は一八六八年（明治元年）より、一九三九年（昭和十四年）に至る、七十二年間に亘る其の間、比較統計の價値ありと認むる、年代調査にかゝる在米邦人の人口並に其職業別を、米國々勢調査（一九三〇年度）及び各地所在帝國領事館並に日本人會の調査（一九三五年或は一九三九年）せるものを基礎としてその大勢を知るべく、茲に編纂したもの。

自一八六八年（明治元年）至一九一三年（大正二年）

在米邦人數

一八六八年（明治元年）	概數	六	一八八四年（同十七年）	同	四二〇
一八六九年（明治二年）	同	四八	一八八五年（同十八年）	同	五〇〇
一八七一年（明治四年）	同	六〇	一八八六年（同十九年）	同	七五〇
一八七四年（同七年）	同	一二〇	一八八七年（同二十年）	同	一、一二〇
一八七八年（同十一年）	同	二七〇	一八九〇年（同二十三年）	同	二、三〇〇

一八九二年（同二十五年）	同	四、五〇〇	一九〇七年（同四十年）	同	八九、五七三
一八九五年（同二十八）	同	六、〇〇〇	一九〇八年（同四十一年）	同	一〇三、六八三
一八九七年（同三十）	同	三五、〇〇〇	一九〇九年（同四十二年）	同	九八、七一五
一八九九年（同三十二年）	同	三五、〇〇〇	一九一〇年（同四十三年）	同	九一、九五八
一九〇四年（同三十七年）	同	五三、七六四	一九一一年（同四十四年）	同	九三、三五九
一九〇五年（同三十八年）	同	六一、五三九	一九一二年（大正元年）	同	九三、七五一
一九〇六年（同三十九年）	同	七三、五三九	一九一三年（大正二年）	同	九五、四八三

米國各州在住邦人數統計

（一九三〇年第十五回米國々勢調査ニ依ル）

地理的区分及州名	年	度	度	度	度	度
ニューイングランド諸州	一九〇〇	一九一〇	一九二〇	一九三〇	一九四〇	一九五〇
メサチューセツト	一〇	一一	一七	一〇	一〇	一四
ヴェルモン	〇	一	八	〇	〇	二
ニューハンプシャー	一	一	四	一	一	四
中部大西洋沿岸諸州	一九〇〇	一九一〇	一九二〇	一九三〇	一九四〇	一九五〇
ペンシルヴェニア	三三	三三	三三	三三	三三	三三
ニュージャージー	三三	三三	三三	三三	三三	三三
南部大西洋沿岸諸州	一九〇〇	一九一〇	一九二〇	一九三〇	一九四〇	一九五〇
メリーランド	三	三	三	三	三	三
デラウェア	一	一	一	一	一	一
東北部及中部諸州	一九〇〇	一九一〇	一九二〇	一九三〇	一九四〇	一九五〇
ウイスカンシン	三	三	三	三	三	三
ミシガン	三	三	三	三	三	三
インディアナ	三	三	三	三	三	三
オハイオ	三	三	三	三	三	三
東南部及中部諸州	一九〇〇	一九一〇	一九二〇	一九三〇	一九四〇	一九五〇
ケンタッキー	三	三	三	三	三	三
テネシ	三	三	三	三	三	三
アラバマ	三	三	三	三	三	三

都市別 (人口二五萬以上)	一九二〇年度	一九三〇年度	サバサイド
アラバマ	一、九〇〇	一、九〇〇	一、九〇〇
アラゾク	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
アリゾナ	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
カリフォルニア	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
テキサス	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
ペンシルベニア	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
ニューヨーク	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
イリノイ	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
ミシシッピ	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
ジョージア	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
オハイオ	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
その他	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
合計	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇

(以上第十五回米國合衆國勢調査ニ依ル)

在加州邦人北中南部別人口數

地理的區分	一九二〇年度	一九三〇年度
加州總數	一、九〇〇	一、九〇〇
北加州	一、〇〇〇	一、〇〇〇
中加州	一、〇〇〇	一、〇〇〇
南加州	一、〇〇〇	一、〇〇〇

在加州邦人男女年齡別統計

年統計	一九二〇年度	一九三〇年度
總數	七、九五二	九、七四六
男	四、五二一	五、六四〇
女	三、四三一	四、一〇六
一歲以下	一、三五六	一、二六〇
一歲以上	六、五八六	八、四八六
十歲以下	一、八四八	一、〇七四
十歲以上	九、九三	八、四一二

在加州邦人都市農村別及年齡別統計 (一九三〇年度)

年統計	總數	都市	農村
一五歲—一九歲	二、八三二	八六三	一、九六九
二〇歲—四四歲	三、九七三	一、四六九	二、五〇四
四五歲以上	八、四六九	一、二二四	七、二四五
總計	一、八一	五一	一、〇〇

年統計	總數	都市	農村	パーセント
一〇歲—一四歲	一、〇七四	一一	一、〇六三	四九
一五歲—一九歲	五、六九三	一一	五、六八二	四九
二〇歲—二四歲	四、〇九八	四	四、〇九四	四九
二五歲—二九歲	六、五四一	七	六、五三三	四九
三〇歲—三四歲	七、六九五	八	七、六四二	四九
三五歲—四四歲	一四、五七八	一五	一四、五三九	四九
四五歲—五四歲	一三、八四三	一四	一三、八〇〇	四九
五五歲—六四歲	四、三〇一	四	四、二九三	四九
六五歲—七四歲	四八一	〇	四八〇	四九
七五歲以上	一、八四四	〇	一、八四三	四九
總計	九七、四五六	一〇〇	九七、四五五	四九

在米邦人第二世總數卜加州及他州ノ比較統計

(以上第十五回米國合衆國勢調査ニ依ル)

州	總數	パーセント
加州	四、四一三	一〇〇
他州	三、一七二	七二
加州	二、二四一	五二
他州	一、二四一	二八
加州	二、九一八	七一
他州	一、八六四	二九
加州	六、七、八、四一	一〇〇
他州	四、八、九、七九	七二
加州	一、八、八、六二	二八

在加州邦人數下第二世數ノ比較統計

世	一九一〇年	一九二〇年	一九三〇年
第一世	四、一、三五六	七、一、九五二	九、七、四五六
第二世	三、八、一八四	五、一、一三八	四、八、四七七
合計	三、一七二	二〇、八、一四	四、八、九七七

(以上は一九三四年米國商工省調査局報告ニ依ル)

在加州邦人ノ就職情勢 (一九三〇年度)

職業別	就職者數	家族及無職者	百分率
總數	九七、四五六	六〇、三三三 (六二%)	
農	四、七六四	三、三三三	七〇
園	一、四、六六九	一、一、三三三	七七
雜	一、五、九三三	一、一、三三三	七一
魚	一、三三三	一、三三三	一〇〇
商業	二、一、三三三	一、三三三	六二
運輸	一、三三三	一、三三三	一〇〇
製造業	一、三三三	一、三三三	一〇〇
機械工業	一、三三三	一、三三三	一〇〇
家庭	一、三三三	一、三三三	一〇〇
專門	一、三三三	一、三三三	一〇〇
商業	一、三三三	一、三三三	一〇〇
ホテル、食堂、其他	一、三三三	一、三三三	一〇〇
其他	一、三三三	一、三三三	一〇〇

(十五回米國々勢調査ニ依ル)

在南加州邦人ト第二世就職率比較

職業	第一世	第二世
總數	一、三、八二二	八、六
農	一、三、八二二	八、六
園	一、三、八二二	八、六
雜	一、三、八二二	八、六
魚	一、三、八二二	八、六
商業	一、三、八二二	八、六
運輸	一、三、八二二	八、六
製造業	一、三、八二二	八、六
機械工業	一、三、八二二	八、六
家庭	一、三、八二二	八、六
專門	一、三、八二二	八、六
商業	一、三、八二二	八、六
ホテル、食堂、其他	一、三、八二二	八、六
其他	一、三、八二二	八、六

職業	總數	家族及無職者	百分率
家庭勞働者	八〇九	三〇六	三八
專門業者	一、一、三三三	一、一、三三三	一〇〇
事務員及賣子	一、一、三三三	一、一、三三三	一〇〇
其他	一、一、三三三	一、一、三三三	一〇〇
總數	一、一、三三三	一、一、三三三	一〇〇

(以上羅府領事館一九三〇年度調査)

在米日本人職業別 (一九三〇年度)

桑 港 市

職業	本業者	家族
農耕、園藝、畜産	三六一	一五〇
漁業、製鹽	二四	三九
洗濯、染色、洗濯業	六九	七〇
飲食料品、嗜好品製造	五	二
被服身廻り品製造	六	一
土木建築業	五	一
大工、左官、石工、ペンキ職	五	一
製版、印刷、製本業	五	一
工場勞働者	二〇	二
工場販賣業者	二〇	二
貿易商(店員、社員を含まず)	二〇	二
金融保險業(店員、社員を含まず)	二〇	二
媒介、周旋業	二〇	二
物品貸貸及預かり業	二〇	二
會社員、銀行員、商店員事務員	二〇	二

旅館、料理、貸席遊戯場、興行場
 ウエイトレス、給仕人
 理髪及湯屋業
 その他商業
 車馬業、自動車、運轉手
 船業
 運輸業
 運搬夫、仲仕業
 陸軍人
 官公吏
 宗教関係者
 教育関係者
 醫務に關する業
 法務に關する業
 新聞雜誌記者、通信員、著述者
 畫家、彫刻家、音樂家、寫眞師
 其他の自由業
 家事被備人
 學生練習生
 官公又は慈善團體の救助を受くるもの
 在監受刑者
 其他の無職業者、職業を申告せざるもの

桑港市を除く北加各地方

農耕、園藝、畜産	三、八〇五	男	一〇一	女	一〇一
本業者	一、二八〇	男	二〇〇	女	二〇〇
家族	二、五二五	男	八二〇	女	二〇七
族	一、二四五	男	二〇〇	女	二〇七

同労働者	九、六一〇	男	八二〇	女	八二〇
森林業、林産物業労働者	一〇〇	男	一〇〇	女	一〇〇
漁業、製鹽業	二、五〇〇	男	二、五〇〇	女	二、五〇〇
同労働者	四、〇〇〇	男	四、〇〇〇	女	四、〇〇〇
金工、鑄造	一、六〇〇	男	一、六〇〇	女	一、六〇〇
機械、器具製造	三、三二八	男	三、三二八	女	三、三二八
洗張、染色、洗濯業	一、三二八	男	一、三二八	女	一、三二八
飲食料品、嗜好品製造	六、七〇〇	男	六、七〇〇	女	六、七〇〇
被服身廻り品製造	四、一〇〇	男	四、一〇〇	女	四、一〇〇
大工、左官、石工、ペンキ職	二、七〇〇	男	二、七〇〇	女	二、七〇〇
製版、印刷、製本業	一、〇〇〇	男	一、〇〇〇	女	一、〇〇〇
工場労働者	二、二二二	男	二、二二二	女	二、二二二
物品販賣業	五、二二二	男	五、二二二	女	五、二二二
貿易商(店員社員を含まず)	三、〇〇〇	男	三、〇〇〇	女	三、〇〇〇
金融保険業(店員社員を含まず)	三、〇〇〇	男	三、〇〇〇	女	三、〇〇〇
媒介、周旋業	二、〇〇〇	男	二、〇〇〇	女	二、〇〇〇
會社員、銀行員、商店員、事務員	二、〇〇〇	男	二、〇〇〇	女	二、〇〇〇
旅館、料理、貸席、遊戯場、興行場	二、四四五	男	二、四四五	女	二、四四五
ウエイトレス、給仕人	一、七七八	男	一、七七八	女	一、七七八
理髪及湯屋業	二、〇〇〇	男	二、〇〇〇	女	二、〇〇〇
其他の商業	二、〇〇〇	男	二、〇〇〇	女	二、〇〇〇
鐵道従業者	二、〇〇〇	男	二、〇〇〇	女	二、〇〇〇
鐵道労働者	二、〇〇〇	男	二、〇〇〇	女	二、〇〇〇
車馬業、自動車運轉手	六、〇〇〇	男	六、〇〇〇	女	六、〇〇〇

コロラド州

農耕、園藝、畜産
同 労働者
探鑛治金業労働者
洗張、染色、洗濯業
飲食料品、嗜好品製造業
被服身廻り品製造業
大工、左官、石工、ペンキ職
製版、印刷、製本業
工場労働者
物品販賣業者
金融保険業(店員、社員を含まず)
媒介、周旋業
物品賃貸及預かり業
會社員、銀行員、商店員、事務員
旅館、料理、貸席、遊戯場、興行場
理髮及湯屋業
鐵道労働者
車馬業自動車運轉手
運輸取扱業
宗教關係者
教育關係者
醫務に關する業

本業者	男	700	女	3
家族	男	820	女	870
合計	男	1520	女	873
其他北加地方	男	1682	女	1060
合計	男	3202	女	1873

運輸取扱等
運輸夫仲仕
官公吏雇備
宗教關係者
教育關係業
醫務に關する業
法務に關する業
新聞雜誌記者、通信員、著述業
畫家、彫刻家、音樂家、寫眞師
その他の有業者
その他の労働者
家事被備人
學生練習生
官公又は慈善團體の救助を受くるもの
在監受刑者
その他の無職業者、職業を申告せざるもの

桑港及び北部加州合計

桑港	男	377	女	454
合計總數	男	1245	女	3327
總計邦人數	男	8797	女	55342
其他朝鮮人	男	1638	女	8288

其他北加地方	男	1682	女	1060
合計	男	3202	女	1873

運輸取扱等	13
運輸夫仲仕	50
官公吏雇備	55
宗教關係者	45
教育關係業	50
醫務に關する業	103
法務に關する業	35
新聞雜誌記者、通信員、著述業	34
畫家、彫刻家、音樂家、寫眞師	20
その他の有業者	36
その他の労働者	405
家事被備人	705
學生練習生	150
官公又は慈善團體の救助を受くるもの	44
在監受刑者	6
その他の無職業者、職業を申告せざるもの	88

探鑛 冶金 業者 八四〇五
 同 勞 働 者 一九〇
 洗張、染色、洗濯業 一
 飲食料品嗜好品製造 三
 被服身廻り品製造 六
 物品販賣業者 四
 金融保險業店(店員、社員を含まず) 一
 媒介 周旋 業者 三
 物品賃貸及預り業 四
 會社員、銀行員、商店員、事務員 六
 旅館、料理、貸席、遊藝場、興行場 二
 理髮及湯屋業 二
 鐵道從業業者 八
 鐵道勞働者 〇
 車馬自動車運轉手 一
 官公吏雇傭者 〇
 宗教關係者 一
 教育關係者 四
 醫務に關する業 二
 法務に關する業 四
 新聞雜誌記者、通信員、著述者 二
 畫家、彫刻家、音樂家、寫眞師 四
 家 事 被 傭 人 七
 其他無職業者、職業を申告せざる者 二

桑港總領事館管轄内通計

男	二六六	本業者	一六二	女	二〇三
男	二八七	本業者	一六二	女	二〇三
男	二八七	家族	三〇六	女	三〇六
男	二八七	家族	三〇六	女	三〇六

新聞雜誌記者、通信員、著述者 二
 畫家、彫刻家、音樂家、寫眞師 四
 其他の勞働者 二
 家事被傭人 〇
 學生練習生 〇
 在監受刑者 〇
 其他の無職業者、職業を申告せざるもの 二

ユタ

男	二六六	本業者	一六二	女	二〇三
男	二八七	本業者	一六二	女	二〇三
男	二八七	家族	三〇六	女	三〇六
男	二八七	家族	三〇六	女	三〇六

本業者 男 二二、八二五
 總數人口 女 六二、五六八
 其外朝鮮人 男 一七三
 女 八八三

ローサンゼルス市及び附近

農耕、園藝、畜産	二、三九三	男	本業者	二、二一四	男	家族	三、一一四
同業、製鹽	一、三五〇	男		五〇〇	男		七二〇
漁業、労働	三六〇	男		三八〇	男		三二五
同業、染色、洗濯	六七二	男		四五二	男		三五九
紙工	四五	男		四二	男		六二
飲食料品、嗜好品製造	二二三	男		九三	男		一五三
被服身廻り品製造	六六	男		四〇	男		二六
土木、建築	一九	男		一五	男		二九
大工、左官、石工、ペンキ職	一六	男		一	男		二
製版、印刷、製本業	一三	男		一	男		二
其他の工業	一五	男		一	男		二
工場労働者	二、〇六七	男		一、一六四	男		一九九
物品販賣業者	一〇	男		六	男		一四
貿易商(店員社員を含まず)	一〇	男		六	男		一四
金融保険業(店員社員を含まず)	一七	男		一五	男		二〇
媒介、周旋業	四七	男		七三	男		一〇七

本業者 男 二二、八二五
 家族 女 二〇、七二九

物品買貸及預かり業	一、四〇八	男	本業者	一、五〇	男	家族	一、一〇五
會社員、銀行員、商店員、事務員	三二六	男		四五七	男		五九八
旅館料理、貸席、遊藝場、興行場	一〇六	男		四	男		二七
ウエイトレス、給仕人	一〇六	男		四	男		二七
理髪及湯屋業	一〇六	男		四	男		二七
その他の商業	一〇二	男		二	男		一六
鐵道労働者	六一	男		二	男		一六
車馬業、自動車運轉手	三二	男		二	男		一六
運輸取扱業	三二	男		二	男		一六
運般夫、仲仕等	二五	男		二	男		一六
官公吏、雇傭	二一	男		二	男		一六
宗教関係者	四	男		三	男		七
教育関係者	六〇	男		二〇	男		二六
醫務に關する業	四二	男		二〇	男		二六
新聞雜誌記者、通信員、著述者	一九	男		二	男		七
畫家、彫刻家、音楽家、寫眞師	二〇	男		二	男		七
其他の自由業	五〇〇	男		二	男		七
其他の労働者	一〇二	男		二	男		七
家事被傭人	五〇	男		二	男		七
學生、練習者	三五〇	男		二	男		七
其他の無職業者	三五〇	男		二	男		七
其他の申告せざる者	一〇	男		二	男		七
農耕、園藝、畜産	二、二五二	男	本業者	二、五	男	家族	四、〇二二

アリゾナ州

運搬夫、仲仕等
 官公吏雇備者
 宗教關係者
 醫務に關する業
 法務に關する業
 新聞雜誌記者、通信員、著述者
 畫家、彫刻家、音樂家、寫眞師
 其他の自由業
 其他の労働者
 家事被備人
 學生練習生
 官吏には慈善團體の救助を受くる者
 在監受刑者
 其他の無職業者、職業を申告せざる者

農耕、園藝、畜産	一二九	男	本業者	三二
土木建築業	一五	男	本業者	一〇三
物品販賣業者	一五	男	本業者	二
會社員、銀行員、商店員、事務員	一	男	本業者	三
旅館料理、貸席遊戯場、興行場	一	男	本業者	一
理髮及湯屋業	一	男	本業者	一
其他の無職業者、職業を申告せざる者	九	女	本業者	二六二
其他の労働者	一五九	女	本業者	二六二
家事被備人	二九	女	本業者	二六二
學生練習生	一	女	本業者	二六二
官吏には慈善團體の救助を受くる者	二	女	本業者	二六二
在監受刑者	一	女	本業者	二六二
其他の無職業者、職業を申告せざる者	九	女	本業者	二六二
新聞雜誌記者、通信員、著述者	一	女	本業者	二六二
畫家、彫刻家、音樂家、寫眞師	一	女	本業者	二六二
其他の自由業	一	女	本業者	二六二
其他の労働者	一	女	本業者	二六二
家事被備人	一	女	本業者	二六二
學生練習生	一	女	本業者	二六二
官吏には慈善團體の救助を受くる者	一	女	本業者	二六二
在監受刑者	一	女	本業者	二六二
其他の無職業者、職業を申告せざる者	九	女	本業者	二六二

同業労働者
 森林業労働者
 漁業労働者
 同業労働者
 採掘冶金労働者
 機械、器具製造
 洗張、染色、洗濯業
 被服身廻り品製造
 土木建築業
 大工、左官、石工、ペンキ職
 工場労働者
 物品販賣業者
 貿易商(店員社員を含まず)
 金融保険業(店員社員を含まず)
 媒介、周旋業
 會社員、銀行員、商店員、事務員
 旅館料理、貸席遊戯、興行場
 ウエイトレス給仕人
 理髮及湯屋業
 其他の商業
 鐵道労働者
 鐵道労働者
 車馬業自動車運轉手
 船舶取扱業者
 運輸業者

同業労働者	一、二八九
森林業労働者	六一八
漁業労働者	六七
同業労働者	六
採掘冶金労働者	二
機械、器具製造	二
洗張、染色、洗濯業	五
被服身廻り品製造	六
土木建築業	一
大工、左官、石工、ペンキ職	一〇〇
工場労働者	一〇〇
物品販賣業者	三九
貿易商(店員社員を含まず)	一
金融保険業(店員社員を含まず)	一
媒介、周旋業	四〇
會社員、銀行員、商店員、事務員	四
旅館料理、貸席遊戯、興行場	一七
ウエイトレス給仕人	五
理髮及湯屋業	二
其他の商業	二
鐵道労働者	四
鐵道労働者	二
車馬業自動車運轉手	二
船舶取扱業者	九
運輸業者	一
其他の無職業者、職業を申告せざる者	八
其他の労働者	一
家事被備人	一
學生練習生	一
官吏には慈善團體の救助を受くる者	一
在監受刑者	一
其他の無職業者、職業を申告せざる者	九
新聞雜誌記者、通信員、著述者	一
畫家、彫刻家、音樂家、寫眞師	一
其他の自由業	一
其他の労働者	一
家事被備人	一
學生練習生	一
官吏には慈善團體の救助を受くる者	一
在監受刑者	一
其他の無職業者、職業を申告せざる者	九

鐵道勞働者
醫務に關する業
家事被備人

ニューメキシコ州

農耕、園藝、畜産
採鑛、冶金業
洗張、染色、洗濯業
大工、左官、石工、ペンキ職
旅館、料理、貸席、遊戯場、興行物
理髮及湯屋業
鐵道勞働者
車馬業、自動車運轉手
家事被備人
學生練習生

在羅府領事館管轄内

全數 四萬六千三百五十六人
内譯 南加九郡

三七
九

本業者 男 二七一
女 二一六
家 男 一七九
女 一七二
族 男 一五九
女 一六八

二三
三六

家 男 一九五
女 一八八
族 男 一八九
女 一八二

内
女男 二七九、二四八人
女男 一〇八、四五八人
女男 一〇四、五四八人
女男 六三、五五八人

女男 一〇八、四五八人
女男 一〇四、五四八人
女男 六三、五五八人

アリソナ州
ニューメキシコ州

シアトル市

農耕、園藝、畜産
同業
機械器具製造業
洗張、染色、洗濯業
木竹類に關する製造業
飲食料品、嗜好品製造業
被服身廻り品製造業
大工、左官、石工、ペンキ職
製版、印刷、製本業
其他の工業業
工場勞働者
物品販賣業者
貿易商(店員社員を含まず)
金融保險業(店員社員を含まず)
媒介、周旋業
物品賃貸及預かり業
會社員、銀行員、商店員、事務員

女男 二六六、二五八人
女男 一七五、二二八人

本業者 男 六九五
女 一五〇
家 男 一四九
女 一四八
族 男 一四九
女 一四八

家 男 一四九
女 一四八
族 男 一四九
女 一四八

農耕、園藝、畜産
 同 勞 働 者
 探 鑛 冶 金 勞 働 者
 洗 張、染 色、洗 濯 業 者
 飲 食 料 品、嗜好 品 製 造 者
 被 服 身 廻 り 品 製 造 者
 大 工、左 官、ベ ン キ 職 業 者
 製 版、印 刷、製 本 業 者
 工 場 勞 働 者
 物 品 販 賣 業 者
 媒 介 周 旋 業 者
 會 社 員、銀 行 員、商 店 員、事 務 員
 旅 館、料 理、貸 座 席、遊 戲 場、興 行 場
 理 髮 及 湯 屋 業 者
 鐵 道 勞 働 者
 鐵 道 從 業 者
 車 馬 業、自 動 車 運 轉 手
 官 公 吏 雇 傭 者
 宗 教 關 係 者
 教 育 關 係 者

朝鮮人

オレゴン州

本業者	男	三三〇	女	一一三
家	男	一一七	女	六八
族	男	一一七	女	六八
朝鮮人	男	五二	女	二八

全内内
 シアトル市
 其他

シアトル領事館管轄内

鐵道從業者
 鐵道勞働者
 車馬業、自動車運轉手
 運輸取扱業
 宗教關係者
 教育關係者
 醫務に關する業
 新聞雜誌記者、通信員、著述者
 畫家、彫刻家、音樂家、寫真師
 其他の自由業
 其他の有業者
 其他の勞働者
 家事被傭人
 學生練習生
 在監受刑者
 其他の無職業者、職業を申告せざるもの

全内内	男	一萬六千八百卅三人	女	一〇、三五〇人
シアトル市	男	六、四八三人	女	三、七二九人
其他	男	三、七二九人	女	三、五三六人
鐵道從業者	男	六五二	女	二七
鐵道勞働者	男	五二	女	七
車馬業、自動車運轉手	男	六五	女	二
運輸取扱業	男	八六	女	五
宗教關係者	男	五八	女	六
教育關係者	男	一〇五	女	八
醫務に關する業	男	七〇	女	五
新聞雜誌記者、通信員、著述者	男	一	女	〇
畫家、彫刻家、音樂家、寫真師	男	五	女	七
其他の自由業	男	四四	女	五
其他の有業者	男	四四	女	五
其他の勞働者	男	三五	女	五
家事被傭人	男	一八	女	五
學生練習生	男	二二	女	七
在監受刑者	男	三七	女	七
其他の無職業者、職業を申告せざるもの	男	三七	女	七

家事被備人	五六	一六	二	六
學生、練習生	三〇	二八	三	二
官公又ハ慈善團體ノ救助ヲ受クルモノ	三	三	一〇	一〇
其他ノ無職業者職業ヲ申告セザル者	二	二	一	一
工場労働者	一四七	七〇〇	二〇九	三三〇
物品販賣業	二、〇六一	五〇六	一、四三三	二、一九二
貿易商(店員社員ヲ含マズ)	三	一	六	九
金融保險業(店員社員ヲ含マズ)	三七	一	三	六
媒介、周旋業	二六	一	一	二
會社員、銀行員	一、八九五	一、四四四	八四六	一、〇三一
商店員、事務員	七六	六	三三	七三
旅館、料理、貸席及藝技業遊藝場、興行場	一七〇	六	三〇	三〇
理髮、髮結、浴場業	四	一	三	三
其他ノ商業	三	一	三	三

第十章 公館及び團體

在米帝國公館

在米帝國大使館 在米帝國大使館は一八七〇年(明治三年)十月、米國の首都ワシントンに設立せられた。創めは森有禮が小辨務使として同月五日に着任し、一八七二年(明治五年)十月に至り代理公使に任ぜられ、茲に於て始めて公使館なる名稱を用ふるに至つた。而して同館は一九〇六年(明治三十九年)一月七日大使館に昇格して今日に及んでゐる。同館は曾て 1600 Rhode Island Ave, N. W. Washington. D. C. に在つたが、一九三二年(昭和七年)六月現在の場所 2514 Massachusetts Ave, N. W. Washington. D. C. に移轉したものである。一九四〇年(昭和十五年)一月現在堀内謙介大使の外に参事官一名、一等書記官一名、三等書記官二名、理事官一名、副領事一名、官補四名、書記生三名、囑託及び雇員數名が在勤してゐる。小辨務官當時よりの歴代長官名、官等並にその就任年月日を示せば次の如し。

官名	姓名	就任年月日	特命全權公使	姓名	就任年月日
小辨務官	森有禮	明治三、一〇、五	特命全權公使	吉田清成	同 一三、五、五
代理公使	森有禮	同 五、一〇、一四	臨時代理公使	高平小五郎	同 一四、一、二八
臨時代理公使	高木三郎	同 六、七、二三	臨時代理公使	寺島宗則	同 一五、一〇、二三
同	矢野次郎	同 六、九、一四	臨時代理公使	内藤類次郎	同 一六、一〇、一五
特命全權公使	吉田清成	同 七、一、九	臨時代理公使	九鬼隆一	同 一七、九、一四
臨時代理公使	吉田二郎	同 一一、一二、二七	特命全權公使	赤羽四郎	同 二〇、一〇、二四
			兼墨西哥國	陸奥宗光	同 二一、六、一一

臨時代理公使	佐藤愛磨	同	二二、一二、二四	臨時代理公使	中川次郎	同	三一、七、二五
特命全權公使	建野海三	同	二四、一、二六	臨時代理公使	小村壽太郎	同	三一、一、二〇
兼墨西哥國	宮岡恒次郎	同	二七、七、二四	臨時代理公使	鍋島桂次郎	同	三三、五、一四
特命全權公使	栗野慎一郎	同	二七、八、六	臨時代理公使	高平小五郎	同	三三、七、三一
兼墨西哥國	星亨	同	二九、六、二四	臨時代理公使	日置益	同	三八、二、一〇

(明治三十九年一月七日大使館二昇格)

臨時代理大使	日置益	明治三九、一、七	臨時代理大使	佐分利貞男	同	一二、三、二七	
特命全權大使	青木周藏	同	三九、四、二四	臨時代理大使	植原正直	同	一二、二、一八
臨時代理大使	宮岡恒次郎	同	四〇、二、三〇	臨時代理大使	吉田伊三郎	同	一三、七、一一
特命全權大使	高平小五郎	同	四一、二、三	臨時代理大使	松平恒雄	同	一四、三、一一
臨時代理大使	松井慶四郎	同	四二、八、一〇	臨時代理大使	澤田節藏	同	一四、三、一一
特命全權大使	内田康哉	同	四二、二、二三	臨時代理大使	出淵勝次	同	三、一〇、一七
臨時代理大使	植原正直	同	四四、八、三〇	臨時代理大使	加藤外松	同	七、八、一九
特命全權大使	珍田捨己	同	四五、二、二二	臨時代理大使	齋藤博	同	七、九、二三
臨時代理大使	田中都吉	大正	五、七、六	臨時代理大使	出淵勝次	同	七、一二、二五
特命全權大使	佐藤愛磨	同	五、一〇、九	臨時代理大使	武富敏彦	同	八、一一、二五
臨時代理大使	田中都吉	同	七、一、一一	臨時代理大使	齋藤博	同	九、一、一〇
特命全權大使	石井菊次郎	同	七、四、二六	臨時代理大使	藤井啓之助	同	九、六、二六
臨時代理大使	出淵勝次	同	八、六、一二	臨時代理大使	齋藤博	同	九、一〇、三〇
特命全權大使	幣原喜重郎	同	八、一一、一	臨時代理大使	堀内謙介	同	一三、一一、一五

大使館附陸軍武官室

米國駐在大使館附陸軍武官室は華府ノースウエスト区ベルモント街二〇三二に在る。同武官室の創立年月日は武官室にも大使館にも確實なる記録がなく不明である。然し一老大使館員の言に依ると日露戦争當時即ち一九〇五、六年頃既に某少佐が駐在したことあり、又同地在留同胞の元老の言に依れば、陸軍騎兵中佐田中國重が時の青木周藏大使と共に一九〇六年(明治三十九年)渡米駐在したこと確實である。然し乍ら公記的には

米國々務省發行の外交官名簿に因る外はなく、同名簿には第一次歐洲大戰當時より始めて陸軍武官の氏名が記載してあり、同陸軍武官室もこの當時即ち一九一五年頃から正式に武官室として創立されたものではないかと思考される。而してその創立の當時は米國陸軍はその裝備、編成等に於て注目し、且つ日米兩國關係も今日の如く重要性を帯びてゐなかつた爲、武官室の活躍も規模も今日見るが如き大きなものではなかつた。然るに華府會議を契機として武官室の諸事務は急速に繁劇となり、且つその後の國際情勢の推移に伴ふ米國の軍備擴充とその諸動向、特に軍の自動車化、近代化、化學化、航空部隊の強化等々、而してローズベルト政権下に於ける對極東政策の強化等と相俟つて、陸軍武官室の活躍は急速に擴大の必要を生じ、一九二二年(大正十一年)頃よりの同武官室はその業務及び規模を逐年強大化しつゝあり、今次支那事變勃發以來の武官室の活躍は更に目醒しく、事務所も一九三八年に現在の所(3311 Conn Ave. Ave. N. W. Washington D. C.)に移轉擴充したものである。歴代武官氏名、官等、並にその着任年月日を示せば次の如し。

官等	氏名	着任年月日	陸軍歩兵大佐	渡久雄	昭和三年八月
陸軍歩兵大佐	伊丹松雄	大正四年	陸軍歩兵大佐	駕津鈺平	昭和五年六月
陸軍歩兵少佐	谷川清三	同	陸軍歩兵大佐	田中青臺	同
陸軍歩兵大佐	水町竹三	同	陸軍少將	松本健兒	同
陸軍少將	井上一次	同	陸軍歩兵大佐	平田正判	同
陸軍少將	原口初太郎	同	陸軍少將	山内正文	同
陸軍砲兵大佐	森田宜	同	陸軍少將	磯田三郎	同

紐育陸軍事務所 同事務所は一九二五年(大正十四年)五月、兵器類、同部分品材料等の購入並に検査の爲に陸軍技術本部より駐在官を派遣することとなり、紐育にその事務所を開設したものであるが、翌一九二六年、更に航空機、同附屬品の購入並に検査の爲に陸軍航空本部より米國駐在監督官が派遣せられ、茲に兩者合併して今日の事

務所を設立したもので、爾後その業務を繼續してゐる。

歴代長官氏名、官等その就任年月日を示せば次の如し。

官等	氏名	就任年月日
砲兵大佐	小柳津正藏	大正十四年九月
砲兵大佐	高橋貞夫	昭和三年三月
砲兵大佐	小須田勝藏	昭和五年四月
砲兵中佐	木下清三郎	昭和八年三月
砲兵大佐	尾藤加勢士	昭和九年五月
砲兵大佐	朝野寅四郎	昭和十一年三月
砲兵大佐	中村監壽	昭和十三年七月

現在職員 工兵大佐 中村隆壽、航空兵大佐 岡卯三郎、歩兵中佐 中野吉雄、陸軍技手 小山健二 陸軍技手 須藤行義。

所在地 1775 Broadway, New York City, N. Y.

大使館附海軍

同武官事務室は遠く一八八四年(明治十七年)の創立にかゝる。而して初代武官として駐在

武官事務室

せるは故海軍大將齋藤實子爵で同大將が中尉の時代であつた。越えて一九〇六年(明治三十

九年)一月駐米帝國公使館が大使館に昇格せるに伴ない、從來の公使館附武官は大使館附武官となつて今日に及んでゐる。初代武官の着任以來實に五十餘年間、二十一代の武官が歴任してゐる、その間日本の國運は愈々興隆し、海軍は世界三大海軍の一にまで發達し、同武官室の任務もそれに伴つて重大性を加へて來た。歴代武官は陸軍武官と共に在米の帝國諸機關並に諸外國各種機關、在米同胞などと緊密なる關係を保持して克くその重任を完ふしてゐる。なほ同事務室に就いて特筆すべきことは一九三一年(昭和六年)四月 高松官同妃兩殿下が歐米御巡遊の途、同事務室に台臨あらせられた外、故東郷元帥を始め幾多内外諸名士が來訪してゐることである。一九四〇年(昭和十五年)四月現在、同武官事務所には武官海軍大佐小川貫夏の外輔佐官として海軍中佐木阪義胤、同少佐寺井義守が駐在してゐる。歴代武官名、官等並に着任年月日は次の如し。

(所在地 2700 Mass Ave. N. W. Washington, D. C.)

官	氏名	着任年月日
中尉、大尉	齋藤 實	明治一七、九、一九
大尉	馬場 練兵	同 二一、六、七
大尉	中村 靜嘉	同 二三、八、一一
大尉、少尉	富岡 直記	同 二六、八、二
少佐、中佐	成田 勝郎	同 二九、一一、二
中佐、大佐	男爵 西神六郎	同 三二、一一、二五
少佐、中佐	竹下 勇	同 三五、一一、一一
少佐、中佐	谷口 尙真	同 三八、一一、一九
中佐、大佐	平賀 徳太郎	同 四二、四、八
中佐、大佐	竹内 重利	同 四五、四、二二
中佐、大佐	野村吉三郎	大正 四、二、一〇
中佐、大佐	上田良武	同 七、七、三〇
大佐、少將	永野修身	同 一〇、四、三
大佐、少將	長谷川清	同 一三、一、三
大佐、少將	山本五十六	同 一五、二、一四
大佐、少將	坂野常善	同 一五、二、一四
大佐、少將	下村正助	昭和 三、一、一六
大佐、少將	小林 仁	同 六、一、一
大佐、少將	山口多聞	同 八、一、三
大佐、少將	小林 謙五	同 九、八、一五
大佐、少將	小川 貫夏	同 一一、一〇、三
大佐、少將	小川 貫夏	同 一四、四、四

(尙右表中官等二つ記載しあるは在任中に昇級したものである)

在紐育海軍監

同事務所は一九二六年(大正十五年)十二月海軍機關中佐與倉守之助が初代監督長として來

督官事務所

着し、翌一九二七年十一月一日現在の地『マテイソン・アベニュー』に開設されたもので、

爾來二十餘年間海軍各種兵器、機械材料の購入並に監督事務に従事する一方、米國の各種技術其他の調査研究に従事してゐる。事務所開設の當時は監督長の他に監督官五名、監督助手三名、タイピスト一名が配員されてあつたが、現在は兵器、機械材料等の進歩發達に伴ひ、その職務も亦逐年複雑化し、現在は監督長の下に監督官九名、監督助手五名、囑託一名、タイピスト一名、運轉手一名が在勤してゐる、歴代監督長の氏名、當時の官等は左の如し。

海軍 機關 中佐	與倉守之助	海軍 機關 大佐	杉 政 人
(在任中機關大佐トナル)		海軍 機關 大佐	後藤 兼 三

桑港總領事館は始めチャールレス・ワルカット・ブルックスなる米人を初代名譽領事に領事館として開設されたもので、一八七四年三月副領事高木三郎が初めて日本人館長として着任するまでは初代のブルックス、二代のホロシ・デ
イ・ダンと外人の名譽領事によつて館長事務を取扱はれてゐた。而して同館は開設の當時カリフォルニア街に事務
所を開いてゐたと云はれるが、一九〇六年（明治三十九年）桑港大震災の爲め、その書類の大半を烏有に歸したので
確實なる史實を得るに難い。

當時桑港領事館はサンソム街に移轉されてゐたが、震災の勃發と共に同館も危険となり直ちに重要書類をオツプア
レル街でガフ街とオクテピア街中間に一家屋を借り、そこに一先づ移したが、災火のやゝ、頽勢となるを見て再び領事
館事務所に戻したところ、災火は遂に同館を呑んで全焼し、爲に現在總領事館に保存してある書類は、前記オツプ
アレル街に残された書類だけである。而して同館が總領事館に昇格したのはその翌一九〇七年（明治四十年）十二月
で初代總領事は小池張造である。同館は一九一八年（大正七年）現在の場所（バッテリー街二二）のポスタル・テレグ
ラフ・ビルディングに移り、現在は佐藤總領事の下に領事二名、副領事一名、書記生四名、囑託三名、書記一名、雇
員五名が在勤してゐる。同館の管轄區域「カリフォルニア」州中「ロスアンゼルス」駐在帝國領事館の管轄に屬せざ
る地域「コロラド」、「ユタ」及「ネヴァダ」各州である。領事館として開設當時より今日に至るまでの長官名、官等、
着任年月日を示せば次の如くである。

名譽領事	Charles, W. Brooks	明治三年八月	領事代理	田邊 貞雄	同	十五年十月
同代理	Horoce, D. Dunn	同 五年四月	領事	立田 革	同	十六年五月
副領事	高木三郎	同 七年三月	領事	藤井三郎	同	十九年三月
副領事代理	名倉 納	同 九年十一月	領事	河北俊弼	同	廿二年三月
領事	柳谷謙太郎	同 九年十二月	事務代理	藤田敏郎	同	廿三年十月

領事	珍田捨己	同	十一月	總領事代理	大山卯二郎	大正二年一月
事務代理	神谷三郎	同	廿七年十一月	同	熊崎 恭	同 四月
二等領事	同	同	十二月	同	沼野安太郎	同 同
事務代理	船越光之丞	同	廿九年七月	同	山崎平吉	同 五月
二等領事	神谷三郎	同	十一月	總領事	植原正直	同 六月
一等領事	同	同	三十年一月	總領事代理	藤井啓之助	同 七月
事務代理	船越光之丞	同	五月	總領事	大田爲吉	同 十月
事務代理	瀨川淺之進	同	三十年十二月	總領事	矢田七太郎	同 十一月
二等領事	陸奥廣吉	同	同 六月	同	大山卯次郎	同 十二月
一等領事	同	同	同 五月	同	武富俊彦	同 一月
事務代理	横田三郎	同	同 八月	總領事代理	柴田市太郎	同 二月
領事	上野季三郎	同	同 二月	總領事	井田守三	同 三月
事務代理	松原一雄	同	同 四月	總領事代理	金子豐治	同 四月
(明治四十年十二月總領事館に昇格)				總領事	若杉 要	同 五月
總領事	小池張造	同	同 十二月	同	富井 周	同 六月
事務代理	高橋清一	同	同 九月	總領事代理	馬瀨金太郎	同 七月
總領事代理	永井松三	同	同 四月	總領事	鹽崎 觀三	同 八月
同	近藤 愿吉	同	同 八月	總領事代理	廣田洋二	同 九月
同	永井松三	同	同 一月	總領事	佐藤敏人	同 十月
總領事	永井松三	同	同 二月	同		同 十一月

シカゴ總領事館

同館は一八九七年（明治三十年）十月、領事館として開設された。爾來四十餘年間領事館
として今日に至つてゐたが、對米外交の複雑化に伴ひ同館の重要性も加はるに至り、一九三九年（昭和十四年）十月
實に四十二年ぶりで總領事館に昇格された。これで北米大陸に於ける總領事館は桑港紐育を加へて三館となつた。同

館管轄區域「インディアナ」「イリノイス」「ミシガン」「ウイスクンシン」「ミネソタ」「アイタワ」「ミズリー」「ケンタッキー」「ノースダコタ」「サウスダコタ」「ネブラスカ」「カンサス」「オハイオ」各州である。歴代長官を示せば次の如し。

一等領事	能勢辰五郎	明治三十年十月	領事	桑島主計	同	九年八月
同	藤田敏郎	同三十二年七月	領事代理	吉田丹一郎	同	十一年十一月
事務代理	金萬喜人	同三十五年八月	同	同	同	同
領事	清水精三郎	同卅六年五月	領事	同	同	十二年六月
事務代理	金萬喜人	同卅七年九月	領事代理	重松宜雄	同	十四年二月
領事	清水精三郎	同卅八年三月	領事	田村貞次郎	同	同
事務代理	富田義詮	同四十年五月	同	木村悳	同	昭和三年九月
同	松原一雄	同四十二年七月	同	武藤義雄	同	同
事務代理	富田義詮	同四十二年十二月	領事代理	仲田憲治	同	同
領事	山崎馨一	同四十四年五月	領事	林井口貞雄	同	昭和六年四月
事務代理	清水八百一	同四十四年三月	領事代理	林井口貞雄	同	同
領事	山崎馨一	同四十五年八月	領事	林井口貞雄	同	同
事務代理	清水八百一	同四十五年五月	領事代理	林井口貞雄	同	同
同	阿部喜八	大正元年十月	領事	林井口貞雄	同	同
同	來栖三郎	同三年八月	領事代理	林井口貞雄	同	同
事務代理	姉齒準平	同八年六月	領事	林井口貞雄	同	同

羅府領事館 一八八六年頃（明治十九年）より南加州方面に移住し始めた同胞は其後逐年増加して、一九〇〇年（明治三十三年）頃には多数の同胞が農業方面に進出してゐた。而して一九〇六年（明治三十九年）の桑港大震災後同方面への同胞の移住は急速に増加し、茲に於て領事館設置の要望高くなり、一九一五年（大正四年）七月十四日

に至り、時の副領事大山卯次郎の着任となつて、在羅帝國領事館は開設されたものである。爾來羅府は急速な發展を遂げ、殊に太平洋岸に於ける桑港に次ぐ大支關として對日貿易その他の關係も非常に重要性を加へ、同領事館も桑港總領事館に次ぐ各種重要事務に携はり皇族方の奉迎、練習艦隊、特務艦の歓迎等桑港總領事館と同様の各種行事を取扱つてゐる。同館は羅府ブロードウエー街と十二街角の商業會議所ビルディング内にありその管轄區は南加州九郡及びアリゾナ、ニューメキシコ兩州を含んでゐる。同館には現在福島領事の外に官補一名、書記生三名、囑託一名、事務員六名が在勤してゐる。同館管轄區域「カリフォルニア」州中「ロスアンゼルス」「オレンジ」「サン・デイゴ」「イムベリアル」「リヴァサイド」「サン・バーナーディーノ」「ヴェンチュラ」「サンタバーバラ」「サン・ルイスオビスポ」各郡。「アリゾナ」及「ニューメキシコ」各州である。歴代長官を示せば次の如し。

官名	姓名	就職年月日	領事	水澤孝策	同	二年六月三日
領事代理	大山卯次郎	大正四年七月十四日	領事代理	高岡嶺一郎	同	四年五月二十日
領事	大山卯次郎	同五年三月二十六日	領事	佐藤敏人	同	四年十一月四日
領事代理	芝崎路可	同十二年五月十九日	領事代理	小澤嘉吉	同	九年一月八日
領事	岸倉松	同十二年七月一日	領事	堀公一	同	九年五月十二日
領事代理	芝崎路可	同十二年十一月八日	領事代理	佐々木敏夫	同	十二年八月三十日
領事	若杉要	同十三年二月二十七日	領事	太田一郎	同	十二年十月三十日
領事代理	鶴見憲	同十四年九月十一日	領事代理	鈴木耕一	同	十四年一月十六日
領事	大橋忠一	同十四年十一月二日	領事	吉田寛	同	十四年一月十二日
領事代理	久我成美	昭和二年四月十一日	領事	門島慎太郎	同	十五年八月十七日

シアトル領事館 米國太平洋沿岸西北部の日本領事館は一八九五年（明治二十八年）ワシントン州タコマ市に設置せられたのを以て嚆矢とする。而してその當時シアトル市には同タコマ領事館の分館があるのみであつたが、

その後シアトル市の繁榮、日本との貿易關係緊密化に伴ひ、シアトル市の本館とする必要生じ、一九〇〇年（明治三十三年）十二月二十二日を以て、時のタコマ領事林會登吉はシアトル在勤を命ぜられ、翌一九〇一年一月には領事館共にシアトル市に移されるに至つた。従つてシアトル領事館としての創立年月日は林領事が正式に着任した一九〇〇年十二月二十二日となつてゐる。シアトル市に於ける領事館事務所は最初シアトル市クエン・ヒルの領事官舎と一緒であつたが、後に同市第二街とハイキ街角の建物に移り、更に第二街とチエリー街角のアラスカ・ビルディングに移轉し同所より約三十年前現在の第三街セントラル・ビルディングに移つたもので、同館管轄區域「ワシントン」及「モンタナ」各州。「アイダホ」州中「クートネー」「ボンナー」「ラタア」「シヨシヨーン」「ネズベルス」「アイダホ」「レムハイ」「ボアース」「カスター」各郡。「アラスカ・テリトリー」等である。同館には現在佐藤由己領事の外に書記生三名、囑託雇員四名が在勤してゐる。歴代長官は次の如し。

領事	林 會登吉	明治三三、一二、二二	同	大橋 忠一	同 一二、七、二一
事務代理	大木安之助	同 三四、一二、一七	領事代理	宮崎 申郎	同 一四、六、一〇
領事	齋藤 和	同 三六、五、二九	領事	川村 博	同 一五、二、三
領事	久水三郎	同 三六、七、二四	領事代理	花輪 義敬	昭和 二、一一、一七
同	田中 都吉	同 四〇、一一、二四	領事	岡本 季正	同 三、四、二三
領事代理	林 久治郎	同 四三、一、一八	領事代理	岡中 仙八	同 六、三、二五
同	阿部 嘉八	同 四三、七、五	領事	内山 清	同 六、五、二二
領事	高橋 清一	同 四四、七、二四	事務代理	大谷 省三	同 一〇、五、二四
事務代理	玉木 鶴彌	同 四五、九、五	領事	岡本 策	同 一〇、六、二八
領事	松永 直吉	同 六、三、二	事務代理	石出 瑞己	同 一二、二、一九
同	廣田 守信	同 九、三、一	領事	石出 瑞己	同 一三、二、二八
領事代理	佐藤 敏人	同 一〇、四、一	事務代理	石出 瑞己	同 一四、六、三〇
領事	齋藤 博	同 一〇、七、二四	領事	佐藤 由己	同 一四、一〇、四

タコマ領事館々長

一等領事	齋藤 幹	同 三〇、一一、二二
事務代理	染谷 成章	同 三一、八、二七
二等領事	林 會登吉	同 三一、一二、二二

ポートランド領事館

同館は一九〇〇年（明治三十三年）シアトル市に設置された領事館の分館として創立されたもので、越えて一九〇八年（明治四十一年）に至り獨立して在ポートランド帝國領事館に昇格、初代領事として沼野安太郎着任以來、館長として領事或は領事館事務代理等に任命せられたもの現任結城領事を以て二十四代の多き上つてゐる。同館管轄區域はオレゴン、ワイオミング、兩州並にアイダホ州中シアトル領事館管内を除く各郡である。歴代長官を示せば次の如し。（所在地 814 Board of Trade Bldg. Portland Oregon.）

官名	氏名	就職年月日
領事	沼野安太郎	明治四一、八、三一
事務代理	大山卯次郎	同 四三、六、三
領事	井田 守三	同 四四、八、一八
同	熊崎 恭	大正 三、一一、二五
事務代理	五明 砂	同 五、九、三
領事	赤松 祐之	同 五、二二、一〇
同	重光 葵	同 七、五、三一
同	杉村 恆造	同 八、二、二
領事代理	吉田 丹一郎	同 一〇、八、二四
領事	武田 圓治	同 一一、三、五
事務代理	岡本 久吉	同 一三、五、七
領事	水澤 孝策	同 一四、九、二三

ニューオリアンズ領事館

同館は一九二三年（大正十一年）十二月三日初代領事として着任した加來美知

雄によつて開設されたものである。従来同市並に近方各州一帯即ち南北両カロライナ、ジョージア及びフロリダの四州は紐育總領事館により、又テネシー、アラバマ、ミスシッピ、アーカンソー、ルイジアナ、テキサス及びオクラハマの七州はシカゴ領事館（現在總領事館）によりそれ／＼管轄されてきたが、一九二二年七月に至り、時の外務大臣内田康哉は棉花その他米國南部産業の重要性に着眼し、ニューオーリアンズに領事館新設を決したものであつた。而して政府に於ては同館管轄區域として南部地方を一括管下に置く方針であつた。ヴァージニア以北の地方をも同館の管下に置くことは徒らに廣大に失する嫌ひありとしてこれを止め、只ノースカロライナは多少棉花を産するので、同館が棉取引を中心とする經濟調査を管掌すべき點より考慮し、サウス・カロライナを一括同館の管下とされたものである。同館は在米邦人の中心地方より距たつてゐるが、同地方唯一の本邦機關として米人方面との接觸斡旋に南部産業との交渉に或は中南米、東部沿岸等伸び行く本邦船航路の保護等々の重要任務についてゐる。同館管轄區域「ノースカロライナ」「サウス・カロライナ」「ジョージア」「テネシー」「フロリダ」「アラバマ」「ミスシッピ」「アーカンソー」「ルイジアナ」「オクラハマ」「テキサス」各州である。開館以來十七年、現在は市内目抜き場所なるセントチャールズ街の閑靜美麗なる地域に事務所並に官邸を有し、館員は領事伊藤憲三の外に書記生並に書記各一名が在勤してゐる。歴代長官の官等、氏名、着任年月日を示せば次の如し。

官名	姓名	就職年月日
領事	加來美知雄	大正一一、一二、三
事務代理	齋藤政一	同 五、一一、八
領事	岩切明石	同 一三、九、二五
事務代理	佐藤由己	同 六、三、一〇
領事	八木元八	同 一四、四、二三
事務代理	佐藤由己	同 一一、一二、二六
領事	鶴原太吉	昭和 二、四、一六
事務代理	内田光憲	同 一三、二、二一
領事	渡邊知雄	同 二、八、二
事務代理	伊藤憲三	同 一三、三、一八

ホノルル總領事館

ハワイ・ホノルル市に日本の領事館が設置されたのは正式には一八八四年（明治十七年）七月初代領事として中村治郎が着任してからである。然しそれ以前即ち一八七五年（明治八年）十一月から外國人を以て日本領事代理心得、或は日本貿易事務官代理として駐在せしめ領事事務を執らしめてゐた。而して同館は初代領事の中村治郎が着任して正式に領事館として開館した翌一八八五年（明治十八年）には早くも總領事館に昇格し、更に一八九七年（明治三十年）には公使館に昇格、時の島村總領事をハワイ駐劄辦理公使に任命するなどしたが、その翌年七月には再び總領事館に退格して今日に及んでゐる。開館以來五十六年間管下十幾萬の在留同胞を擁し、太平洋の中間に位して重要任務に服してゐる。同館管轄區域、米領布哇群島、及「ミッドウェー」群島で、その歴代長官を示せば次の如し。

領事代理心得	J. B. Dickson	明治八年十一月	（明治三十年四月公使館に昇格、翌三十一年七月再び總領事館に退格す、その間島村は辦理公使に任ぜらる）
貿易事務官代理	J. D. Brower	同 十年十一月	
同	J. O. Carter	同 十三年九月	
領事	（明治十七年七月領事館設置）	明治十八年一月	
領事	中村治郎	明治十八年九月	
總領事	安藤太郎	明治十九年五月	
總領事代理	鳥井忠太	同 廿二年十二月	
領事	正木退藏	同 廿三年五月	
總領事	同	同 廿四年六月	
同	藤井三郎	同 廿五年十一月	
事務代理	成田五郎	同 廿七年十一月	
同	清水精三郎	同 廿八年一月	
總領事	鳥村久	同	
事務代理	平井深造	明治卅一年七月	
總領事代理	齋藤幹	同 卅一年九月	
事務代理	岡部三郎	同 卅五年八月	
總領事	齋藤幹	同 卅六年三月	
事務代理	松原一雄	同 卅八年十二月	
總領事	齋藤幹	同 卅九年九月	
事務代理	阿部嘉八	同 卅九年八月	
總領事	上野專一	同 四十一年八月	
總領事代理	森安三郎	同 四十五年五月	
同	來栖三郎	同 大正元年十月	
總領事	永瀧久吉	同	
事務代理	原田明達	同 二年十二月	

總領事代理	有田八郎	同	赤松裕之	同	十月
總領事	有田八郎	同	柴田市太郎	同	五年八月
總領事代理	諸井六郎	同	岩田嘉雄	同	六年三月
總領事代理	古谷榮一	同	柴田市太郎	同	七年七月
總領事	矢田長之助	同	岡田兼一	同	十二月
總領事代理	内藤啓三	同	山崎恒四郎	同	九年八月
總領事	山崎馨一	同	田村貞治郎	同	十二月
總領事代理	竹内駒治	同	山崎恒四郎	同	十一月九月
同	吉田丹一郎	同	福間豊吉	同	十月
總領事	青木新	同	山崎恒四郎	同	十二年十一月
總領事代理	竹内駒治	同	水澤孝策	同	十三年三月
總領事	桑島主計	同	工藤敏次郎	同	十四年九月
總領事代理	竹内駒治	同			
昭和三十六年六月					

紐育財務官事務所

同駐米財務官事務所の創設は一九一七年（大正六年）九月十七日公布の勅令第一四九號に基くものにして、當時日米財政經濟の國際的關係は頗に密接となり、海外に於ける帝國財務に關する事項を處理し諸外國と財政經濟上の聯絡提携を圖り、以て戰時並に戰後に於ける帝國の經濟的發展に資する必要愈々大を加へたるに因る。初代財務官（奏任）には田昌任命せられ、その後一九二〇年（大正九年）九月には從來の奏任財務官は勅任財務官に昇格せられ、一九二四年十月には駐米專任財務官は廢止せられ、英佛駐劄財務官が米國兼勤を命ぜられた。右英佛駐在財務官の米國兼勤は一九三九年（昭和十四年）四月二十一日まで繼續したが、日支事變の進展により、日本の對米經濟關係は益々重要性を加へ、爲に一九三九年四月二十二日公布の勅令第二一六號を以て駐米專任財務官が設置せられるに至り、今日に及んでゐる。而して現在は勅任財務官の下に書記官一名、財務書記二名あり、紐育市ブロードウエー二二〇に事務所を開設してゐる。歴代長官名次の如し。

官等	氏名	就職年月日	津島壽一	昭和二年五月廿五日
三等	田昌	大正六年九月十七日		
一等	松本脩	同 十一年六月廿一日	富田勇太郎	同 九年二月十五日
二等	勝正憲	同 十二年四月十二日	荒川昌二	同 十一年十一月廿一日
一等	森賢吉	同 十三年十月廿八日	西山勉	同 十四年四月廿二日

專賣局葉煙草購買事務所

同事務所は日本政府が葉煙草の直接購買開始の目的を以て一九〇六年（明治三十九年）ヴァジニア州リッチモンド市に購買事務所を設置したの端を發し、その後ニューヨーク市に移轉して爾來引つゞき葉煙草の購買事務を取扱つて來たが、最近日本に於ける煙草耕作技術の進歩著しく、米國よりの輸入量も漸次に減少し來たり且つ偶々一九三七年七月勃發せる支那事變により、日本の財政經濟は新たに調整する必要に迫られた爲、一時葉煙草の輸入は中止され、獨立の事務所は一九三八年一月三十一日を最後として閉鎖し、現在は財務官事務所に於て事務を取扱つてゐる。歴代購買官氏名左の如し。
丸瀬寅雄、加藤守一、宇賀四郎、山下博敏、野呂一雄、南勝治、花田政春、平澤法人、宇田吉一、友岡武年、五十子順造。（但し一九一四年以前は不明）

鐵道省紐育事務所

同事務所は一九一七年（大正六年）十二月一日内閣鐵道院紐育事務所として開設されたが、一九二〇年（大正九年）五月十五日に至り官制改正により鐵道省紐育事務所となつて今日に至つたものである。現在ニューヨーク市五アヴニュー六三〇に事務所を開設、鐵道省事務官田坂泰迪の外に鐵道省技師白木龍夫が在勤してゐる。

商工獎勵館

同事務所は一九三八年（昭和十三年）三月、ニューヨーク市マヂソン街二〇〇に事務所を開設、紐育事務所 所長として大沼恒が赴任した。同事務所の本館府立東京商工獎勵館は東京市麴町區丸ノ内にあり井上貞藏がその館長である。同事務所の事業は主として取引仲介斡旋、商品陳列所の公開、見本展示會の主催、外國

商品参考見本の蒐集、紛議の調停、日米貿易上の重要な事項に関する報告、日、米、加貿易振興に必要な各般の事務等である。

紐育海外生糸市 同事務所は一九三三年（昭和八年）三月十七日創立された。同所は農林省の所管に屬し、**場調査事務所** 日本蠶絲業及び生絲貿易の發達に資すべき各種の事情及び海外蠶絲業の調査を行ふと共に

蠶絲競争品又は類似品に関する調査、並に日本蠶絲の宣傳事務等を司つてゐる。歴代所長名は次の如し。
吉田清二、石黒武重、植田武彦。

日本貿易幹旋所

日本海外貿易増進に一段と拍車をかける爲め、貿易者組合中央會では商工者と連絡を取り一九三七年（昭和十二年）世界各樞要の地に貿易幹旋所を設置し、貿易の伸展を圖る事となり、米國へは左の三ヶ處に其の事務所を開設し、鋭意これが目的完遂に努力しつゝあり。

桑港日本貿易幹旋所 一九三七年（昭和十二年）十月一日開所、初代所長渡邊久克、主事補富永英雄。
市俄古日本貿易幹旋所 一九三七年（昭和十二年）十月一日開所、現所長山田廣。
ヒューストン日本貿易幹旋所 一九三七年（昭和十二年）十月一日開所、所長河井信三。

在米同胞の公共團體

在米日本人社會の最初の公共團體とも言ふべきは、桑港に一八七七年（明治十年）設立された福音會を以て嚆矢とするが、其後一八九〇年乃至一九一一年（明治二十三、四年）には桑港在留邦人間に政治團體が多く組織された。當時在米日本人の數未だ極めて少く、公共團體を組織するには至らなかつたが、一八九一年（明治二十四年）には大日本人會の創立を見たが永續しなかつた。然し此の頃より漸く公共團體組織の機運動き初め、加州日本人慈善會、日本人聯合協議會、在米日本人會等年を追ふて順次に設立され今日に至つた。

在米日本人聯合協議會

一九〇五年桑港クロニクル紙には數週間に互り激越なる文辭を用ひて日本人排斥煽動的記事を掲げ、一部加州民の心情を刺戟動搖せしめて以來、排日機運は悪化し、在留邦人の被害頻々として出で事態漸く險惡となり、生活の安寧を缺くに至つた。茲に於て是等の障害難境に對し、同胞互助互擁の共同戰線を張り生活の脅威を除かんとする目的を以て生れたのが、即ち各地日本人協議會である。

在米邦人の數は逐年増加の一途を辿ると共に上述の如く排日氣運漸く漲溢し來るにも拘はらず、何等之れに善處するの中央團體が無きを憂へて、安孫子久太郎、清瀬規矩雄、湯川寛一、黒澤格三郎等が中心となり、聯合團體組織を企圖し、一九〇五年（明治三十八年）五月十八日桑港に第一回聯合協議會を開き、こゝに同名の團體が成立したのである。翌年第二回はフレスノ市に、翌々年第三回は羅府に、第四回は一九〇八年再び桑港に開催するに至り、事業發展のため其組織變更の議起り、便宜上聯合協議會を解散して『在米日本人會』組織の道程へと進んだ。是の秋恰かも偶々小池張造紐育より總領事として桑港に來任し、中央團體の強力化を慫慂したるに歸因す。當時の書記は木庭利器三であつた。

在米日本人會

在米日本人聯合協議會は既述の如き事情より一時解體を餘儀なくされたのであつたが、各地散在の地方協議會を聯絡統一する有力中央團體の強化は一般に認められ居た折柄として上述の如く桑港領事館の總領事館昇格と共に紐育總領事たりし小池張造桑港總領事として來任し、中央團體強化のため進んで其の創立に盡力するところあり、一九〇八年二月に至つて現在の在米日本人會が設立されたのである。斯くて初代會長には牛島謹爾、副會長には黒澤格三郎各選ばれ久萬俊泰が書記長に就任した。而して農、商、工部を設け積極的に同胞の福利増進を企劃し、經費の増加に對しては、當時再渡航其他寫眞結婚による妻女呼寄證明等の領事の證明に際し、新團體たる『在米日本人會』に聯絡する地方日會にも證明（副署）手数料を認可するに至るの可能性を暗黙の間に示差して、會の革新

を奨励した。是れ當時在桑港の法學士高橋作衛の日米問題研究上より、在留同胞中央團體の積極化を進言したるに因るものと云はれた。茲に於て所謂御三家（正金、郵船、三井）よりも參事員を出し、正金よりは支店長藤平純三が會計として幹部に列した。此の證明權に就ては一九〇九年一月に開かれたる第一回年會に於て「各聯絡團體は皆各種證明保證料の半額を在米日本人會に交附するものとす」と定められており、爾來多年に亘り地方團體在米日本人會共に此の證明權に依つて會員を繋ぎ財源と爲し得たのであつたが、一九二四年七月一日新移民法實施の爲證明の必要消滅し、一九二六年遂に喪失するに至つたので在米日本人會及び各地日本人會に大打撃を與へ兩者今日の衰退を齎らす大原因となつたのである。

證明權問題 在米日本人會の創立後、各地方日會は續々聯絡するに及んで一九〇八年七月桑港に開かれた聯絡日本人會臨時代表者會議に於て、各代表者は證明願書の保證權問題を討議した結果、許可請願の事に決定し之を總領事館に申達して承認を得更に外務省に請願したが、同年十二月に至つて外務省は其請願を容れ「在米日本人會及聯盟日本人會は證明願書保證手續取扱ひを一九〇九年一月一日より許可」の旨訓令を發し、こゝに所謂證明權が生るに至つたものであつた。

代表者派遣 在米邦人問題は漸く多事ならんとする形勢にあつた爲め、故國朝野に對して在米日本人會の趣旨を知らしめ、且つ聯絡援助を得やうとの目的より、一九〇八年二月參事員渡邊金藏を代表者として日本へ派遣したが、渡邊參事員は日本に滞在すること十ヶ月、此間東京、大阪、京都、横濱、神戸の各商業會議所と聯絡提携を求め他方政治家、實業家、學者、新聞記者等の各有力家を歴訪して在米日本人會の趣旨を説明し贊助を求むる所あつた。その贊同者も可成に現はれ寄附金の如きも森村男の五千圓を始め、三井男の三千圓、高橋、松尾兩男の各二千圓等、合計二

萬一千二百圓を得てゐる。

其他の諸事業 在米日本人會の第一年度は種々の事業の爲に忙殺されたが、其の主なるものは縣人會及び特殊團體との交渉、入頭稅徵收方法に關する交渉、警察及び移民局に對する交渉、眼病患者の救護、妻女呼寄上の便宜、關稅減稅運動、大西洋艦隊の歡迎、日本觀光團の斡旋、酒小賣鑑札問題、邦人アラスカ遭難事件奔走、不拂賃銀の請求、新聞社との接近、米人に對する親交、諸鑑札の下附運動、州會の排日運動に關する對策、支那賭博禁止運動、教育調査等相當に多事であつた。又會報を發行して冷くこれを頒布したが爾來近年までその發刊を繼續し、同會の諸事業を一般に報告する機關たらしめたのである。

在米日本人會と新渡航者 在米日本人會が設立以來の諸活動中、記すべきは先づ邦人新渡米者に對する各種斡旋であらう。既述した如く新渡航者は年を追ふて増加し、一九〇九年度中に於ける桑港經由入國邦人數は三百二十四名に達した。其中二三等船客中眼疾嫌疑の爲め移民局に抑留されたもの百四十一名、治療を加へて上陸を許されたもの八十四名、假上陸を申請し入院治療後上陸を許可されたもの二十一名、送還者二十九名に及ぶ状態であつた。故に在米日本人會は進んで其の上陸斡旋に努め送還者の一掃を圖る所あつた。當時は故國より妻子呼寄せ及び寫眞結婚者の渡米多く、在米日本人會は書記を毎便船に派して之等邦人上陸に便宜を計つた。されば翌一九一〇年度には渡米邦人總數千二百八十三名、中途還されたものは僅に二名に過ぎなかつた。其後渡航者の數も激増を辿り、その上陸の支障なきを計るに努め、移民總監に向け陳情書を送り専ら當局並びに一般者の誤解なきを期し、或は新渡米婦人に對しては新渡米婦人の契を編纂配布するなど同會の渡航事務も多忙を加へた。而して之等の事務には當初書記ウオーカが當り、同人死去後は移民局通譯たりしハワース博士及びミチエル書記が専らその衝に當つたのである。

日本人會の對排日運動

一九〇七年二月遂に布哇轉航禁止令が布かれ、それと交換條件に桑港邦人學童間

題（其項参照）は解決し、間もなく紳士協約の成立を見るに至つたが、排日派は極力邦人を農園より驅逐せんと試み隔年召集さるゝ州會に幾多の排日法案を提出し、其の運動は實に猛烈を極めた。茲に於て在米日本人會は州内各地の親日米人と提携し、排日運動對抗策を講ずるところあり、爲に一九一二年の州會までは排日法案の通過を食ひ止め得たのであつた。然るに一九一三年に至つて中央政府及び各方面の努力も空しく排日土地法が大多數を以て州上下兩院を通過した。該法が邦人農業家に與へた打撃の如何に甚大であつたかは縷説を要しないところである。（排日運動の項参照）

慰問使の渡米 一九一三年度のこの排日土地法州議會通過の報故國に傳はるや、澁澤子爵（當時男爵）を始め、平素在米同胞に同情を有する朝野の諸名士は相諮つて、在米邦人慰問使を送ることとなり、法學博士添田壽一、全國商業會議所名譽書記長神谷忠雄を各正副慰問使として加州へ派遣し來つた。同時に政友會は貴族院議員江原素六を、國民黨は當時既に渡米滞在中の前代議士服部綾雄を各慰問使とし、在加州同胞を慰問するところあつた。即ち相踵ぐ排日壓迫に動もすれば意氣沮喪の形ちにあつた在加州同胞を訪ひ、同情の意を披瀝し難に耐へて徐ろに將來への對策を樹てんことを説き士氣の激勵に努むる所あつた。

委員華府派遣 以上の諸慰問使は在加州邦人を慰問すると同時に、専ら向後の對策を協議したが、これに就ては珍田駐米大使と協議の必要を認め、添田、神谷兩慰問使と共に、在米日本人會に於ては牛島謹爾、安孫子久太郎兩名を華府へ派遣し、互に意見を交換協議の結果、澁澤子爵以下故國の諸名士と提携し、政府後援の下に米人の蒙を啓き且つ在米日本人啓發運動に力を注ぐことと決定し、兩委員の桑港歸着後在米日本人會はその實行に努力した。

啓發運動 在米同胞の啓發運動は排日問題の擡頭と共に具體化するに至つた。一九一一年衆議院議員島田三郎、法學博士新渡戸稻造兩名の渡米は顯著なその一つの現れであると共に、在米邦人問題に對する故國朝野の注意を喚起

せしめた。服部綾雄は排日土地法實施前後より加州各地を講演し、邦人啓發に力めてゐた。越えて一九一五年に至り在米日本人會は海老名彈正夫妻を招聘した。海老名夫妻は加州各地を巡訪して數十回の講演を試み、その聽者總數實に七千五百名以上に達した。一方桑港佛教會は八淵蟠龍を聘し、加州及びユタ州等の巡回講演を依頼するあり、更に在米日本人會は救世軍等と協力し賭博撲滅運動に奔走したことも等しく啓發運動に外ならなかつた。

在米日本人會改革 一九一三年土地法通過あり時局の悪化を慮り委員を擧げて在米日本人會の改革案を起草した。その改革案は左の四項であつた。

- 一、米人顧問辨護士雇傭。
- 二、中央農會の組織。
- 三、商業會議所の組織。
- 四、日本より専門家を招聘し産業組合の組織獎勵

この第一の案については詮衡の結果、エリオット、カルデン兩辨護士に更にスタンフォード大學出身のミツチエル法學士を雇ひ在米日本人會に出勤せしめた。在米日本人會と兩辨護士との契約は一ヶ年を以て終つたが、その間兩辨護士は日本人に關する諸法律問題を誠意研究するところあり、兩來日本人をより深く理解する基礎を作つたのである。尙兩辨護士は該契約終了後も無報酬を以て依然同會顧問辨護士とし爾後我が邦人の爲に盡す所多く、その功績は特筆すべきものがある。第二案については、加州在留邦人の大半は農業である。故に農業の獎勵缺くべからずとし、茲に在米日本人とは獨立して別個に中央農會の設立を見たのである。同會最初の専務理事には千葉專治就任し爾來一定額の補助金を在米日本人會より支給してゐたが、一九二二年には在米日本人會農事部とし、同年度に千葉専務理事辭任あり松岡亮作専務理事代理就任した。一九二三年土地法の三大試訴が一敗地に塗れ、他面戦後農業界の不況深刻化と共に、在米邦人農業家は益々苦境に陥つたが、その間農事部は種々盡すところあつた。然るに一九二四年新移民法の實施、引續いて證明權の喪失等から在米日本人會は収入の道を絶たれて財政窮乏を告げ、自然農業方面の活動も

中絶の状態となり、その儘今日に至つてゐるのである。上述改革案の中には商業組合の創立も含まれてゐるが、桑港商業組合の創立は一九一四年のことに屬し翌十五年に商業會議所と改名し、川島伊佐美その書記長に就任した。同年開催のバナマ運河開通大博覽會に當り、日本よりの出品及び觀光客多數に上り、商業會議所は是等に對し専ら斡旋の勞を取つた。其後一九一七年の書記長に渡邊久克就任した。(其項參照)

第四案農事専門家の招聘は在米同胞農家の間に産業組合を組織し農事及び農産物の販賣、必需品の購入に對する改良發達を促すに必要上、在米日本人會は専門技師一名招聘に決し、その人選を外務、農商務兩當局に依頼したが、農學士西垣恒矩選ばれて一九一四年十月渡米各地を巡回して組合組織の指導に當り數ヶ所に農業組合の設立を見たが、同時に貯蓄、購買、及び販賣組合等も設けられた。

大博覽會 バナマ大博覽會に對しては時の在米日本人會幹部が中心となり、協賛會を組織して日本紹介の種々なる催物を舉行したがこれが經費としては日本政府より五萬弗の補助を受け、在米同胞間からは株式として資金を集めてそれに充てたのであつたが、當事者等はこの種の事業に馴れ居らず、經營宜しきを得ずして二十萬弗以上の大損失を招き、博覽會當局からは缺損金の一部免許を得、また日本からは澁澤子爵の盡力に依つて約五萬弗の補助を仰ぎ漸く缺損を補填し得たのであつた。

寫眞結婚の禁止 加州の排日家達は寫眞結婚を非となし、盛んに邦人排斥煽揚の具に利用した。偶々一九一九年、當時の幣原駐米大使が來桑あり、太田桑港總領事及び在米日本人會の主なる幹部相會し、密かに排日緩和策として寫眞結婚を自發的に廢止するに決し、他に何等考慮する所なく直ちに之を英字新聞に發表した。これが爲め在米日本人間の論議沸騰し、其の處置を批難するの聲誠に喧しかつたが、邦人の加州發展を忌み、その人口増殖を嫌惡する排日派は會心の笑を洩らし、結局彼等に好機會を與へるの愚を踏んで一九二〇年三月以降、寫眞結婚は全く禁止さ

れ、在米邦人の發展上に大打撃を與へたのである。

第二回排日土地法對抗運動 一九一三年制定の排日土地法は既述の通りであるが、依然三ヶ年を越えざる程度の借地權及び收穫契約權を有し居たので、同胞農業家は發展の一端を辿つて居た。茲に於て排日派は遂に一九二〇年十一月三日、一般投票に依つて我が日本人の農園借地及び收穫契約權を全く剝奪し去つた。當時在米日本人會は之に對抗上、同胞間から多額の運動資金を集め、且つ故國有力家からも後援送金を得、極力一般投票の運動緩和に努めたのであるが所期の目的を達するに至らなかつた。

土地法試訴 排日土地法の完成に依り、在加州日本人は竟に勞働者たるの地位に甘んぜざるを得ない境遇となつたが、斯くては過去幾多の苦酸を嘗めて築き上げた農業上の基礎を根本から失ふものであるとし、在米日本人會は日米條約及び米國憲法に準據し土地法に對する試訴を合衆國法廷に提起した。これにも一般在留同胞から資金を募つたのであるが三試訴とも悉く敗訴の憂目を見ねばならなかつた。

在米日本人會の現況 一九二四年移民法の實施は既にも述べた如く在米日本人會の證明權を喪失せしむる原因となつたが、外務省は一九二六年より遂に日本人會の證明權を廢したので同會經費調達の上に一大打撃を與へ、以來漸次衰微を招來し其間共濟會を起し財政整理を行つたが、一九三一年滿州事變が勃發し、日米關係は再び悪化する形勢となり、中央團體の必要は當然要求するに至り、在米日本人會は其の本來の使命に立戻つて活躍すべき責任を生じ、加ふるに引續き日支事變と米國との關係は極めて險惡となるに及び、偶々高橋一雄が一九三九年會長に就任するや、銳意これが對策に努力し、金門萬國博覽會の開催を期として、日米關係好轉と東亞新秩序建設に對する日本の立場闡明に全力を擧げ、各地聯絡日本人會又これに共鳴協力し、在米日本人會は昔日の盛大に赴き、在米邦人の中央團體たるの使命に向ひ邁進しつゝあり。現幹部及職員は、

會長 竹内俊一、副會長 畠山喜久治、同 金澤芳太郎、同 矢橋富藏、同 佐藤力太郎、會計 中野作太郎、書記長 正田庄太郎である。
歴代會長及理事長は、

牛島謙爾、塚本松之助、青木道嗣、小池實太郎、高橋一雄、竹内俊一（現在）重任同一氏名省く。

太平洋沿岸日本人會協議會

時局問題に善處し、同胞社會の向上發展を期する目的の爲め、太平洋沿岸の日本人會は協力一致してこれに當るべく、在米日本人會が主唱の下に、一九一四年（大正三年）七月十五日ポルトランドに於て、央州日本人會主催の下に太平洋沿岸日本人會協議會を開き左の會則を決定した。

- 第一條 本會を太平洋沿岸日本人會協議會と稱す。
- 第二條 本會の目的は在留同胞に關する共通問題を研究解決するに在り。
- 第三條 本會は左の日本人會を以て組織す。在米日本人會、北米聯絡日本人會、央州日本人會、加奈陀日本人會。
- 第四條 本會の事務は組織會に於て定めたる當番日本人會に於て次期集合まで之を處理す。
- 第五條 協議會は毎年一回當番日本人會所在地に開く。但し必要に應じ臨時評議會を開くことを得。
- 第六條 當番日本人會は二ヶ月以前に開會時日を指定し之を各日本人會に通知することを要す。
- 第七條 通知を受けたる各日本人會は開會一ヶ月以前に議案を提出することを要す、當番日本人會は之を直に各日本人會に通知すべし。
- 第八條 會議の議事録は當番日本人會に於て作製し各一通の寫しを各日本人會に交附す。
- 第九條 協議會の通常經費は別に定むる投票箇數に依つて之を分擔す。但し各日本人代表者の費用は其所屬日本人會之を負擔す。
- 第十條 臨時に要する經費は協議會に於て之を議定す。
- 第十一條 各日本人會の投票箇數は左の通り定む。
在米日本人會十箇、北米聯絡日本人會五箇、央州日本人會三箇、加奈陀日本人會三箇。但し委任投票を有效と認む。
- 第十二條 會則の修正は全投票箇數三分の二以上の賛成を要す。

二重國籍問題を解決

右會則決定後直に北米日本人會提出の二大議案たる二重國籍問題、歸化權獲得の試

訴の討議に入り左の決議をなす。

第一決議 合衆國及英領加奈陀出生日本人兒童の國籍選擇に關し、日米加國籍法に矛盾あり、爲に二重國籍問題を惹起し將來に於て懸念に堪えざるものあり。太平洋沿岸日本人會協議會は該懸案の解決に對し最善の方法として日本國籍法の改訂を期す。

第二決議 歸化權問題の解決は在留同胞發展上最大重要な要件にして一日も等閑に附すべきものにあらず、太平洋沿岸日本人會協議會は該問題の解決を以て同胞刻下の急務と認め適當の時機に於て試訴を提起し法理の公正なる斷案を求め同胞權利の獲得を期す。右實行委員を、在米、北米聯絡兩日本人會に委嘱す。

而して前者に對しては、日本朝野の間に之が解決の道を講ぜられん事を訴へ、一九一四年十一月米國太平洋沿岸日本人會協議會の名を以て二重國籍問題解決要求理由書を編纂し廣く日本朝野の間に配布すべく、同年十二月二十一日七百部を布哇丸にて樞密院、貴衆兩院始め大學及學者等に送附した。一九一六年二月三日、二重國籍問題解決に關する建議案は森田小六郎、頼母木桂吉、田村新吉、相島勘次郎、岡崎久次郎より帝國議會衆議院に提出せられ同月九日委員會を通過し、一九一六年八月一日、二重國籍離脱手續は内務省第十八號を以て公布されるに至つた。斯くして、我民族の海外發展の爲に最も必要なる二重國籍問題は、太平洋沿岸日本人會協議會の努力に依り實現を見たのである。其後同會は毎年一回各當番日本人會に於て協議會を開催し、重要問題を協議し來つたが證明權喪失後の日本人會は振はず遂に一九二九年（昭和四年）七月十五日ポルトランド市に於て開會された第十六回協議會を最後とし、爾來開催せざる事となつた。

米國中央日本人會 一九一五年度に羅府に領事館が創設されたので、南加の各日本人會は爾來在米日本人會との連絡關係を絶ち、新たに同年度に遂に南加中央日本人會の組織を見るに至つた。南加に於ける同會の連絡團體は

北はサンルイスオビスポより南は帝國平原、墨國領低加州に至るまでの約四百五十哩の間に散在する二十個日本人會を網羅し、アリゾナ、ニューメキシコ方面の日本人會も抱合して居る。今日まで同會は排日土地法に依り起れる各種訴訟の應援をなし、且つ農事部を設けて連絡團體管内に於ける同胞の産業を指導すると共に販賣組合の奨励に當つておるが、一九三九年米國中央日本人會と改稱し今日に及んで居る。

桑港日本人會

桑港は米國對東洋の關門であり、自然在米邦人にとりても凡そ總ての中心地と云ふ事が出来る、されば在米邦人の諸運動は過半此の地を以て發祥の地としてゐるの觀があり、此の意味に於て數言を桑港日本人會に就て記述するも無意義な事ではない。同會の起原は一八九三年創設され一九〇〇年に在米日本人會の名稱を以て州の認可を受けたが、當時黒死病事件について活動する所あり、一九〇五年聯合協議會の設立と共に在米日本人會なる名稱をば桑港協議會と改め、聯合協議會と聯絡を保つ事となつた。これと同時に各地に於て地方協議會（日本人會）相踵いで設立を見るに至つた。越えて一九〇八年二月聯合協議會は解散さるゝに及んで現在の在米日本人會が生れ、之等地方日本人會續々在米日本人會と連絡關係を保ち、圓滑なる運用を見るに鑑み、桑港に於ても獨立して日本人會を設くることの必要を認め、一九一三年十二月、在米日本人會より分離して現在の桑港日本人會が設置されたのである。地方日本人會中で桑港に次ぐは王府であるが、一九〇三年日本人協議會なる名稱の下に創立され、現在の日本人會に至つてゐる。サクラメント、バレー日本人會、フレズノ日本人會、スタクトン日本人會等も地方團體として有力なるものである。（各地日本人會沿革は本篇第三篇在米邦人地區別概観に詳記す）

日本人商工會議所

従來同胞商業家の間に商業會議所の如き統一的機關のなきは一大缺點となつて居た。従つてこれが爲商業上秩序あり節制ある方法を講ずること不能であつたのみならず、積極的の計劃をなすに遺憾頗る多きものがあつたので、在米日本人會は一九一四年に桑港及び附近の商業家を動かし日本人商業組合を組織せしめたが

これが現在の商業會議所の前身であつて、生みの親は在日會であつた。當時は之を加州全般に及ばさんとする意圖であつたが、未だ全く實現してゐない、設立の趣旨左の如し、

商業道徳を鼓吹して同胞商業家の品位を向上せしむる事

日米貿易の發展を圖り、日本商品の販路を擴張する手段を講ずること

商業家共同の利益を保護増進するため必要の手段を講ずること

右諸項目に關する調査報告をなすこと

而して創立と共に在日會より一定額の補助金を與へその活動を促進したのである。翌一九一五年四月に商業組合を日本人商業會議所と改名し、川島伊佐美書記長に就任した。同年度にバナマ太平洋萬國博覽會が開催されたので之が準備のため前以て商業組合の改革となつたのであるが、大博覽會に當つては商業會議所の活動見るべきものあり、日本帝國及び日本在留民の商業上の利益増進に對する實際上の仕事を援助した。また一九一六年三月から在留邦人の經濟状態を調査したが、その調査費は在日會の補助であつて、同胞の經濟状態を知る上に有力なる資料となつた。

一九一七年に渡邊久克書記長に就任し、間もなく米國が世界大戰参加と云ふ大事件が勃發たので、貿易上、經濟上の大問題が續出し、當時の商業會議所の活動は實に目醒しきものがあつた。即ち、フウバーが食糧監督官に就任し全米國の食料品を支配管理してゐたので、日本米及び日本食糧品の制限輸入、各種雜品の輸出調節が行はれ、日本政府の命令に従ひ、これが實際的運用の任に當つたのである。

在日會よりの補助は月額百弗に増額を見てゐたが、一九二二年二月の在日會參事員會に於て月額百五十弗とし、その代償としてある一定の在留同胞經濟調査を要求した。處が翌一九二三年に至つて在日會の收入減から補助金を元通りに減額し、その後百弗も補助不能となつたので、現在に於ては在日會とは何等の經濟的關係が存しない。

一九二四年米人商業會議所の勸誘の下に桑港に商品陳列所が設立され、農商務省ではこれが經營を日本人商工會議

所に委ね、一九三七年（昭和十二年）貿易斡旋所の設置さる、迄繼續密接不離な關係に置かれ、日米貿易及び在留同胞商人の福利増進のために盡瘁した。

理事の大多數は故國大會社を代表せる支店長が就任し、評議員は二十名である。現在は商業や財政經濟上の月報を發刊し、廣く一般に配布して日米貿易及び經濟上の智識普及に努め、各地の米國人商業會議所とは密接なる關係を有し、その事務的接衝關係左の如し。

- 一、日米兩國の産業及び商品に關する調査
- 二、商習慣、度量衡等の説明
- 三、兩國商人間の係争事件に關する調査並に調停
- 四、書類の翻譯、解説、通辯等
- 五、印刷物の交換

商業會議所創立と共に日本全國六十八主要都市各商業會議所に連絡提携を申込み、其後日本商工會議所と改稱し爾來密接なる關係を保ち日米貿易の促進に對して有意義なる活動を續けて居るのである。

日本商工會議所一九四〇年（昭和十五年）度役員は左の通りである。

會頭 元吉光大（正金銀行）副會頭 今井精三（三井物産）理事會計監査等十一名書記長小花務

縣人會及び海外協會

加州在留同胞が次第に其の數を加ふるに伴ひ、宗教團體或は在米日本人會の如き各種の團體發生するに至つたが、別に郷黨を同じうするもの相集つて縣人會等を組織し、互に親睦を圖り又は新渡米者の便宜に備へ、或は薄倖者の保護救済に當るものもあり、中には更に貯蓄組合の如きを設置して經濟的に提携互助を企てるものもあつた。然し乍ら「縣人會」なる名稱を附して團體の組織を見るに至つたのは、渡米者の漸く多數ならんとする千九百年以後の事であつて、特に布哇轉航者旺盛の時代であつた。則ちこの時代を縣人會發達の第一期と言

ふべく、一九一〇年より一九二〇年に至る十年間は中興時代と目する事が出来る。恰も此の間故國日本にあつては一九二〇年前後より海外協會の相踵いで設立さるゝにあり、彼此次第に聯絡されるに及んで、在米縣人會中、その會名を海外協會支部と改稱し、新活動を企てるもの生ずるに至つた。

加州に於ける各縣人會は他の諸團體、諸事業と同様、桑港を發祥の地としてゐる事別に訝るに足りない。故に桑港の縣人會を以て最古のものとし、他地方の各縣人會は夫れに續いて漸次設立されたるものと見て大過ないのである。左に夫等各縣人會の創立年度を示すであらう。

會名	創立年度
上毛人會（群馬縣人會）	一八九〇
和歌山縣人會	一八九六
山梨縣人會	一九〇〇
靜岡縣人會	一九〇〇
廣島縣人會	一九〇二
神奈川縣人會	一九〇三
熊本縣人會	一九〇四
佐賀縣人會	一九〇四
愛媛縣人會	一九〇五
岡山縣人會	一九〇六
鳥取縣人會	一九〇七
高知縣人會	一九〇八
防長縣人會	一九一四
福岡縣人會	一九二一
大阪府人會	一九二三
三州人同志會（薩、隅、日）	一九二四
北加信濃海外協會	一九二四
福岡海外協會	一九二七
石川縣人會	—
千葉縣人會	—

右に示す如く一八九〇年創立にかゝる上毛人會を最古とし、以下二十餘の各縣人會創立年度を一瞥する時、殆んど逐年増設され來つた事が知られ、他面それに依つて在留邦人の團體生活經路を窺ふことも出來やう。是等の諸縣人會は夫々に同郷同縣人の和衷協力に、或ひは互助互勵に、その存在價值を備へてをり、廣島、和歌山、熊本等の如き多數會員を有するもの、又は地方の同縣人會と聯絡を保つもの等相當の勢力を有するものもある。左に北加州に於ける

一九三〇年末の各縣人會所在所數を示す。

熊本Ⅱ一三、防長Ⅱ七、廣島Ⅱ六、福岡Ⅱ六、神奈川Ⅱ五、和歌山Ⅱ四、岡山Ⅱ三、三州同志Ⅱ三、大阪Ⅱ二、島取Ⅱ二、上毛Ⅱ一、山梨Ⅱ一、靜岡Ⅱ一、北加信濃Ⅱ一、愛媛Ⅱ一、千葉Ⅱ一、石川Ⅱ一、佐賀Ⅱ一、栃木Ⅱ一
尙總括的團體としては東北人會Ⅱ、九州人會Ⅲを算し、櫻府には九州人青年會と東北人青年會があり、同郷人會としては桑港に蒲原町人會、王府に北米筑前人共濟會、筑後人會、嘉穂郷友會、バカビルに松工貯蓄、メリスビルに北仁保郷友會、山口縣共愛會等がある。

海外協會の運動

故國に於ける諸縣の海外協會設立は、一九一八年、同九年のことであつて、海外移住者の多數なる廣島、和歌山、熊本、岡山、山口等の諸縣が他に先んじて設置し、漸次他縣に波及したものであり、其の創立目的は海外植民のそれにあつたが、それも南米を主とし、對米移民の不可能なる今日に於ては對米活動は從屬的であつたと言へる。然し乍ら是等各縣の海外協會設立に依つて在米各縣人會は、それと連絡を保つ上に、新たに縣人會中に海外協會支部を置くものもあり、進んで名稱を海外協會支部と改むるもあり、諸種の新活動に入つた、その中歸國者の再渡米獎勵、在日本（在布哇）日系市民歸米勸誘等は主要なるものであり、これが爲め新たに縣人會の創立を見た地方も現はる等、故國海外協會の運動が在米縣人會を刺戟した事は否めない。

第十一章 社會事業

在米同胞と社會事業

娘子軍

在米同胞の歴史を四期に分ちて、社會事業の變遷を考察して見ると、其の鳥瞰圖を見るの感がする。

第一期 黎明期 第二期 初期 第三期 過渡期 第四期 現在

『黎明期』は、極めて少數の同胞が、三々五々、雄遠の志を抱いて渡米した時代で、極めて覇氣に富んだ青年が、桑港を中心に米國太平洋沿岸に姿を現はし、心ある米人をして敬仰措く能はざらしめ、その武士道的精神を尊重して、彼等を其の家庭に招じ、賓客の待遇を與へ、遂にそれが所謂『スクール・ボーイ』の濫觴となつたのである。彼の周防の海防僧と呼ばれた月性の詩『男兒立志出鄉關 學若無成死不歸 埋骨豈惟墳墓地 人間到處有青山』

は、彼等の感懐であつた。今桑港郊外コルマの日本人墓地に『萬屋常次郎之墓 明治三年二月歿行年二十一歳』とある一基の奥津城は、當時の颯爽たる同胞青年學徒の英姿を偲ばしむるものがある。彼等は意氣軒昂、名利を塵外において、日本と其の將來を思ひ、憂ひ、學業に勤んだ。東海散史の『佳人の奇遇』の如きも、當時のオークランド・メリット湖畔を中心として、書かれたものと言はれて居る。彼等の胸中、唯、天下國家あるのみの慨があつた。

併しながら、其の他の半面に、暗い社會相も亦、姿を現はし始めた。それは所謂『娘子軍』である。何れの移民、植民の間にも、其の先陣を承はる者の中に、この『娘子軍』を見ないことはなく、在米同胞社會の黎明期にも、その

現象を見ざるを得なかつたのである。これに對して、同胞の道德的聖潔力は、麻清の運動として遺憾なく發揮せられた。個人的に、團體的に、この暗黒界一掃の努力が捧げられた。これが在米同胞史、劈頭第一の社會奉仕と云ふことが出来やう。勿論是は基督教團體が其先鋒であつた。

排斥への對策

明治三十年頃から、同胞の渡米者は、俄かに盛になり、更に布哇から轉航者が、群をなして米大陸に押し寄せて來た。この時代を、「初期」と云ふことが出来やう。此等同胞の群は、日本人口の膨脹の、自然の趨勢とも見るべきもので、極めて潜勢力に富み、弾力性に満ちた移住民であつた。彼等青年は、徒手空拳、一擱千金を夢みつつ渡米した者である。そこで之等の大衆にとり、何よりも必要なものは、仕事口を得ることと、英語を習得することであつた。當時太平洋沿岸、到る處に設立せられた、宗教團體では、この二つの奉仕に、その精力を集中したのである。英語學校と職業紹介とは、凡ゆる團體の車の兩輪であつた。

更に同胞移民の大舉入國と共に、擡頭したのは、排斥運動であつた。之に刺戟せられて起つたのが、日本人會であり、同胞の權利を擁護し、福利を増進する目的を以て、此處彼處に、日本人會の結成を見るに至つたのである。

寫眞結婚と過渡期

明治の晩年に及び、在米同胞の數は、漸増して、各方面にその根底をおろし、基礎を固むる傾向著しく、漸く一の社會を形成するやうになつた。茲に於て先づ要求せらるるものは、家庭の建設であつた。所謂「寫眞結婚」なるものが非常なる勢で實行せられ無味乾燥な同胞社會を明るく、楽しい、喜ばしい、希望に輝やくものとしたのである。之と時を同ふして郷里にある妻女及び子供の呼寄も亦盛に行はれ、遂に在米同胞の數、十萬と號し、東進して、山中部諸州より更にロッキーマウンテン連山を越え、山東よりミスシッピー平原を睥睨するまで居住區域を擴張するに及んだ。この期を「過渡期」と呼ぶことが出来やう。

この過渡期に於ける同胞社會は、頗る複雑なる經驗を味つたものである。産業上に於ては凡ゆる排日の勢力に拮抗

して戦ひ、社會的にも米人の差別的觀念と争ひつつ、内面的には、凡ゆる變態的な境遇と、それから生ずる、變態的な現象を、解決しなければならなかつた。

第一に紛糾した問題は、家庭問題であつた、その一は夫婦間の問題で、他は親子間の問題であつた。寫眞結婚は、在米同胞を破滅行詰より救ふ、大なる力ではあつたが、その反面に、夫婦間の意思の疎隔その他の原因から、家庭の波瀾を捲き起す、不祥の現象も現はれ、其の解決に識者は苦心を捧げたものである。當時、桑港、羅府、沙港、ポートランド等に「婦人ホーム」なるもの設立せられたのは、この方面の社會事業の奉仕に迫られた結果であり、また各宗教團體は常にこの方面に奉仕を捧げたものである。

啓發運動

更にまた、此期間に、非常な勢で子供が増し、子供に關する社會事業機關の必要を感じるやうになつた、先づ其の指導機關として、男女の青年會結成の聲が起り、桑港に於ては、逸早く、基督教女子青年會、基督教青年會の創設が行はれ、羅府にも同様の企が行はれた。また佛教會に於ても、佛教青年會を結成したのである。

次に勃興したのは、托兒事業である。これは第一世同胞が活動するを助成の目的を以て、其の幼兒を、その勞働時間保護指導する機關で、沿岸到る處にその活動を見、殊に沙港では、盛にこの奉仕が行はれた。

この時代に起つた、極めて大切な事業は、第二世の教育機關である。第二世の増加は、異常なる速力で進み、在米同胞社會、到る處に、邦語學園の設置を見、第二世同胞に、日本人系の市民として、米國に貢獻せしむる運動が、徹底的に行はれ、在米同胞の社會事業は、之に併行して行はなければならぬ、趨勢を示すに至つた。爾來各宗教團體は先を争ふて、其の教團經營の邦語學園を開設し、其の布教の右翼陣とした。

また此期間に、同胞社會の將來を見越し、慈惠病院創設の議が、同胞識者の間に論ぜられたが、遂にその實現に到らなかつた。

また此期間に、排日運動猖獗を極め、其の對策として、所謂「啓發運動」なるものが行はれ、米人社會對しては排日の非を叫び同胞に對してはその對策を説いて廻つた。

賭博撲滅運動

過渡期にありて、見通すことの出来ない社會奉仕は、賭博撲滅運動であらう。在米同胞間で最も憂ふべき現象は、射倖的犯罪の傾向であつた。而して就中その最も深く膏肓に入つて居つた病は、支那賭博の常習であり、滔々として同胞の全社會に漲る、悪風であり、心ある者をして憂慮に堪へざらしむるものであつた。賭博撲滅運動は、幾度となく、繰り返して行はれ、遂に一九一九年、一九二〇年の救世軍の賭博撲滅戦に刺戟せられて、賭博撲滅期成同盟會の結成となり、其の幹事竹葉嶺吉氏の殉職の死を見るに及んだが、遂にこの弊風の刷新を實現するに至つたことは、慶賀に堪へざることである。

社會事業多端

大正の晩年より現在に及ぶ期間を「現在」の期と稱することが出来やう。排日の問題も、同胞の諸問題も、落ちつく處まで落ちつき、稍々簡性を發揮するに至つたのである。

この期間に、第一世と第二世の數が、伯仲するに至り、更に進んで現在は、第二世の數が第一世を遙かに凌駕するやうになつた。

◎第一世の年齢は五十歳から八十五歳、平均五十七歳◎呼寄の妻女及び子供の年齢が四十歳から五十五歳◎第二世の年齢が將に少年期を脱して、青年期より壯年期に達して居る。

現在の在米同胞社會を、概括的に觀察すれば、第一世は漸く老境に入り、少數の呼寄は壯年期の壘を守つて居るが其の數多からず。

第二世が青年期を突破せんとして居るが、まだ經驗豊富なる第一世に依頼せねばならぬ状態である。斯かる肝要重大なる時期に於ける、社會事業は、極めて多事、多難の時代でなければならぬ。

一、育兒事業、少年少女の養育、二、養老事業、薄倖老人の救護、三、醫療事業、病人の救濟、四、感化事業、境遇の犠牲者の救濟、五、救貧事業、經濟的落伍者の保護、六、社會教育、境遇の善導、七、人事相談、紛糾せる人事の解決、八、失業救濟、九、免囚保護、十、無縁者埋葬

老衰者救濟の急

老境に入りて行詰れる同胞の救護が、急務となつた事は、著しき現象で、向後十年間は此の奉仕が多忙であらう。之等の老人同胞を、郷里に歸らせることは、極めて適當なる奉仕である。彼等を米國で養老院に密集せしめるよりも、其の温い近親者の世話に委ぬる事が、最も人道的で、人情に適ふたやり方であらねばならぬ。

在米同胞間に續々現はれる孤兒及び半孤兒の養育が大切な事業となつた。親を失ふた子供を放任した場合、不良少年・不良青年を輩出すべきは論を俟たず、育兒院の出現は自然の勢であつた。南加に「南加小兒院」が經營せられ、加北に救世軍社會事業館育兒院が奉仕して居る。

加州日本人慈善會

明治三十九年（一九〇六）四月十八日午前五時十二分、桑港は大震災に見舞はれ、其の大半は、或は破壊、或は灰燼に歸した。この事祖國に報導せらるるや、畏くも 明治天皇陛下に於かせられては、桑港市へ五十萬圓の御見舞金を御贈與遊され、在留同胞の救濟資金へ五萬圓御下賜の御沙汰があり、同胞は其の聖恩に感泣したのである。而して、桑港市の復興、邦人への御下賜金中の剩餘金は一九〇一年在留同胞によつて設立されたる本慈善會別途會計に操り込み基金として、保管することとなつた。サンマテオ日本人共同墓地は本會によつて一九〇二年設定されたものである。

皇恩優渥

昭和八年、救世軍桑港事業館新築の趣を被聞召御思召を以て金一封御下賜相成、其の翌年は北米を始め在外同胞の社會事業に對し御下賜金の恩命あり、皇恩の優渥、御仁慈の無量なる、感激恐懼の極である。米國に於

ては、各地に恩賜記念社会事業の計畫をして居る。

加州公共設備に收容の同胞數

一九四〇年（昭和十五年）六月廿五日調査

總計 五百五十五名 内譯 州立機關に 二百四十名 郡立機關に 三百十三名
 州刑務所 三十四名、州立癲狂院 百八十七名、州立ホーム 八名、州立感化院 十二名、州立盲人寮 一名
 合計 二百四十二名
 郡立病院 三百三名、郡市刑務所 十名
 合計 三百十三名

病人 四百九十名 内譯 州立病院 百八十七名、郡立病院 三百〇三名
 囚人 四十四名 内譯 州刑務所 三十四名、郡刑務所 十名
 不良、低能、盲人 二十一名 内譯 州立感化院 十二名、州立ホーム 八名、州立盲人寮 一名
 總計 五百五十五名

州立癲狂院在院者 百八十七名

内譯

ス	バ	ア	ノ	メ	ナ	カ
タ	グ	イ	ウ	ド	ツ	マ
ク	ニ	オ	シ	ノ	リ	ロ
ト	ユ	ク	ノ	バ		
ン	ウ	ウ				
男	四一	二一	一八	一四	一六	一一
女	一六	七	八	三	四	五
計	五七	三〇	二六	二二	一九	一七
						一八七

郡立病院在院者 三〇三名

内譯

刑務所	桑港郡立	養老郡立	小計	府立	郡立	小計
内	マ	ハ	フ	サ	フ	フ
譯	サ	ハ	フ	サ	フ	フ
	ン	ス	ン	ン	ン	ン
男	二〇	二	二五	一四	一四	二八
女	三	八	一一	四	四	八
計	二四	一〇	三三	一八	一八	三六
						三〇三

州立ホーム、感化院及び盲人寮在院者 二十一名

内譯

院名	バ	ソ	ブ	ホ	王
シ	ソ	レ	イ	府	府
キ	ノ	ス	テ	盲	盲
ック	マ	ト	ヤ	人	人
ク				寮	寮
男	三	一	一	四	一
女	五	一	一	五	一
子供	一〇	一	一	二	一
計	一八	一	一	二二	一

州刑務所服役者 三十四名

刑務所	桑港郡立	養老郡立	小計	府立	郡立	小計
内	マ	ハ	フ	サ	フ	フ
譯	サ	ハ	フ	サ	フ	フ
	ン	ス	ン	ン	ン	ン
男	二〇	二	二二	一四	一四	二八
女	三	八	一一	四	四	八
計	二四	一〇	三三	一八	一八	三六
						三〇三

ア 小 計	フ レ ス ノ 郡 立	ワ イ シ ヤ ノ 郡 立	櫻 府 郡 立	カ ー ン 郡 立	ス ト ニ 郡 立	サ ン タ ク ラ ラ	サ ン タ ク ラ ラ	サ ン デ ゴ 郡 立	ウ イ マ ア 結 核 療 養 院	マ ア フ キ ス 結 核 療 養 院	ウ イ マ ア 結 核 療 養 院	サ タ ー 、 ト ル ム ネ 、 養 老 、 ユ バ 、 十 三 郡 の 共 同 經 營	マ ア フ キ ス 結 核 療 養 院	サ ン オ キ ン 、 カ ラ バ ラ ス 二 郡 共 同 經 營	但、 日 本 人 患 者 は サ ン オ キ ン 郡 よ り 入 院 者
一七	八	八	六	四	三	二	一	四	二	一	二	一	二	一	一
四二	二	一	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
〇〇	〇	一	一	一	一	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
一五九	一〇	二	九	四	三	七	一	一	一	一	一	一	一	一	一
オ レ ン バ ラ チ	サ ン タ ク ラ ラ	ソ ノ ノ サ マ	コ ノ ノ サ マ	サ ン タ ク ラ ラ	サ ン タ ク ラ ラ	サ ン タ ク ラ ラ	サ ン タ ク ラ ラ	サ ン タ ク ラ ラ	サ ン タ ク ラ ラ	サ ン タ ク ラ ラ	サ ン タ ク ラ ラ	サ ン タ ク ラ ラ	サ ン タ ク ラ ラ	サ ン タ ク ラ ラ	サ ン タ ク ラ ラ
二	三	四	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
五	四	四	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二〇六	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
八七	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一〇〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三〇三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二

備考

ウイマア結核療養院は アマドア、コルサ、コントラコスタ、エルドラド、ブラサ、ブルマス、櫻府、シエラ、ソラノ
サター、トルムネ、養老、ユバ、十三郡の共同經營
マアフキス結核療養院は サンオキン、カラバラス二郡共同經營、但、日本人患者はサンオキン郡より入院者

アワフニ―結核療養院は マデラ、マセド、スタニロス三郡の共同經營

郡立刑務所在監者 十名(男子のみ) 内譯―羅府 四名、カーン 二名、サンオキン 二名、サンマテオ 一名
スタニロス 一名

右の如く、加州で刑務所、癲狂院、感化院、郡立病院等の、公設機關に收容せられて居る日本人が、五百五十五名あり、其の經費一人一日を一弗五十仙と假定せば、州又は郡、市が負擔する年額が、三十萬三千八百六十二弗五十仙となる計算である。又加州の日本人口を十萬人とすると、州又は郡の世話になつて居る者の割合は、百八十人につき一人となる計算で、

狂人 五百三十五人に一人、病人 二百〇四人に一人、囚人 二千二百七十八人に一人
の勘定となる。

州立癲狂院在院者の年齢

- 十七歳 一、十八歳 二、十九歳 一、二十歳 一、廿一歳 一、廿二歳 五、廿三歳 四、廿四歳 三、廿五歳 六、廿六歳 五、廿七歳 三、廿八歳 四、三十歳 二、三十一歳 二、三十二歳 四、三十三歳 二、三十四歳 二、三十五歳 四、三十六歳 三、三十八歳 二、三十九歳 六、四十歳 三、四十一歳 四、四十二歳 一、四十四歳 四、四十五歳 六、四十六歳 四、四十七歳 二、四十八歳 四、四十九歳 五、五十歳 二、五十一歳 四、五十二歳 九、五十三歳 四、五十四歳 四、五十五歳 三、五十六歳 五、五十七歳 四、五十八歳 七、五十九歳 一〇、六十歳 五、六十一歳 五、六十二歳 五、六十三歳 八、六十四歳 三、六十五歳 三、六十六歳 一、六十七歳 一、六十九歳 一、七十歳 一、七十二歳 一、七十四歳 一、七十五歳 一、七十七歳 一、八十四歳 一、不明 一

合計 百八十七名 平均年齢四十六歳

伊之吉等は會議の結果二萬三千弗の建築豫算を發表し且「南加小兒院」と改稱し、慈惠會より七千五百弗、長峰治之より其他南加一般の同胞より寄附を募集一九二〇年六月工事は竣工した。

然るに楠本の病猶ほ癒へず、偶々小川しめ子の急逝に會して、一時マクアーンソン女牧師に委ね、更に救世軍小林政助に托した、一九二五年楠本漸く病癒えて復任し、永峰米子を理事長に陣容を改めた。折柄市會によりて十六歳以上の女子は寢室を各別にするの市令に接し、一九三四年第二世ボードを創立し、第二世に委ねて院舎の増築、其他設備の改善費一萬弗を全加州に募り、女子館の増設成り現狀にまで清きつくるに至つた。この運動主任は石丸鐵哉にして委員長は村田玉子であつた。

小兒院の現況 經營未だ容易ならざるものもあるも毎年羅府市コミニチーチェストより四千弗内外、郡及州社會局より約同額其他父兄よりの養育料維持會員の會費、献金、一般篤志者の寄附等一ヶ年凡そ一萬五千弗の收支をなすに至り。院内國語學校も一九三三年七月より開始し約五十名の院兒は何れも邦語に親しみを持つに至つた。
聖恩洽し 昭和九年天長の佳節に際し 今上天皇陛下におかせられては、社會事業御獎勵の深き思召を以て當院に金一封下賜あらせられた。當事者は聖恩の優渥なるに感泣し、聖旨の萬一に酬ひ奉らん事を期してゐる。

羅府日會と社會事業館

一九三四年長くも 天皇陛下より羅府日本人會社會事業に對し思召を以て御下賜金の恩命を拜した。當局者は爾來研究に研究を重ね、恩賜記念事業として、社會館(養老院)の設立に決し、一九三九年七月一日サウス、エバクリン街一三四番に會館購入、専ら養老院事業に充當するに至つた。一九四〇年委員會は一週一回宗教講話其他精神指導に就て協議を行ひ、維持會組織へと進んだ、委員左に、

安部俊吾、武藤吉太郎、藤岡紫朗、山崎節、堀甚兵衛、齋藤新次、其他。

公共社會事業と邦人關係

失業者老衰者、疾病者、精神病者等にして生活に困窮するものは、孤兒、貧兒等に對しては中央政府、其他は州及郡に於て夫々救済の方法を講じて居るのであるが羅府領事館々内に於て是等の救済機關により救助を受けて居るもの、一九三六年一月現在、左の人員に上つて居る、現在に於ては恐らく、其數は減少して居ないと見るが至當であらう。

被救濟邦人 羅府領事館調査	
中央政府の補助を受くる者	十七家族人員六十六名
勞働不能のため州、郡の被救者	九十名
郡立病院施療患者(一ヶ年間)	二百名
精神病院及肺病院入院者	四十三名
十六歳未満の孤兒州郡の被救者	二百名

(以上)

第十二章 戦役、事變、災害と在米邦人

緒言

在米邦人の故國を思ふ至誠は常に高く且つ強きものあり、絶えず報國の至誠に燃えつゝあるは斷ずるまでもなき事實であるが、特に戦役、事變等の國難、或ひは天災地變等による災害のことあれば、その愛國心は勃然として更に昂揚され、國難天災を傷むの至情は内地在住者を凌ぐとも譲らざるものあり、即ち過去數十年間に起生せる日清、日露の兩役、滿洲、上海、支那事變の勃發に際しては、個人或ひは團體と云はず、献金に、慰問袋に、國債應募に、乃至慰問使の派遣に赤誠を示し、又は武運祈願に、英靈弔慰に敬虔なる祭會を擧げ、外國に居住するものとしての不自由に打克ちつゝ専ら報國の誠を致すに努め、新聞また在留全民の意志を慮つて全面的なる國策の線に沿ふの報道陣を張り、まことに十萬一心の赤誠を發揮し來つた。更に震、水、風、寒、火、雨等其他の天災に當りても、その報を受くるや常に自發的に義捐の擧に斡旋惜まず、第二世またその父母の國に對する敬愛の念厚きものあり、よく父母とよもに起つこと多く、斯くて過去多年間に互る在米邦人の報國的成果は甚だ巨大の數量に上つてゐるのである。今これらの實數を詳示すること能はないが左にその一斑を記して、如何に在米邦人の祖國愛の深く且つ強きかを一瞥するであらう。

日清役と同胞

日清兩國間の國交破れ「征清詔勅」の下されたのは一八九四年（明治廿七年）八月一日であつた。當時在米邦人全數は約二千五百内外と註された。これら同胞は故國の出師に呼應して直ちに戦役義金の募集に着手し「報國義會」を組織した。會長には領事珍田拾巳、幹事には書記生小田切萬壽之助これに當つて軍資金並びに

恤兵金を募集した。在米邦人は少數であつたが愛國の至誠を示して桑港附近より一萬八千圓を醸金し、サクラメント方面より一千五百圓の献金があつた。サクラメントの報國義團幹部は松岡謙、秦虎雄、竹山祐嗣、山崎金十郎等であつた。

義勇團員と訓練

日清戦争の進展とよもに桑港在留邦人間の一部には「義勇團」が組織され、これを指導したのは當時山口縣人間の有力者たりし河村八十武であつた。河村は當時日本の廟堂に大勢力を有した伊藤博文の縁故者であつたが、河村は右義勇團の結成とよもに、これを伊藤に報告し併せて萬一に備へる爲め團員に、兵式訓練を施し置く必要ありとしてその旨伊藤に具申し、軍服並びに銃劍等の送附を請ふた。日本官邊はこれに應じて軍服等を送り來つたので、團員はこれを着け河村の指導下に桑港郊外に於て兵式訓練を行つた。右は日清役に關聯し巨數を有する在米支那人萬一の蜂起に備へたものであつた。

北清事變

（一九〇〇年勃發）は周知の如く我軍は各國軍とよもに北支に進軍、北京に入つて暴徒鎮壓に威力を發揮し、列國をして皇軍の實力を認承せしめること大であつたが、事變の規模大きからず、依て在米邦人のこれに對する對策も言ふべきほどのものはなかつた。

日露役と同胞

帝國はロシアの對滿野心に機先を制して實力膺懲を決意し、一九〇四年（明治卅七年）二月九日先づ旅順に夜襲を敢行して世界を衝動せしめた。報一度び米國に傳はるや英字紙はこれを大々的に取扱ひ號外を以て日本軍の大捷を報道した。在米邦人は素より超緊張を示し直ちに諸對策を考究したが、米國の局外中立宣言とよもに在米邦人もその立場を考慮し、能く居留民としての使命を果した。一方、帝國政府は在米邦人中の陸海軍豫備兵に對して召集令狀を發し、桑港駐在領事上野季三郎これを各個人に傳達したが、歸朝應召者は續々その行に就かんとし、邦人社會至るところ壯行會の催さるゝありて自づから非常時氣分の横溢が見られた。

この間、ロシア假裝巡洋艦レナ號は桑港灣に遁入し来るあつて、沿岸及び太平洋航路の脅威となり、大統領ルーズヴェルトは米國當局をして同艦を嚴重監視せしめ、遂に一九〇四年九月に至つて同艦の武装を解除せしめた。斯くて我軍は連戦連勝を以て露軍を制壓しつゝありの報刻々傳へられ、在米邦人の喜悅と緊張は一段と昂揚され、當時年齒なほ青壯年であつた邦人の多數は英字紙の戰況報道を鶴首待望し、英文を解する桂庵主人はその譯讀に任じ、周圍に邦人雲集するの奇觀を示した。

一九〇四年の暮れ近づく十二月中旬、桑港附近在留邦人は桑港ユニオン・スクエア・ホールに「在留民大會」を開き、献金積極化問題並びに戰捷祝賀會開催方法を協議した。司會者は副島八郎、會指導者は清瀬規矩雄、西片朝三等であつた。なほ米人社會に在つても日本に對する支援感充溢し、ワシントンよりは特志看護婦としてアニタ・マキ一行日本當局の許諾を得て皇軍に従軍することとなつて渡日し、ニューヨーク方面にあつては青年會館幹事ジョン・モットは米人方面に働きかけるとともに、邦人學生油谷次郎七、廣瀬由介、林吾作、石川利助、柏井園らを督して恤兵金品募集其他に活動を續けた。

特別献金額 在米邦人より日露戰爭中に故國に送られた特別送金額は百三十萬圓に上り、以て如何に在米邦人が愛國の赤心を示したかを窺知するに足り、また如何に在米邦人數が日清戰爭當時より急速に増加伸展したかを示した。而してその献金の内容は次の如きものであつた。

軍費及び恤兵献金二十二萬四千圓、赤十字社への献金八千七百圓、愛國婦人會及び軍人遺族救濟費へ一萬三千四百圓、軍事公債應募額百十四萬圓

桑港大震火災と在米邦人の被害

一九〇六年（明治卅九年）四月十八日午前四時卅分、桑港は稀有の大震災に襲はれ忽ち大火は市内廿餘ヶ所に起り

市の重要區域は猛火によつて灰燼に歸せんとする危機に際會したが、大震災によつて放心状態となれる市民はその消火に努める餘裕なく、水を求むるも既に水道鐵管は隨所に破れて用をなさず、軍隊及び六百の消防夫は出動せるも及ばず爰に至つて工兵は家屋を爆破して延焼を喰ひ止めんとしたが、爆發によつて高層建築物の倒壊とともに却て火を四方に飛散せしめ、火勢更に加はり三晝夜に亘つて延焼、桑港市下町目抜き個所を焼き盡し、家を失ふもの三十萬人、延焼區域四百五十八町平方、日本人の罹災者一萬人の慘狀を來さしめた。

桑港市當局はブレシデオ駐屯軍隊と協力して市内の秩序維持に努め、フレデリック・フルトン將軍は千七百の武装兵を焼失區域に配置して治安維持と警戒に當らしめ、市長シユミツは全市を戒嚴令下に委した。即ち焼失區域は西はヴァンネス街、西南はミツシヨン街、南は埠頭よりチャイナ・ベーシン及び南太平洋鐵道の沿線停車場にまで及んだ。

大統領ルーズヴェルトは市當局と協力して救護事業を迅速ならしめ、米國議會は前後二百五十萬弗の支出を採決し火災なほ延焼中なる二十日午後より陸軍の手を以て市民の直接救助を開始した。また戒嚴令は灣東諸市にも及び軍隊を以て交通を警戒し、午後八時以後は通行者の誰何を行つて交通を遮斷した。王府に於ては當時一同胞は英語力不十分のため背後に銃創をさへ受けんとする事件が起生した程にその警戒は嚴であつた。

罹災者救濟事業

當時の桑港邦人街は支那人街と近接し、カーネー、デューボント（現今グラント・アベニウ）スタクトン、パウエルの各街、並びにこれと交叉せるクレイ、サクラメント、カリフォルニア、バイン、ブツシユ、サター、ボーストの諸街間に散在居住してゐた。よつて災火の餘裕を樂觀しむるも火勢激烈、漸次押し寄せ來るを目撃して急速避難にかゝり、家財道具を街上に搬出してその混雜は名狀し難く、迫り來る猛火を逃れて四散するの慘狀を呈した。

救済事業急行

茲に於て領事上野季三郎及び邦人有志は地方各團體と連絡して罹災邦人救済會を組織し、避難者の指導、食糧品の募集及び給與傷病者の施療、病者及び係累者の歸國斡旋、朝鮮人の救護、その他一般罹災者の保護に努力した。また帝國政府は邦人罹災者救済費として五萬圓の電送あり、その他四月末には米國救済本部より受けた救済物品は左の如き巨量に上つた。

▲白米千九百俵、繭詰三百三十八箱、醬油百三十六樽、雜品巨量▲救護者延入員▲桑港四萬七千四百四十人▲婦人及び小兒收容所(自五月十六日夜開所——至十一月三十日閉所)▲桑港二十一家族、四十八人。王府八十七人▲救済資金額四萬四千六百三弗(内譯)日本政府より五萬圓、フレズノより五千六百弗、ヴァンクラーヴアーより千五百九弗、日本貿易業者より千六百十弗、ポートランドより千三百九十二弗、其他沿岸地方團體及びシカゴ、ニューヨークの各邦人より救済會へ直送)▲救済費總支出一萬五千六百十弗(米國よりの官給品以外の支出)▲救済會役員▲會長上野季三郎、會計大山卯二郎、幹事川崎己之太郎、委員藤田太郎、太田文一(三井支店)牛島謹爾、内田見融、相原英賢、廣田善朗、黒澤格三郎、安孫子久太郎、湯川貫一、倉永照三郎、清瀬規矩雄、藤井宏基

桑王の收容所

桑港震災大火とともに桑港居留邦人の多數は灣東王府方面へ利避避難した。その混雜言ふべからず、灣東基督教會並びに佛教會その他の團體は多數人員を派して右罹災者を迎へ、宿所の斡旋及び食糧品の供給に奮闘し宛ら戰場の如き觀を呈した。桑港にあつてはラフエット公園に避難所を作つたほか、萩原庭園、赤木、藤岡兩花園、佛教會、基督教會、木原小兒園らに分れて收容され、王府に於ては堂本、紀遠兩花園、組合教會、美以教會、南美以教會、佛教會、パークレー・フレンド教會を以て收容所とした。

壯者の分散

震災の結果、罹災者に對する食糧給與の上より云ふも、職業獲得の途を選ばしめる爲にも、桑港邦人を地方に分散するの必要が考究されたが、恰もアラスカ漁場の需要あつてこれに數百名を送り、別に王府方面への居住を圖るなどその分散に努めたが、恰も鐵道會社は罹災者に對して加州々内に限り桑港よりの無料乗車の便を供與するあり、六月に入らざるうちに罹災邦人の過半は地方に職業を求めて分散した。而してこれらの同胞は最も多く

サクラメント、フレズノに移り、またロスアンゼルスに轉じたものも尠少でなかつた。

罹災學童保護

學童は震災とともに廢學の止むなきに至つたため、救済會は明治小學校(佛教會經營)及び佐野佳三經營の日本學院に多少の援助を與へ、校舍に整備を加へて開放し罹災兒童を收容して邦語教育の任に當らしめた。而して當時の邦人學童數は左の如くて總數百十五名であつた。

▲日本學院在學生六二(男三三、女二九)轉入兒童二九(男一九女一〇)計九一(男五二、女三九)教師七(邦人三、米人四)

▲明治小學校在學生一五(男一一、女四)轉入兒童九、計二四教師三。

大森博士震源調査

桑港大震災勃發とともに日本政府は深甚の同情を表はし、救済資金を贈るとともに地震學界の權威大森博士を渡米せしめた。同博士は震源地としてサンタロザ地方を踏査した。なほ同博士が滞在中、中村工學博士、佐野學士を隨伴して桑港を視察中、労働者より瓦礫を投ぜられて負傷する事件發生し、桑港市長は博士一行に遺憾の意を表明するなどの事件もあつた。即ち米人の在留邦人に對する悪感情の存在を示すものであつた。

歐洲大戰と邦人

一九一四年第一次歐洲大戰争勃發とともに、日本は日英同盟によつて聯合軍側に立つて参戰し、ドイツ租借地なる支那山東省青島攻略戰を遂行し、また海軍は太平洋、印度洋、江海附近の海面警戒に當つたが、在米同胞は戰時公債の應募、登録實行、統制への服従等専ら在住國のため銃後の奉仕に遺憾なきを期した。また米國軍隊に入り或ひはフランスに渡つて對獨戰に活躍したのもあつたが、全體として戰時好況によつて同胞各層は相當の經濟的進展を遂げた。

關東震災と邦人

一九二三年九月一日、東京及び横濱を中心とする關東大震災襲來し、その被害甚大を極め死者十五萬を越える慘狀を呈した。この悲報を受けて在米邦人は速刻各團體又は教會等を中心に協力一致、救済金の騰出、同物品の取纏めに着手し、在米日本人會管内に於てのみにても義捐金卅二萬五百五十六弗(贈金總人數二萬三

千六百五十三名)に達し、全米を合して百萬弗以上と註された。このほか桑港日本人救世軍本營及び各宗教團體は新古衣服類其他救護品を集めて巨量を罹災地へ贈るあり、米國政府もまた一百万圓を救恤金として外務省に寄託した。
滿洲、上海事變 一九三一年勃發した滿洲事變並びに續いて起生した上海事變に當つても在米邦人は各團體を中心に献金慰問袋等の募集に努め、また米國人の對東洋感情の緩和に就ても努力し愛國の至誠を示した。
支那事變 一九三七年七月に至つて我國未屠有の支那事變勃發し、極東に對して世界の注意は集注され、米國また帝國の眞意に對する諒解不足より不斷に對日非難の態度を持しつゝあつた。斯る間に於て在米邦人は十萬一心の至誠を披瀝して故國報公の赤心に燃え、早くより恤兵献金に健闘、巨數の慰問袋を送り、また米國の對日感情の惡化に對處する諸種の積極運動を試み、或ひは團體は皇軍慰問使を再三派遣するなど報國運動は各般に互つて行はれた。

兵役義務者會

一九三七年八月在桑港兵役義務者は相諮つて「在米兵務者會」を組織、各地これに翕然として參同、組織的報國運動に着手した。即ち三七年以來一九四〇年現在に至る滿三ヶ年、同會は桑港總領事館管内を中心として地方支部八十二、會員約八千名を有する大團體となり、その範圍はカリフォルニア、ネヴァダ、コロラド、ユタ、オハイオ、アイダホ等の諸州に互り、これらの人々は幹部役員の献身努力と相俟つて過去三ヶ年に陸海軍兩省に寄託した恤兵金は實に六十一萬圓(一九四〇年八月現在、以下同様)慰問袋三萬、別に靖國神社御手洗舎建築費六萬五千圓、合計七十一萬圓に上る巨額に達した。然もなほ同會は引續き組織的報國運動に努めつゝあり、一般同胞もまた不斷に報國を志し涙ぐましき努力を續行しつゝある。而して今次支那事變に全米同胞よりなる献金は實に海外邦人間の第一位を占め、その愛國心の白熱性を示してゐる。

第二次歐洲大戰

一九三九年第二次歐洲大戰は勃發したが、帝國は日支事變處理を第一義として歐洲戰不介入を中外に宣明し、米國また中立を宣するところあり、これらの事情より一九四〇年八月現在に於ては在米邦人と歐

洲戰は直接の關係まだ生ずるに至らず、たゞ米國の國法を遵奉し、善良なる居留民としての本分發揮に努めつゝある。但し米國の對英援助色彩は漸く濃化しつゝあり、國防強化政策は積極化され、在留外人登録法布かるゝあり、また新兵役法制定され、或ひは日系市民成年男子の徵募あるべきを考慮して待機の姿勢を執りつゝある實情である。

米國への奉仕

上記は悉く祖國に對する報國赤誠の蹟であるが、在米邦人はまた米國の國難、災害に當りても他民族に卒先して義金救濟物品乃至公債應募等に誠を現はしつゝあり、法に違つて埒を越えず民族の優秀を示して他民族の輕侮を買ふことなく今日に至つたことは誇るべき事實となすべきを特記するものである。

第十三章 儀禮行事

帝國海軍の來航と交驩

日本最初の 日本軍艦にして始めて太平洋を横斷し異邦の地に日章旗を翻したのは、今（一九四〇年）より

軍艦咸臨丸 八十年前、即ち「八六〇年（安政七年）三月十七日桑港に入港した幕府の小艦咸臨丸を以て嚆矢とする。未だ遠洋航海に經驗少なき七十餘名の東髪帶刀の武士が雲烟五千裡の怒濤を凌いだ勇膽は、實に我が海軍史上に特筆大書さるべき壯圖と云ふべきで、今この果敢なる使命を果した人々の氏名を擧ぐれば、（日米國交史参照）

艦長（軍艦奉行）木村福津守、指揮官駒崎太郎、通譯主務中濱萬次郎、測量小野友五郎、松岡盤吉、伴鏡太郎、蒸氣方肥田濱五郎、山本金次郎、運用方濱口與右衛門、鈴藤勇次郎、佐々倉桐太郎、秘書福澤諭吉、小年士官小杉雅之進、根津欽次郎、赤松大三郎、岡田井藏、公用方（操練所勤務）吉岡勇平、小永井五八郎、醫師牧山修郷、木村宗俊、醫師門生二名、鼓手齋藤留藏、秀島藤之進、圖引（米人）イー・エム・カーン、米國海軍人ジョン・エム・グルックス、米國水兵九名、日本水兵火夫等六十七名、合計百〇二名。

咸臨丸を迎へて桑港市は、ベリーの開いた國から遙々小艦が來航したと云ひ、且つは幕末の武士の勇壯にして珍奇なる風俗、態度と云ひ、市民の感情を咬り、その歡迎熱は至る所に熱狂的なものがあり、市民をして職を休み業を擲たしめるものがあつた。咸臨丸に次いで幕府の修好使新見一行が乗艦ボーハツタン號に搭乗して桑港に到着するやその歡迎熱は極度に達し、時の桑港市長テスチメーカーを始め市の主なる官吏、富豪、陸海軍の將校らは、その間に幹

旋して桑港在留同胞史に未曾有なる歡迎會を同年三月二十三日市役所に於て舉行した。同歡迎會には州長ドーネーを始め海軍將校、陸軍武官、各國領事、市吏、富豪、富商、新聞記者等苟くも加州に少しく名を知られてゐる者は悉くこの會合に臨み日米親善に希望を述ぶるあり、公式終つたのちは更にホテルに於て大宴會を開くと云ふ歡迎ぶりであつた。咸臨丸は三十六日間の航海による艦體の破損修理の爲、ヴァレオの造船所に繋留されたが、その間乗組員は二ヶ月間桑港に留まつて、市の文明開化を視察し、五月中旬艦の修繕成ると共にハワイ經由歸航の途についた。同艦寄港中客死した水夫峰吉、源之助、富藏の墓はローレルヒルからコルマの日本人共同墓地に移され、今なほ一般同胞の參詣は勿論、練習艦隊來航の都度、司令官は幕僚を從へて墓參するを常としてゐる。

筑波艦 咸臨丸に次いで金門灣に日章旗を翻へした帝國軍艦は筑波艦である。同艦は我が最初の練習艦にして遠洋航海の途桑港に入港したのは實に一八七五年（明治八年）十二月十四日、即ち同艦が品川灣を抜錨してより三十七日目の事であつた。艦長は伊東高吉、指令官は福村にして、乗組士官中にはリュテナント三浦功、尾形惟然、新井有貫並に英語教官としてオーステン、エオ、ウッドワードの三名あり、その他二十六名の軍人、三十六名の見習士官、水夫二百三十名、マリオン十七名を乗せてゐた。同艦は航海中暴風に逢ひ二艘のボートを失つたと云ふ。筑波艦入港に際して桑港の歡迎ぶりは前記咸臨丸のそれの如く熱狂的ではなかつたが、桑港の英字新聞紙は筆を揃へて日本海軍の進歩ぶりを激賞した。同艦は凡そ五週間を桑港に碇泊し、乗組員らは各所を巡覽して、翌年一月二十日ハワイ經由歸國の途についた。而して同艦乗組の木工次長鈴木龜吉、一等水兵伴壽三郎、一等若水夫稻垣鈞次郎、二等若水夫松島文藏の四名は桑港碇泊中に病死し、その墓碑は今や移されてコルマの日本人共同墓地に咸臨丸水夫の墓碑と並び立つてゐる。これが葬儀は米國に於ける日本軍式を以て行はれ、その模様を一八七五年（明治八年）十二月二十日付の夕刊紙アルテンは次の如く報じてゐる。

日本軍人軍禮葬儀の概況

今朝當地メソニツク墓地に於て舉行せられたる日本軍人ミリタリー、ヒュネラルは、當合衆國に於て始めて行はるるものにして今其概況を録せんに、斯は目下當港碇泊中の日本軍艦筑波艦に乘組める軍人の四名は、過る月曜日同艦中に於て不幸にも病魔の襲ふ所となりて死亡せり。然して今朝六時頃其死體は本艦より一脚船に移載せられて之を同軍艦附屬の小蒸汽船に曳かしめパレオ街の埠頭に陸揚げせり。其死體は日本固有の習俗に従ひ、高さ二呎半計りもある箱形の柩に納められ、而して其柩上を覆ふに日本國旗を以てせり。靈柩を護衛せる十六名の海軍兵は一同禮服を着け、嚴かに武器を裝帶し、又將官と覺しきもの四名は軍服に身を固めて小蒸汽船に塔して彼等を導けり。此一行の埠頭に着するや兼てより其處に準備せる葬儀社の馬車は來りて柩を迎へたり、柩は以前の如く日本國旗を以て覆はれたり。一同上陸の後將官等は馬車に移り、他の海軍兵は悉くセントラル・レールロードの鐵車に乗りて進行し、彼等の車セント・メリー街に着するや、軍人等は護衛として整然靈柩に先んじ墓場に進軍す、其式場に到するや彼等は二隊に整列し靈柩は肅々此間を擔はる。其れより日本字を以て筆太に記名ある此柩箱は東の方に向ひて恰も座するが如く地上に安置し、一令の下に三發の弔砲を轟き、柩は徐々に穴中に納められたり。次に將官は會葬者一同に對し何か一場の演説あり、畢つて海軍兵は皆々鋤を採つて土砂を彼の柩上に均齊し、夫れより其棺に土を角形に盛上げたり。次に軍人一同抜劍して其土砂の上を刺して記録を止め、是にて儀式漸く終りを告ぐ。一行は暫く此墓地に休憩し其れより再び大鼓、笛及喇叭を以て組織せられたる樂隊の先導につれ一同又元の停車場に進軍し夫れより汽車の便をかりて本艦を指して歸路に就けり、此葬儀は大いに市民の注目をひき共に會葬する者甚だ多く、墓場内は式を參觀せんとして一時は人の山を築きし程なり。葬儀は實に嚴正にして死者に對して禮を拂ふの厚き大いに見る者をして心を動かしたり、云々。

而してその墓碑には次の如く記されてある。

木工次長 鈴木龜吉
 一等水兵 伴壽三郎
 二等若水夫 稻垣鈞次郎
 松島文藏

大日本兵艦筑波號到米國桑港明治八年十二月也從事于艦中而病歿者三名其死體於本月二十日由本艦移載於小蒸汽船而葬於日本國旗下之墓其死體於本月二十日由本艦移載於小蒸汽船而葬於日本國旗下之墓其死體於本月二十日由本艦移載於小蒸汽船而葬於日本國旗下之墓

再び筑波艦を迎ふ 日本人が始めて桑港に於て我が軍艦乗組員を歓迎したのは實に一八八〇年(明治十三年)

七月六日、再度來航した筑波艦を以て嚆矢とする。當時桑港在留の邦人數も漸く殖え二百五十を數へ福音會の組織も既に成つてゐたので、艦隊の歓迎は此處に於て行はれた。艦長相浦紀道以下乗組員出席し、在留同胞側からは時の桑港領事柳谷謙太郎、書記生室田義文その他鳩山和夫、キブソン、小山仙之助ら出席し、東海散史柴四郎が歓迎文を朗讀した。當日の出席者は彼我を合せて八十餘名であつた。而して同艦乗組の矢部副司令、貴島食糧官、深町同副官らは見習士官一同と共に同年七月二十六日午後第五街に在るリンコン・グラママー・スクールを參觀したが、一行が學校に到着するや校長ウイルソンは直ちに全校に授業の中止を命じ、兒童を運動場に集せしめ音樂體操を以て一行を歓迎し、又各種の授業ぶりを參觀せしめた。

同艦は數日後出港したが乗組の二等若水夫の場由松(二二)は同年七月二十九日桑港海軍病院に於て客死し、これ又儀杖兵三十名を派して鄭重に弔ひ、その墓碑も亦コルマの共同墓地に建てられてある。

筑波艦三度び來航 海軍大佐野村貞の率ゐる練習艦筑波艦は一八八七年(明治二十年)十月八日三度び桑港に雄姿を現はし、パレオ街の埠頭に投錨した。今回の乗組員は野村艦長下總員三百三十名にして滞留すること一ヶ月乗組員一同は各方面を充分に視察した。これより先き在留同胞は筑波艦來航の聲を聞くと同時に各團體代表は桑港オツファレル街の唯一會に會合し、盛大なる歓迎會を催さん事を決議し、その準備に着手したが、時の在桑港領事藤井

三郎は如何なる事情にてか極めて冷淡なる態度に出で、剩へ筑波艦をして辭退せしめるやうに努めた爲、歓迎委員の奔走も徒勞に歸し歓迎會の舉は遂に廢止となるに至つた。この爲藤井領事は各方面より非常なる非難攻撃を受けた。然るに米人方面に於ては帝國軍艦來たる…の聲にエデー街の劇場チボリー・オペラ座の如きは直ちに上演中の悲歌劇マリタナを中止し、日本演劇ミカドと差替へ、日本軍艦來航の人氣に投じたところ、連夜満員木戸止めの盛況を呈するといふ有様であつた。同艦は同年十一月九日、サンデーゴ港に向け出帆、同十一月二十二日同艦がサンデーゴ港

を出帆の際、乗組の一等水兵遠矢常次郎は水中に落ちて行衛不明となり、艦は短艇を八方に飛ばして捜査したが遂に発見出来ず、依て野村艦長はサンデーゴ府會議長ハミルトン及び藤井桑港領事に事後を托して歸航の途についた。その後屍體は數週日を経て発見せられ、翌年一月二日マウントホープの墓地に埋葬された。これ筑波艦が加州の地に刻んだ三回目の不幸なる記念である。その墓碑には次の如く印されてゐる。

海軍一等水兵遠矢常次郎之墓

明治三十二年六月十五日
軍艦比叡乘員建之

而して同艦の主なる乗組員を列挙すれば次の如くである。

海軍大佐野村貞、海軍少佐平山藤次郎、同大尉宮岡直記、加藤友次郎、荒井久要、酒井忠利、太田盛實、松本和、同大機關士片江義高、同大軍醫青野處太、同大主計森原蔵、同少尉深川喜文、名和又八郎、淺羽金三郎、杉田秀一郎、田邊直維、同少機關士山上徹、同少軍醫吉田元貞、同少主計吉富與右衛門（以下少尉候補生五十五名）

金剛艦

同艦が故國を辭したのは一八九二年（明治二十五年）九月二十四日にしてエスクワイマルトに一週間餘滞在し、十一月十一日バンクーバーに到着、十二月八九日頃桑港着の豫定であつたが、海上に於て風力を失し蒸汽力に替へた爲豫定より二三日を早め同月六日夕陽を白き艦體に浴びて突然入港した。その爲桑港市歡迎委員らの狼狽は一方ならぬものがあつたが、時の珍田領事並に當時勢力あつた大日本人會の協力下に盛大なる歡迎會を開いた。なほ同艦が桑港に入港の際、同艦小蒸汽船の船長小時候補生某は過て海中に落ちた。當時排日の聲漸く高からんとした時であつたので一排日新聞は嘲評を加へたが、現場に臨んだ人々は彼の熱練せる水泳ぶりを目撃して賞嘆せざるものはなかつたと云はる。

比叡艦とその義舉

比叡艦が練習艦としてシャートル經由桑港に入港したのは一八九七年（明治三十年）六月二十二日である。時恰も米國に於てはハワイを合併せんとする噴高き折とて米國の對日輿論は硬化し、日本は又萬

一を慮りハワイ在留民を護る爲浪速艦を同島に派遣してゐる時であつた。斯る時に帝國軍艦を迎へた桑港在留民は雄姿を仰いで狂喜し、領事代理船越光之丞副領事を中心に、クリツフ・ハウスのオーション・パビリオンで前の金剛にも勝る大歡迎會を開き、乗組員は又米國獨立祭を祝ふ行列に参加し軍艦と大砲の山車、晝花火、二小隊よりなる行軍等を繰出し米國側の喝采を博した。然し乍ら同艦碇泊中の二週間、最も米人をして感嘆せしめ、在留民をして狂喜せしめたことは、埠頭に起つた船火事に對し我が水兵が勇猛果敢なる消防に従事した事で、常に排日侮日的傾向を持つ新聞記者等をして筆を揃へて『嗚呼日東の海軍侮り難し』と大書せしめた事であつた。今當時の新聞より該記事を抜萃すれば次の如くである。

○日本水兵の名譽（邦字新聞掲載）

六月二十九日午後三時常市フォルソム街波止場に於て俄然失火し風勢激烈の爲船積所は勿論巨大の帆走船にまで燃付き僅かの消防夫を除きては何人も助勢する者なきに一分間も躊躇せず端艇を下し非常に救助に盡力し對岸に見物し居る無数の米人をして我帝國の水兵は如何に義侠心に富めるかを知らしめ彼等は常に輕蔑し居るにも係らず老幼男女賞嘆せざるものなし此記事に關し當市新聞は昨日號外を發して報告し又今朝の新聞に著しく世人の注意を引く様特別欄内に掲げた。

而して英字新聞は次の如く發表した。

フォルソム波止場類焼の際日本帝國軍艦の水兵は僅かに手筒水を以てスクナーケーター號を助けて燒失を免れしめたり此一舉動により日本が米布合併に異論申込に就ては餘程米人の感情を動かすべし而して如何に日本人が米國に對して友情あるかを識らしめたり云々。

更に桑港の保險組合は比叡艦乗組員的美舉に對して直ちに會議を開き、植村艦長に向ひ感謝状を送り、且つ又「この一舉は日米兩國の親交益々篤きを現すものなり」と聲明した。同艦は七月七日ホノルル經由歸航の途に執いた。なほ乗組員は次の如くであつた。

艦長、植村永孚、副艦長太田盛實、軍醫長我虎文、主計長小橋、士官二十名、準士官五名、士官候補生十八名、下士卒二百九十九名、總計三百四十六名、内病人十六名あり。

出雲艦ボート

トヲ祭参加

一九〇九年（明治四十二年）は日米間の儀禮事中最も盛んな年である。即ち五月一日中將伊知地 歡迎を受け、九月一日には前年日本を訪問せる米國實業家一行の歡光團に應へる爲男爵遊澤榮一（後に子爵）を團長とし、大谷嘉兵衛を副團長とする日本有數實業家五十二名の實業視察團がシヤートルに上陸しワシントンに於て大統領に面謁し東部、中部各都市を巡歴し又同年九月舉行されたハドソン河溯航三百年祭には各國元首は代表者及び軍艦を派して祝意を表したが、畏くも我が 天皇陛下に於かせられては歐洲よりの御歸途にあらせらるゝ久邇官邦彦王殿下を御名代として参列せしめられ、又十月十九日より同二十三日まで桑港で行はれたボート祭（桑港開港百年記念祭）には軍艦出雲が儀禮艦として同月十一日桑港に入港し、祭典當日は陸戰隊三個中隊を上陸せしめて、各國軍隊と共にマーケット街をボートラ・フェリーよりユニオン公園に向つて行進し、參觀の各國人をして日本軍隊のその隊伍乗せしめて繰り出し、更に豪華なる行列と甲冑に身を固めた十二人の騎馬武者等を出して喝采を博した。又日米兩海軍の短艇競争もあり、我海軍の力闘よく勝利を博して在留民を狂喜せしめた。

靈柩護送艦

吾妻と多摩

我が軍艦にして日本にて客死せる駐日米國大使の遺骸を護送し來つたのは吾妻と多摩の二艦である。即ち前者は一九一七年（大正六年）五月二十五日、ガスリー大使の遺骸を護送して桑港に到着、日米人より深謝の歡迎を受け、後者多摩艦は同一九二五年（大正十四年）七月二十九日腸潰瘍にて輕井澤で逝去したエツガー・バンククロフトの遺骸を護送して同年八月二十二日桑港に入港した（艦長出光萬兵衛大佐）この年は恰も加州が合衆國聯邦に編入されて七十五周年祭に當るので多摩艦は儀禮艦としてこれに参加する使命を有つて居り、靈柩護送艦としての資格から儀禮艦としての資格に替る爲、國際儀禮に従つて一旦桑港を出港して羅府に至り九月五日再び桑港に歸り、同日より一週間に亘つて舉行された祭典には陸戰隊を上陸せしめて行列に参加せしめ、又艦上に日米の名士多數を招待して盛宴を張つた。

一方在留民間では各種の歡迎が盛大に行はれ歡迎相撲などを開いて水兵を歡待した。これより先き一九二〇年（大正九年）には同様儀禮艦として軍艦春日がメーン州の記念祭に参加してゐる。

練習艦隊

以上は主として儀禮艦としての帝國軍艦の來航史を記述せるものであるが、今更に練習艦隊としての我が軍艦來航の史實を見れば、帝國軍艦が練習艦隊として二隻乃至は三隻の練習艦を以て來航し始めたのは一九〇九年（明治四十二年）五月司令官伊知地中將の率ゐる阿蘇、宗谷を以て嚆矢とする。それ以前にも筑波、金剛、比叡の諸艦が前後五回に亘つて來港してゐるが、當時は未だ艦隊を編成してゐなかつた。而して在米同胞が最も熱意を以て歡迎するは練習艦隊の乗組員で、艦隊の寄港地加奈陀ワシントン州シヤートル、加州桑港、羅府並に紐育、或はハワイ等に於ては齊しく日本人會その他の中樞團體を中心として歡迎委員會を設け、在留民一致して歡迎するを常とする蓋し五千哩の異邦に在つて帝國の軍艦を見、軍艦旗を仰ぎ、或は海の護りの勇士に接するは云ひ知れぬ歡喜であり、感激であり、且つは又この時こそ包み切れぬ同胞の祖國愛を顯はす時であるからである。今その來航表を示せば次の如くである。

- ▲一九〇九年（明治四十二年）五月 阿蘇、宗谷兩艦、司令官伊知地中將。
- ▲一九一〇年（明治四十三年）十一月 淺間、笠置兩艦、司令官八代六郎少將。
- ▲一九一四年（大正三年）六月 吾妻、淺間兩艦、司令官黒井悌次郎中將。
- ▲一九一七年（大正六年）五月 常盤、八雲兩艦、司令官岩村俊武少將、艦長谷口尙眞大佐（常盤）齋藤七五郎大佐（八雲）

- ▲一九一八年（大正七年）三月〓淺間、磐手兩艦、司令官鈴木實太郎中將、艦長内田虎三郎大佐（淺間）中里重次大佐（磐手）
- ▲一九二一年（大正十年）九月〓八雲、出雲、兩艦司令官齋藤半六中將。
- ▲一九二二年（大正十一年）七月〓磐手、出雲、淺間三艦、司令官谷口尙真中將。
- ▲一九二五年（大正十四年）一月〓淺間、八雲、出雲三艦、司令官百武三郎中將。
- ▲一九二七年（昭和二年）八月〓磐手、淺間兩艦、司令官永野修身少將、艦長亥角喜藏大佐（磐手）藤吉峻大佐（淺間）
- ▲一九二九年（昭和四年）八月〓磐手、淺間兩艦、司令官野村吉三郎中將、艦長鈴木義一大佐（磐手）日比野正治大佐（淺間）
- ▲一九三三年（昭和八年）四月〓磐手、八雲兩艦、司令官百武源吾中將、艦長鈴木嘉助大佐、新見政一大佐（八雲）
- ▲一九三六年（昭和十一年）七月〓八雲、磐手兩艦、司令官吉田善吾中將、艦長中村俊久大佐（八雲）角田覺治大佐（磐手）

萬國博覽會と日本

費府萬國博覽會

米國に於て開かれた萬國博覽會に日本が参加した最初のもは一八七六年（明治九年）フイラデルフィア（費府）に開かれた萬國博覽會である。同博覽會は米國の獨立百年を記念して開かれたもので、その入場者は約一千萬人と數へられ、今日まで米國に於て開かれた萬國博覽會の最大なもの、一つとなつてゐる。我が日本はこ

れに三萬圓を投じて参加し、時の文部大輔田中不二麿、米國博覽會事務副總裁西郷從道、御用係り鹽田六等出仕、杉山七等出仕等を派して、日米親善の諸工作に従はしめる一方民間業者を督勵し生糸、茶、陶磁器、漆器その他の出陳を試み、茲に始めて日本品を米國市場に紹介する端緒を開いたが、翌一八七七年西南戦争の勃發により殖産工業を奨励する機會を失した。

シカゴ博覽會

而して同博覽會は日本が参加したもの、嚆矢であり、日本品を始めて米國に紹介したところに重要な意義がある。二十六（一八九三年）コロンブスのアメリカ發見四百年を記念して開かれたシカゴ萬國博覽會は一八九三年（明治二十六年）一千萬弗の株式會社によつて經營せられた。會場はシカゴ市の南方ミシガン湖畔のジクソン公園に設けられ、その敷地五百八十英加、五月より十月までの六ヶ月間の開期中に入場料五十仙を支拂つて觀覽せるもの實に二百五十萬人を數へた。この博覽會にも日本は六十二萬圓を投じて大規模に参加し、日米親善並に對米貿易の發展に資するところあつた。而して同博覽會に於ては世界宗教大會が開かれ、我が日本よりは佛教を代表して釋宗演、芦津實全、土宜法龍、八淵蟠龍、基督教を代表して小崎弘道らが出席した。

セントルイス博覽會

同博覽會は米國ルイジアナ州購買百年記念として一九〇四年（明治三十七年）開催されたもので、會場には老樹鬱蒼として天空を摩し蔭なほ暗き趣きありと云はれる大公園フォレスト・パークを選び、米國政府はこれに五百萬弗の補助金を與へ、別に資金六百萬弗の博覽會社を組織して頗る大規模に經營されたものである。開期七ヶ月間の入場者は約二千萬人と稱せられ、我が政府も日露開戦中のこととして朝野を擧げて緊張の折りにも拘らず欣然参加し、政府代表に小田一商工事務官、民間代表に京都商業會議所の西村治兵衛ら來米し、種々の出品をなしたほか、日本趣味豊かな庭園を築造して、日米親善に日本文化紹介に寄與するところ至大なるものであつた。又これと前後してワシントン州シアトル市に於てはアラスカ・ユーコン太平洋博覽會が開催され、我が政府

は日本館を造築して同様参加し、更にオレゴン州ポートランド市に於ける小博覽會にも同様参加してゐる。

パナマ博覽會

同萬國大博覽會は南北兩米州を繋ぐ巴奈馬の地峽を開鑿し、太平洋と大西洋の聯絡を容易な百八十日間を期して桑港市に於て開かれたものである。同萬國博は規模の大なること史上にその比を見ずと云はれ資本金の如きも二千七百五十萬弗の巨額に達し、會場の如きも亦金門灣に面するハーバービューを中心にしてプレシデオ、フオート・メーションを迂回してリンコンパークに至る雄大なもので、米國に於ける博覽會中の最大なものであつた。米國政府はこれが開會を前に各國へ参加の勧誘状を發し、日本は卒先して賛同し既に事務官を送つて敷地の選定までしたが、その後引つゞき加州の排日土地法成立、其他排日諸案の續出、或は合衆國議會に於ける東洋人排斥を目的とする移民法改正案の提出等々と不愉快なる米國の態度に日本の輿論は漸次に硬化して参加中止の聲さへ日本朝野に強力に起るに至つたが、一九一四年（大正三年）四月十三日大隈内閣の成立により方針を一定し、前記諸法律に對する抗議は外交交渉に委ね、萬國博に對しては自ら別個な立場から参加すべしと決し、豫算三百圓萬を計上して總裁農商務大臣山本達雄、副總裁海軍大將瓜生外吉、事務官長山脇春樹、理事官原田次郎その他を任命し、更に内地民間實業家を督勵して博覽會協會を組織せしめ出品の準備をなさしめると同時に、六月下旬には事務官以下を渡米せしめ日本館の建築その他の工事を急ぎ、翌一九一五年二月二十二日の開場式と共に日本政府は他の參加諸國は勿論、米國內の出品物ですら未だ整はざるに一切の出品物を完了し、副總裁瓜生大將夫妻を迎へて二十四日盛大なる開館式を舉行した。式は先づ同日午前百餘名の日本人を招き瓜生副總裁の司會で政府館並に庭園淨めの式に始まり、原田理事官の挨拶、大博社長ムーアの息女の瀧開きによつて一先づ午前の式を終り、午後は大博場内の大公會堂に五千餘名の日米人を招待し、山脇事務官長の司式にて瓜生大將、沼野領事、加州知事ジョンソン、桑港市長ロルフ、大博社長ムーア、

舊教僧正ハンナ、新教牧師エケツドら、孰れも日本の熱心なる賛同と日本文明を代表する出品に賛辭を呈し、日米親善に關する熱烈なる希望を述べた。而して又當地の英字新聞はこの日の情景に感激を傳へて「日本は巴奈馬海峽が世界貿易の革命たるべきを知つてゐる。而して吾人は太平洋の對岸に於ける工業國と親善の關係を持して、互に相扶助して進まんことを希望すると」大書した。

日本の參加模様と在米同胞の協力

日本側の敷地は金門灣を一望の下に臨む絶景の地十八萬平方呎にして、日本館並に庭園は大博覽會場の最異彩であり殊に時恰も歐洲には第一次大戦漸く急を告げ歐洲諸國の参加少なく、爲に日米大博の觀を呈する有様であつた。殊に金門寺、日光廟、日本庭園内に建設した日本趣味豊かな家屋等は人氣の焦點となつた又民間側からは各種の出品、賣店等を出し、興行師揃引人も各種企業を試み、又在米日本人側も在米日本人會の斡旋により牛島謹爾を會長として二十五萬弗のパナマ萬博協賛株式會社を起し、同様各種の企業に乗出したが、共に失敗を喫した。然るに在米同胞が政府側と協力し八月三十一日の天長節を期して行つたジャパン・デーは大博會期中に於ける空前の盛事であつた。

なほ日本の朝野からは澁澤榮一子爵（當時男爵）を始め鈴木文治、吉松貞彌、堀越善十郎、頭本元貞、星野錫、佐々木久二、淺野總一郎、坪井九八郎、河井道子ら諸名士の往來繁く、又同大博を期して催された佛敎大會に出席すべく八淵蟠龍、日置默仙、上山曹源、旭日苗らの名僧も渡米し基督教側よりは海老名彈正等が渡米參列した。更に海軍大將男爵出羽重遠は同大博に於ける大觀艦式に我が海軍を代表して出席することとなり、同年二月一日將校數名を帶同して桑港に到り、官民の大歓迎を受け、大博その他の歡迎會に於て各方面の米人名士と交驩の後、ワシントンに赴いて大統領に面謁、再び引返して大博開會式に臨んだ。

なほ大博當局は日本の賛同に感謝し山脇事務官長を通じて 天皇陛下に金杯一個を奉呈して誠意を表し奉つた。

同年は又南加サンデーにも博覧會が開備されたが、これには桑港在住の貿易商岩田敏郎らが中心となつて民間賛同をなした。

第二次貴府博覧會

一八七六年獨立百年記念の萬國大博覧會を開いたフィラデルフィア市は一九二六年（大正十五年）獨立百五十年記念萬國博覧會を再開し、我が政府も豫算約九十萬圓を投じてこれに参加し、政府側からは商工事務官西岩雄、岸信介、民間博覧會協會から幹事長人見次郎らが來米し、同博外國館の一部を借りて、そこに農産物その他各種生産品を出品し、日米親善の促進に寄與するところ大なるものがあつた。

第二次シカゴ博覧會

一八九三年アメリカ發見四百年記念の大博覧會を大規模に開催したシカゴ市は、前記フィラデルフィアと同様一九三三年（大正十五年）二千五百萬弗の巨費を投じて「進歩の一世紀」を表徴する萬國大博覧會を開催し、我が政府も亦これに賛同した。その豫算は約百萬圓にして商工省から事務官楠瀬常猪が政府代表として民間博覧會協會側から杉原榮三郎理事長、生田義人、山田政一らが來米し日本館その他の出品あり、又南滿洲鐵道株式會社からは滿洲館等を出品した。而してこの滿洲館は北米開教本部に譲渡され、ソノマ郡セバストポールに國満寺となつて現存してゐること既述の如くである。又博覧會でも世界宗教大會が開かれ日本並に在米宗教家の代表多數がこれに参加した。

紐育、金門兩萬博

一九三九年には米國の東西兩部に於て同時にパナマ大博にも次ぐ大規模な萬國大博覧會が開催された。紐育のは「明日の世界」を現はす二十世紀文明の粹を集めたもの、桑港の金門萬國博は世界最大の桑港IIオークランド鐵橋並に金門鐵橋の二大架橋開通記念、世界第一の貯水池ボールダー・ダムの工事完成記念、米大陸とアジア大陸を空に結ぶクリッパー機の太平洋橫斷定期航空路開設記念等を兼ね、この四大事業完成を慶祝して催されたもので、金門萬國博は桑港灣に四百英加の埋立地を造つてこれを寶島と名づけ、總額五千萬弗を投じて海上の一

大文化殿堂を築き上げた。紐育のはなほこれに數倍する大規模なものである。時恰もパナマ大博の時と同様、歐洲は第二次大戰の爆發以前にして各國の參加状態は比較的小規模のものであつたが、我が政府は日支事變の眞最中にも拘らず三百萬圓の巨額を投じて萬博に参加し、紐育に於ては若杉總領事を桑港に於ては佐藤敏人總領事をそれぞれ事務總長に日本からは商工書記官天日光一を政府代表とし、民間博覧會協會からは主事江藤義雄（紐育）、參事山田政一（金門）らを任命し更に大倉組の大工、高島屋の表具師ら多數を派して日本館並に日本庭園の造築に着手せしめ、但し紐育はユニオンの關係米人労働者がこれに當つた。金門萬博は同年二月二十八日、紐育萬博は四月三十日共に萬國博の開催と共に日本館も開館した。出品物は絹絲の實演、手藝品の實演、觀光室、交通・信室、綠茶の宣傳、日本文化宣傳等々で、又萬博會場の美術館には日本の國寶的古美術が多數出品された。一方在留民側に於ては時の在米日本人會々長高橋一雄（日本郵船桑港支店長）を會長に在米日本人金門萬國博協賛會を組織し、金門萬博日本館當局と協力の下に萬國博開場の前二日間に互つて桑港市で催された大祝賀行列に参加し、又同年四月二十九日天長の佳節をトして行はれた日本デーには全米の二世中から十五名の女王を選出、これを山車に搭乗せしめ、都合四臺の山車と總勢千五百の大祝賀行列を繰出して萬博會場を日本一色に塗りつぶすなど、その活動は極めて多彩有意義なものがあつた。日本人協賛會が斯る成功を収めた裏面には在米同胞の全面的な協力は勿論であるが、會長高橋一雄を始め總領事佐藤敏人、日本貿易幹旋所長渡邊久克らの努力が與かつて力あつた事を銘記すべきである。殊にこの日本デーには華府より堀内謙介駐米大使が米國陸軍の禮砲に迎へられて入場し、更に閱兵を伴ひ、萬博會場内中央政府館前廣場に於ける大祝賀會に米國各方面の代表と共に一場の挨拶をなし、支那事變に因んで米人の對日感情の惡化の折柄、その親善一色に塗られた情景は餘りにも感激深いものであつた。

紐育萬國博でも若杉事務總長、天日政府代表らを中心として同様この種の行事が行はれたこと云ふまでもない。

兩萬國博は翌一九四〇年（昭和十五年）五月十一日再び開會され、今回日本は總豫算百萬圓を以て再參加したが昨年九月遂に勃發した歐洲第二次大戰は、この年に入つて正に激烈を極め英佛聯合軍の敗色既に現れ初めた頃であつたので歐洲各國の參加は殆んどなく、外國館としては南米諸國を除けば僅か日本館のみの状態であつた。一九四〇年度の我が政府代表は佐藤總領事を事務總長として商工書記官石田磊、博覽會協會側からは會長今井五介、常務理事小松隆、事務總長梅津芳三、主事生田義人ら相踵いで來米し、在留民も亦田岡彌平（日本郵船桑港支店長）を會長に日本協賛會を組織し昨年にも劣らぬ諸行事に參加した。又同年の日本デーには佐藤事務總長が日本政府代表の資格で米國陸軍を閲兵し、昨年と同様新たに選ばれた女王十名を參加せしめて大祝賀行列を行つた。然して日本館は躍進日本象徴として萬博會場の並ぶなき異彩となつた。

◇ 贈牛鳥畫雨

上野季三郎

◇ 江河水碧流縱橫

千里蒼田一望平

◇ 道般耕成無限產

博來天下藝王名

第十四章 藝術、趣味、娛樂

北加州の文藝と文化の推移

同胞文藝の濫觴

アメリカ沿岸に「日本文學」と名のつくものの發生したのは明治四十年前後の事である。文學と言つてもその發表機關は殆んど沿岸邦字新聞の文藝欄か、或は少數の週刊、又は評論雜誌に限られてゐた。随つてアメリカに於ける日本文學の盛衰邦字新聞の文藝欄によつて表示されてゐたものであつた。此の頃日本では極めて茫漠たる形ではあつたが、所謂明治文學の運動が萌しかけて來た時代であつた。當時の文學青年の間に何かしら新しい文學藝術への茫漠たる憧れが時の文壇主流者たりし坪内逍遙、森鷗外、長谷川二葉亭、尾崎紅葉、幸田露伴等の作品に刺戟を受け、頗る潑刺たる新運動を形成せんとした頃である。此の頃の日本文壇は自然主義、人道主義、技巧主義等を経てやうやく新文藝の勃興氣運が其處に現はれて來た時代であつた。すべての運動は此勃興の初期に於ては純粹なる姿を見せるものでなく、一種混沌たる状態の下に置かれるのを普通とする。従つて其運動の力はいろ／＼なものを捲添へにして動いて行つたのであるが、此の時代にあつて新らしき思想の感化を受けた青年達が續々として米大陸に渡航し、前述の如く邦字新聞の文藝欄を根城に新興文學を唱導して移民地文壇を顯はせるやうになつた。思想的に謂へば是れらの文學青年達は現實の生活を基礎として人生の眞を探求せんとする欲望に燃えてゐた。故

郷を蒼波四千哩の遠くに眺めてあらゆる文學の洗禮を受け、一九二〇年頃より二〇年前後に互り其文藝運動は作品の發表と共に極めて澄冽たるものあり煥然たる北米文壇を形成したのである。けだしアメリカに於ける日本文學の黄金時代は此の頃であつたであらう。即ち北方シヤトルにあつては旭新聞、北米時事、大北日報の三紙文藝欄を中心に天涯の遊子達が各々小説、評論、詩歌を發表し、北加州にあつては日米新世界新聞の文藝欄に是れ又同様の作品を發表、南加にあつては朝日新聞(現在廢刊)羅府新報、羅府日米、北米報知各新聞の文藝欄を賑はせたものである。是れを要するに此の時代、北米文壇の暗示或は其模倣によつて推移した事は争はれない事實であるが、其最も顯著なる事實はロシヤ文學の影響であつた。トルストイ、アンドレーフ、チエホフ、ツルゲネーフなど偉大なる作家のすぐれた作品はむさぼるが如く讀まれたものである。其後一九一五年(大正四年)頃より二十年前後に於てはシヤトルより加州に移つた翁六溪が盛んに「移民地文學」を提唱し幾多の作品を發表して注意を惹いた。總じて此の時代詩歌、俳句が全盛を來し短歌結社の「金色の園」「白線社」(桑港)南詠會(羅府)シヤトル短歌會(シヤトル)新俳句結社の「玄雨會」(王府)「霧の罅」(桑港)スタクトンの「デルタ吟社」中加フレソノの「ヴァレー吟社」、羅府の「レモン詩社」「アゴスト社」シヤトルの「沙香會」及び「青葉吟社」舊派の「レニア吟社」ボートランドの「風土會」など何れも同人を糾合して氣勢をあげた。要するに米國に於ける日本文學の發達推移は北部シヤトルに發生して其本流桑港に流れ、更に南下して現在羅府が温床となつてゐる。

附記：此の外華州ボートランド、ユタ州ソートレーキ、ロッキーマウンテン地帯のデンバー、中西部のシカゴ、東部の紐育方面にも相當週刊紙上文藝作品の發表を見、現在も又紐育に於ける佐々木指月の如き幾多の作品を各方面に發表しつつあるが、取立てて團體的なものは設置されてをらない。

桑港を中心とする文藝運動

北加に於ける邦人の文藝的所産は一八九五年(明治二十八年)の秋、當時米國詩壇に煥然たる光芒を示しつつあつた詩人ウオーキン・ミラーの下にヨネ野口が笈を負ふて入門し、幾多の

英詩を發表した頃より始まる。後數年にして同氏東部遊學の途に就くや一九〇三年(明治三十六年)頃菅野衣川(故人)が是又ミラーに師事して英詩を發表、畫家野口某らと共に氣勢を擧げつつあつたが此の頃やうやく時代に目ざめた文學青年の渡米するもの多かりしも、いまだ團體或は結社を設けて文藝運動を起すに至らず、其後一九〇五年頃詩歌の結社「金門詩會」が生れ、主として其作品を日米新聞の文藝欄に發表、茲に始めて北加文壇は形を整へて來たのである。時を同じくして灣東王府に俳句結社の「六雨會」が生れた。其後此の六雨會は同人頗る増加し、必ずしも俳人だけでなくあらゆる文人を網羅して一時は加州文壇の一異彩となつたが、一九一六年(大正五年)同人四散せる結果遂に自然消滅した。其れ以前一九一三年(大正二年)頃新世界社の岡里忠(故人)の提唱により下山逸蒼(故人)大石水鳥子、田原紅人らによつて同様の俳句結社「霧の罅」が生れ、多くの同人を糾合して月一回句會を開き新世界に發表し、一九一四年(大正三年)九月には同人の句集「霧の罅」を發行してゐる。其頃シヤトルより移住せる翁六溪が盛んに移民地文學を提唱、創作「移植樹」を出版して頗る活躍する一方、日米文藝欄を根城に歌人の結社「金色の園」を設け前記「霧の罅」の新俳句と共に各々北米文壇に寄與するところあり、創作、詩壇又是れに併行して文運の興隆此の時代を以て最高調に達した觀があつた。其後一九三〇年十月桑港文藝協會が生れ現在に至つては主として日米、新世界朝日新聞社の文藝欄を發表機關とし歌の蒼林社(日米)金門歌會(新朝)俳句のボビー吟社(日米)ヴァレー吟社及北加吟社(新朝)デルタ吟社(櫻日)などがあり其他の作品も兩新聞の文藝欄を温床として成長しつつある。尙アメリカに滞在其後歸朝して日本文壇に活躍せるは永井荷風、田村松魚、山田わか、前田河廣一郎、翁六溪、佐藤敏子、論壇の米田實、清澤洲らがある。

北加の短歌史

北加の短歌壇は金門詩社、白線社、金色の園、蒼林社、金門短歌會の順序で發達現在に至つてゐるが、此の間年を経る事約三十年長沼召水、池田挑孤、山形莫越、田原紅人、井上渭城等によつて導かれたところ

が多い。北加歌壇が最も燦然たる輝やきを見せたのは一九二五年頃より同三十年に至る約五ケ年間にわたる白線社の全盛時代で毎月の例會には詠歌五百首以上に及ぶの盛觀を呈し、一九二八年八月には歌集『白線』を出版してゐる。此の年の春土岐善慶渡米の折など土岐の歡迎會には出席者五十名に及ぶの盛會を見たものである。其後いつとなく没落した。白線社の後をうけ一九三六年四月現在の蒼林社が組織され、越えて翌年金門短歌會が生誕各々同人を糾合して精進しつつある。

北加の俳句史

一九〇四年(明治三十七年)桑港に西條木兆、廣瀬柴舟らによつて『十八日會』なるものが生れたのが俳句結社の嚆矢である。其後灣東に『六雨會』が生れた、句の系統より言へば十八日會(後大呂會と改稱)の初期まではホトトギス派其後碧梧桐の日本俳句に共鳴、六雨會中期頃より主として此の派に追隨するもの多かつたが、一方ホトトギス派も共鳴者も多く日米新聞俳句欄を中心に『蟬蛙會』が生れ兩々相對峙して作句を發表せる季歌中心を離れて實生活を題材とする當時の所謂新派俳人の大多數は六雨會に走り加州俳壇に黄金時代を出現した。當時の六雨會の同人にして既に物故せるもの藤井三利、武石天郊、西條木兆、大塚退歩、古屋夢拙、堀田鬼角、下山逸蒼、三輪古絃、岡早志、小川暮雲樓、三宅太郎、直原とし平等にして現存せるものは有田古茅、菅召朗、津村木洋、武井古流星、和田可居、藤賀杉溪、田原紅人、松野珠樹等々であらう。當時王府の同人から原田凡午の主宰で『鴨準』なる文藝雑誌を發行した。六雨會解散後王府に湖畔社が生れ、更に現在のボビー社に至つてゐる。尙加州俳壇にあつて最も特記さるべき新俳句の功勞者は南加の直原としへーと北加の下山逸蒼である。直原は雑誌『レモン帖』を發刊斯道の興隆をはかり、下山は幾多の秀作を残して故國新俳壇に氣を吐き『くつあと』『カリホルニヤを去るまで』『砂漠の旅』など幾多の句集を刊行してゐる。又一九三五年ホトトギス派俳人等は北加吟社を創立して桑港に毎月例會を開らき其作句を發表した。

繪畫及び彫刻

一九〇三年の暮には小圃千浦が渡米桑港美以教會に行李をといた。此頃隻脚畫家赤羽雪峯も同會に寄偶して居つた。桑港の大震災當時には南畫の秦米陽、平福穂庵門下の永井一禾等も桑港に居住して居た。此頃邦人には洋畫を習ふもの漸やく多く一九〇七年頃加州大學美術科教授バーナム・ナール及びフレドリック・マイヤー共に麥嶺市にアート・エンド・クラフト美術學校が設立され(後現在の王府に移轉)ナール教授の教を受けしもの多く又カリフォルニヤ・スクール・オブ・ファインアート桑港美術學校にも多くの邦人學生學び、邦人間に普及されたる美術熱は日を追ふて熾烈となり、一九二二年四月にも沿岸空前の豪華版と稱された、

『東西藝術協會』が誕生し時の桑港美術館長ネルソン・ロービックと小圃千浦の奔走により舊大博跡の美術館に於て頗る大掛りな美術展覽會が催された。翌一九二七年彦山頑吉が中心となり、三原色畫會を起し金門ホール其他にて展覽會を催してゐる。又同年三月上旬より一ヶ月に涉り桑港西部婦人協會展覽會々場に於て小圃千浦が渡米以來の作品を紹介してゐる。此の間一九〇〇年以來桑港を中心に滞在し又展覽、畫會等を催してゐる人には佐々木指月、菅野ガタルト(彫刻)、藤田嗣治、藤岡昇、吉田博等洋畫家を始め川端龍子、小早川秋聲、古城江觀、土屋華香、堀鐵山、福田恵一郎、眞道黎明等が相次いで渡米し畫熱を煽つてゐる。この夏より小圃千浦が加州大學に日本畫講師として招聘され極彩色絹本畫迄教授し日本文化の爲め氣を吐いて居る事と、吉田石堂が常に對白人間に日本畫の特色を注入して居る事である。現在二世間の畫家として大に將來に望みを囑されてゐるものはハンホードの杉本謙、ワツソンビルの宇都宮某、加大出のリバサイドの大久保みね子、小圃希美雄、一九四〇年加大美術科の最優等出身の桑港の山本トーマス等がある。尙一九三九年開催された桑港萬國博覽會には同胞入選者として小圃千浦、杉本謙、日比文子、早川光子の四名が選ばれ、何れも其れぞれの技能を發揮して異彩を放つて居る。

日本の生花と對西洋人の沿革

日本の生花が西洋人間に紹介されたのは一九一三年秋桑港開港記念祝賀會（ボート祭）の節桑港日本人會が市催の此の大祭典に祝賀参加一般より廣く圖案を募集の結果小圃千浦が一等に當選、桑港市の屬望に従ひ下町ユニオンズコヤ全面を日本の情調色彩にて埋むる事となり、セントフランシスホテル前の公園内に三四百人を收容なし得る鷄首の屋形船を、又角の公園の入口には朱色の大鳥居三十呎の繪燈籠、中央には六十呎の紅白吹流しを立て屋形船と相對して東スタックトン街側の中央に約五十呎の紅白市松の花籠を造り、池之坊流に馬場雨林、古實流と遠州流及び盛花等小圃春子の二人に依つて出品された。蓋し此のボート祭花籠の生花出品が對西洋人公衆的の催しの最初の企てであらう。

越て一九一五年桑港に於ける巴奈馬太平洋萬國大博開期中政府出品の金開寺内の床間に生花が配置されてあつた。

一九一六年初夏桑港野花展覽會がパレスホテルの廣間に於て催された。此頃桑港公立學校の美術視學官を奉職しかたわら日本美術の研究者として東洋汽船會社時代より唯一の英文月刊誌「ジャパン誌」上に毎號支那や日本や印度の美術を紹介し居つたミス・キヤサリン・ポールや領事館の日本文化宣傳係をして居つた川崎寅雄等が米人間に茶道や花道の講演をなした。越えて一九二一年春約一ヶ月に涉り桑港日本人畫家達の主唱に依つて催されたる東西藝術協會繪畫展覽會開催中、同館の一大室に生花、投入れ、盛花等多數の出品を以て一般觀衆に強き印象を與へて居る。如斯にしておもむろに培はれたる日本生花の種は年と共に育ち來り、一九三一、二年頃より米人間に非常なる勢を以て日本花道の自然と共に生くる美しくしき藝術の習得欲求熱が起つた。又一方加州各地に涉る各種婦人俱樂部、公立學校等に於て教師や母の會等が主催にて連續講習を受くるもの多く、以下參考の爲め各種花園展や日本花道講習の會を擧げ

て見る。

各種展覽會

春季王府花園展覽會、秋季サンマテオ花園展覽會、加州ダリヤ展覽會、アラメダ郡ダリヤ花展覽會、サンレアンドロ花園展覽會、ビードモントバイコン生花展覽會、加州野花展覽會、麥嶺市生花展覽會、王府市婦人俱樂部生花展覽會、桑港市婦人俱樂部生花展覽會、加大工藝美術科卒業生製作展覽會、各基督教會主催の生花展、

講演講習せるもの

桑港庭園俱樂部（フエヤモントホテル内）桑港繪太人社交俱樂部、桑港二十世紀俱樂部、桑港西部婦人俱樂部、桑港市婦人俱樂部、南桑港ガーデン俱樂部、桑港イングリッドガーデン俱樂部、桑港ブレンデオ兵營内婦人俱樂部其他桑港には各小學校教師母の會等多數あれどは、王府婦人アズレテック俱樂部、王府市婦人俱樂部、同女子青年會、同ユニバシター高校母の會、同アペレー俱樂部、同日系二世會、麥嶺市婦人會、麥嶺二十世紀俱樂部、加大女子青年會、ヘーワード高校、セントアイビル高校、布市ガーデン俱樂部、布市大學出婦人俱樂部、モデスト・ガーデン俱樂部、同大學出俱樂部、ダイニウーバ婦人俱樂部、フアラール婦人俱樂部、サクラメント・ガーデン俱樂部、同大學出婦人俱樂部、サンノゼ・ガーデン俱樂部、同大學出婦人俱樂部、サラトガ・ガーデン俱樂部、モントレイ・ガーデン俱樂部、サンマテオ・ガーデン俱樂部、バカビル・ガーデン俱樂部、サンタローザ俱樂部、サンアンセルモ俱樂部、サオサリト俱樂部、サンクインテン俱樂部、チュラレー俱樂部、パロアルト俱樂部、ナツパ俱樂部

北加に於ける生花は一九一〇年（明治四十三年）前後より一般家庭に於て鑑賞されつつあつたが、是が軌道に乗つて發展したのは一九二〇年（大正九年）四月遠州流安井空公、池之坊馬場雨林等が其れぞれ會所を設けて一般に教授した頃より始まる。其後寫眞結婚時代の人々が各々家庭を作り子女又成長するに及んで益々盛んとなり、加ふるに日本文化宣傳の建前より米人間へ廣く宣傳せる爲現在生花は黄金時代を築きつつある。

茶道 米國に於ける茶道の發達は華道に及ばず僅かに家庭にあつて少數の人がたしなむに過ぎない。桑港に於いては安井空公、山本夫人、石田夫人等によつて時々米人方面を招待することもあるが、未だ一般化するに至つてゐない。茶道が華道の如く振はざる所以のものは華道の如く其れが簡單に行はれざるが故であらう。

演藝界

米國太平洋沿岸に於て最も早く日本情趣を傳へたものは演藝である一八九三年（明治二十六年）桑港に於て理髮業を営める江洲木の木村出身の西島勇（藝名勇蝶）が桑港演藝會を組織し、石津國吉（藝名阪東大三郎）を振り付として大河原太郎、高松秀松、大井平太郎其他と共に日本人共同墓地購入基金募集の爲同年四月二十日オファレル街ジャマン・ホールに於て舊劇を演じたのが嚆矢である。同二十七年頃梅坊主幫間梅川孝治らの喜劇團一座が渡米した。其後一八九七年（明治三十年）櫛引弓人、光勢耕作らによつて川上晋次郎一座を日本より招き、大に日本劇の紹介に努めたが此の川上一座は當時桑港一流のパレスホテルに陣取りジャマンホールに於て先づ日本人の爲開館、更に米人方面へ公開すべくカリフォルニア座を一週間二千弗の契約で借入れ興行を始めた。初晩は白人の觀客多く詰めかけ非常な大成功を収めたが、其翌晩は殆んど客員なく大失敗に終り、やむなく豫定の興行繼續出來ざる爲遂に川上はシャトル落となり、櫛引又東部へ向つて出發し其他の關係者は非常な迷惑を蒙つた記録がある。此の間西島、大河原らによつて舊劇が春秋二期に互つて續けられ、一九〇六年（明治三十九年）頃櫻府には山口縣人嵐橋葉之助らが中心となり、歌舞伎一座が編成されるなど藝界は非常に活潑な動きを見せて來た。此の一座は、其後一九〇八年に至り非常な好評を博し、同一座の女役市川鯉三郎、市川千代枝、三味線の鶴澤彌壽司淨瑠璃の都玉など其後も永く加州の劇壇に寄與するところ多かつた。一方桑港の劇界は大河原死亡の後をうけて市川蝦十郎及び三藤政次郎らによつて僅かに命脈をつないでゐるが、同好者によつて設立された桑港演藝研究會は同人を集め今尙機會あれば素人芝居に氣を吐いてゐる。其他佛教會男女青年會の第二世が最近に至り新舊の劇を上演、好劇家の注目を惹いてゐる。此の間一九〇九年（大正八年）には三浦環のオペラ界復活となり、時を同じくして上山草人、山川浦路らが渡米し桑港に於ても「カチューシャ」を上演して好評を博した事あり、其後舊劇の市川延十郎一座が渡米し好評を博した事もある。

義太夫

一八九三年（明治二十六年）桑港に相模屋の婆さんと呼ばれる義太夫の師匠があつた。是れが義太夫最

古の師匠で藝名を竹本梅玉といふ、其後二年にして豊澤仙八が渡米し舊劇の發展と共に併行して義太夫熱は盛んとなつたが、一九一〇年（明治四十三年）梅壽、梅花、梅玉と呼ぶ三名の下町女將連が大に力を入れ、同年鈴木氏駒の「氏駒會」生れるや斯道頗る興隆して芝居道の勃興と共に發展、一九三二年（昭和七年）同好者によつて日本より招聘された豊竹照太夫の渡米により益々斯道の黄金時代を築いた。現在では豊竹義豊を中心とする桑港義太夫會が熱心に進を誘導してゐる。然し此の義太夫の如きは第二世に共鳴者なく一世凋落と共に漸時衰微せんとしてゐる。

舞踊と長唄

日本舞踊は一八九四年（明治二十七年）桑港メーソン街に花柳勇子が稽古場を開いたのが嚆矢である。此の人は舞踊の師匠であると共に歌澤の師匠も兼ね一時は花柳界に多くの門人をもつてゐた。其後石川夫人（杵屋彌曾代）がヘムルツク街で長唄と舞踊を教へるやうになつたが、是れより先き清元延壽太夫の門弟島崎よね（延富喜代）が妙齡二十一才で渡米し、一八九五年（明治二十八年）桑港に稽古場を開き是れ又多くの門人を養成した。此の延富喜代は其後熱心なキリスト教信者になり、日本に歸つて結婚したと傳へられてゐる。現在では主として森川夫人が舞踊と長唄を教へ、春秋二回に互つて講習會を催し第二世を養成してゐる。

琴及び尺八

琴曲は一九一〇年（明治四十三年）頃よりボツ／＼家庭に於て獨習的に彈奏されつつあつたが、琴古流の中村樂子がポスト街に於て同好者の需めに應じ教授したのが動因となり、同二十年好樂會なるものが生れ、本式に琴曲の教授が始められた。此の頃の門人は何れも熱心で同門に學んだ本阿彌眞喜恵は、後年中村俊後の跡を受け桑港に教授所を閉き現在多くの門弟を取立てるが、一九二二年（大正十一年）前後には山田流の順和田春子、生田流の尾崎、山田流の田中さか子らが何れも教授所を開いて熱心に教授し、その結果第二世にして琴曲を學ぶもの桑港だけでも二百名以上に達するといふ盛況である。一方尺八は琴曲同様一九一〇年頃までは當時渡米せる青年の間に風流の手すさびとして次かれてゐるが、同十四年桑港ポスト街に西園流の鈴木霞山が「かすみ會」なるものを起して

大に斯道普及の爲盡力し、自ら樂譜をこしらへ通信教授を開始するなどなか／＼熱心であつた。同年國田喜太郎（如萍）の渡米するあり、國田は琴古流を斯道の大家神如道に習つた本格的な吹手で中村樂子の琴曲教授所に入出し、尺八普及に盡し現在尺八界の至寶とされてゐる。右琴古流以外桑港には都山流あり、會としては「如一會」がある。

筑前琵琶 桑港に於ける筑前琵琶の元祖は三ヶ島旭桂である。彼は一九一五年（大正四年）桑港に筑前琵琶教授の看板を掲げ熱心に斯道の普及をはかつたが、同八年前川旭鳳が同様の教授所を開いた。越えて大正十一年前川の門人によつて桑港筑前琵琶同好會が創立され、此の頃より琵琶に興味を有する者多く一九二九年以來故國筑前琵琶界の大家豊田旭棧、高倉旭子、原旭、阿部旭鷹、山元旭錦の相踵いで渡米し、筑前琵琶は黄金時代を築くに至つた。現在桑港には同好會、旭爽會、旭穂會の三團體ありて筑前琵琶の全盛時代を築いてゐる。

薩摩琵琶 一九〇五年早くもシャトルでは津田昇（錦昇）が薩摩琵琶を同好者に教へてゐるが、桑港に於ては更に振はず筑前琵琶の盛んなるに比べて甚だしく衰微を極めてゐる。

謡曲 北米に於ける謡曲の發達は南加州羅府に謡曲俱樂部の創立されしに起因し、一九〇五年（明治三十八年）歐洲漫遊旅客某が各流派の同趣味者と會合、娛樂的に謡曲集會を催したるに始まる。其後一九〇七年觀世流藤野義二、實生流黒川新助らの在米同胞が藤森直和（醫師）宅を集會所として謡曲同好者を糾合、研究的に謡曲會を催ほした。越へて一九一七年九月謡曲俱樂部發會式を擧げ、一九一九年南加謡曲會と改稱、大正十年に至り帝國練習艦隊の入港に際し艦隊歡迎謡曲大會を開いた。謡曲は斯くして世人の認めるところとなつた。一九二七年（昭和二年）南加謡曲會は觀世流能樂師招聘の件を協議せる結果、西山樂天其責任者となり専ら衝に當つて第二十四世觀世左近宗家と交渉し當時大連市在住の泉泰一（泉樂）の渡米となり斯道益々發展するに至つたが、泉樂歸朝後西山樂天は「米國能樂謡曲界」なる雜誌を創刊すると同時に觀世學校を創設し、學校制度による謡曲教授を開始した。一九三〇年米國觀世會と改

稱後東京より小林滋三郎の渡米するあり、藤野義二師範代理として米國觀世會を指導しつつある。一方實生流は樋口四郎主として宗家と交渉を重ね東京より里方喜三郎を招聘せしも、現在は羅府實生會、北米實生會の二團體となつた。北加方面に於ては一九二四年藤森直和の王府移轉後同夫人によつて實生流謡曲が宣傳され、大正六年東京より田巻師範を聘して米國實生會を組織し、一九一〇年には會長徳川家達公爵の來桑を迎へて、歡迎謡曲會を領事邸に催する等現在に至つて居る。其他羅府に於ける「喜多流」桑港に於ける觀世流の「中央觀世會」亦熱心なる同趣味者に依て組織さる、一九三一年羅府より桑港に轉じたる西山樂天は觀世流の師範として桑港に教授所を設け地方にも出張教授をなして居る。

圍碁 桑港に圍碁俱樂部の結成されたのは一九一七年（大正六年）の秋、桑港サター街に桑港圍碁俱樂部が生れたのに始まる。此の俱樂部設立以前、鷲津尺魔、長谷川半老、財滿孫次郎らの圍碁同好者が各々家庭にあつて手合を行ひ、一方沿岸在留民の此の種の集會所ともいふべき桂庵に於て盛んに手合されてゐた。一九三六年禪寺桑港寺の磯部峰仙は日本棋院支部を同寺内に設け、一九三九年の暮歐洲よりの歸途來桑せし福田五段を迎へて、昨今桑港に於ける圍碁界は黄金時代を築きつつあり、加ふるに福田五段來桑を機會に前記歴史ある桑港圍碁俱樂部が日本棋院桑港支部と合同するなど大に碁界の躍進時代を現出して居る。

將棋 桑港を中心としての將棋界は別段將棋會所があるでなく、昔から群雄割據の状態であつた。一九二〇年（大正九年）前後には日本人桂庵を唯一の將棋所として菓子商松屋の爺さん、益井、海老原、内越何れも故人らによつて指導され各々天狗の鼻を突き合せる状態であつた。大體に於て桑港將棋界は碁界の如く日本より高段者の渡米を招來するでなく、従つて研究的にも對局されず一沫寂寥の感がある。

書道 桑港に書道修養會の生れたのは一九三五年五月である。毎月二回金門學園社交室に於て例會をもち年一回

書道展覽會を開き現在四五十名の會員を有してゐるが、主として田代秋鶴の筆法に師事し第二世を誘導してゐる。

釣魚 桑港在留民の間で釣に趣味をもち小魚釣を始めたのはずいぶん昔の事である。一九〇六年（明治三十九年）桑港大震災以前からノースビーチやオーションヘイにかけて釣つてゐたがバス釣を始めたのは一九〇九年（明治四十二年）頃から其後やうやく釣趣味が一般に普及し、遂に同好集まつて一九一八年（大正七年）桑港に桑港日本人釣魚俱樂部が創立され、現在多數の會員を有し釣は益々盛んになりつつある。一九二二年十月始めて第一回釣魚競技大會がマイナス・スルーのウイヤーで開催したといふ記録がある。其後同俱樂部では毎年釣魚競技大會を催し、大いに釣趣味の普及に努力してゐるが日米新聞及び新世界朝日新聞社でも俱樂部と別個に釣魚競技を催ふし入賞者へ銀杯を贈るなど釣は益々盛んである。バス釣りが最初行はれたのは王府の「メリット」湖である。

狩獵 狩獵は釣に比べて頗る振はない。第一狩獵は釣の如く大衆的でなくライセンスの如きも二十五弗といふ高價であり、季節も三ヶ月位の事とて年と共に益々狩獵熱は低下しつつある。

藝術寫眞 桑港在留同胞の間には寫眞に興味を有するもの多數ありしに拘らず一九二五年までは何ら其作品を鑑賞する機關なく、各々同好集まつて鑑賞し批評する程度であつたが同年二月、何んとかして趣味の潤澤を計り研究發表を行ふべく始めて桑港寫眞俱樂部が設立された。其後同會は日に月に盛んとなり會員中にはロンドン或は米國人又は日本の國際寫眞展に其作品を發表して桑港寫眞俱樂部の存在を不動のものにしてゐる。尙ボートランドには同胞中にウキラメット・カメラ俱樂部なるものが一九二三年頃まで存在してゐたが現在はない。然し同地の小笠原寛三宅太郎（故人）の如きは米國でも優秀の藝術寫眞家として知名であり、小笠原の如き米國內に於ける最も歴史的な記録をもつオレゴン・カメラ俱樂部の牛耳を取り同會々員より推戴され終身會員となつてゐる。最近此の寫眞熱は第二世間にも著しく普及され各地に俱樂部の結成を見てゐるが、桑港では桑港寫眞俱樂部の傍系たる「ミュー俱樂部」が設

立され其熱度を高めてゐる。（音楽については「日系市民篇」参照）

南加州の文化と文藝

文藝 南加州に日本文藝の移住されたのは一九一〇年前後の事である。當時羅府新報、旭新聞（現在廢刊）の文藝欄を中心に直原敏平、下山逸蒼、高橋波靜、久保綱子、長谷川咲子、太田虹村らが隨筆、詩歌、俳句を發表してゐた。其後一九一五年前後に至り、シャートル若くは桑港より著名の文人が南下するに至つて頗る生彩を加へ、當時アップランドに在つた直原敏平を中心に「レモン詩社」を起し南加文壇の黃金時代を築いた。其後一九二四年に至り山崎一心、中山天時を中心とする「放浪の詩社」が生れ、機關誌「放浪の詩」を發行した。此の種文藝の發表機關としては既に一九一三年頃「詩潮」のあつた事も忘れられない文獻である。昭和に入つて文藝雜誌が組織され、是れは四年程繼續して解散した。一九三六年には林田、加川、伊丹、上山らにより北米詩人協會が創立され雜誌「收穫」が發行された。翌年羅府詩人協會と桑港の文藝協會が「文藝聯盟」を組織し、「收穫」は其爲第二號より聯盟の機關誌となつたが第六號にして一時休刊してしまつた。其後の作品機關としては日刊新聞の外に在米婦人の友、東西時報、最近ではロスアンゼルス誌の如きがあり、更に縣人會其他の團體機關誌（文藝的なものに沖繩縣人會の「ルーキーズ誌」がある）及び騰寫版による各種の同人雜誌、プロ藝術、働く人、北米青年、市民の友などがある。創作は其形體上一年一回の各新聞紙新年號のみを發表機關とした感がある。要するに沿岸何れの文壇も然るが如く羅府文壇も故國の思潮の流れに動かされ一時は福家麥村、高山泥草等の「短歌阿片論」が文藝を超越して火花を散らす論戰となり、一九三〇年頃にはゲダイズムや新感覺主義の作品までが顔を出したが、是れらは何れも年と共に雲散霧消してしまつた。

詩集として林田盛雄、『何處へ行く』(昭和三年)沼田利平の『こんなのが』(昭和四年)外川明の『詩集』(昭和七年)上山平八の『あしあと』(昭和十一年)があり、選集としては山崎一心が全米の文藝同人に呼びかけ出版せる『北米文藝選集』(昭和二年)と『アメリカ文學』(昭和十四年)などがある。是れ以前直原としへの『レモン帖』も忘れられないものである。又塚本嶺南の『極光をたづねて』を初め佐々木ささぶねの『アメリカ生活』田中柊林の著作などもある。

南加の俳壇 南加俳壇は新傾向のレモン詩社以外ホトトギス派の俳人によつて一九二一年先づ橋吟社が創立され一九三一年より俳誌『たちばな』が發行された。一九二九年には『きさらぎ吟社』一九三七年に至り『オリブ吟社』などが生れ、更に續いて『世界吟社』が誕生した。南加の俳人は田中柊林を始めとし『俳句三代集』で故國にも知名であるが、就中銀島、北湖、細江らは出色の俳人である。わけても特筆に價するは日本を知らぬ二世の倉本義夫が英文による俳句を發表、文藝的日米親善に努めてる事である。前記の如く新傾向の俳人はレモン詩社以後『アゴスト社』を創立、月一回研究句會を開き其作品は邦字新聞又は故國の俳句雜誌に發表されてゐる。同社の句集『炬火』は一九三三年發行された。

南加の歌壇 南加歌人の南詠會は一九二八年泊良彦、高山泥草、長谷川咲子らを中心に組織され一九三〇年に至つて歌集『青雲』を、同次回には南光を出版した。加州毎日歌壇には高柳海水、羅府新報には高山泥草がそれぞれ歌壇をもち眞面目な研究を續けてゐる。特筆すべきは北米唯一の短歌雜誌『とつくに』を發行してゐる泊良彦で、泊は一九三五年九月以來隔月に『とつくに』を發行、北米歌壇に大なる貢獻をなしてゐる。一九三七年には各團體聯合の短歌協會が設立されたが、其れは一九三八年に至つて遂に解散された。最近南加歌壇には多くの歸米第二世が進出しつつあり注目されてゐる。尙改造社出版の『新萬葉集』には高柳、武田、泊、矢崎、渥美(故人)らが採録されてゐる。

川柳 川柳は各新聞新年號に應募する以外あまり發達しなかつたのであるが、一九三八年加州毎日文藝欄に『加

毎川柳』が阿世賀紫海を主任に組織され、昨今川柳全盛時代の觀がある。一方谷無聲編輯の『南加川柳』あり、最近に至つて『つばめ吟社』の統一的組織となり機關誌『つばめ』の外各新聞文藝欄を其作品で埋めてゐる。其他田中柊林の漢詩『聖林詩社』(一九三六年設立)もあるが、今春南加文藝團體全部の参加を得て『南加文藝聯盟』が設立された。二世の英文々藝は主として邦字新聞文藝欄に發表されつつあるが、一九三四年には大山メリー、毛利智恵子を中心に『二世ライターズ』が組織され機關誌『リクス』が發行されたが、二年後には事實上解散されしも、再び一九三九年に至り佐々木康雄を中心に二世作家同盟が生れた。是れが温床となり現在米國出版界に二世の作品が見受けられつつあり、今後の活動が期待されてゐる。

映畫 今でこそハリウッドは大羅府市の一部になつてしまつて、所謂小東京こと日本人街から新築の大ユニオン停車場を右に、砂糖菓子のような市廳を左にサンセット街を西へ登ると七哩ばかりでアパートや商店のネオンサインの列の何處からと云ふ事なしに世界映畫の首府に入つてしまふのであるが、一九二二年栗原トーマスがケールム映畫會社の西部劇に、同胞としては最初の映畫俳優としてカメラの前に立つた頃は羅府とハリウッドの間には廣漠たる『田舎』があつて、レモン園やオレンジ畑が廣がつてゐたものである。

その頃の史實は嘘の多い映畫界の事として、それこそフエード・アウトしてしまつてゐるが攝撮んで書いてみると、同年ジェスチック會社の喜劇『お鶴さんの誓ひ』に青木鶴子が主演してゐる。鶴子は一八九九年六月川上晋次郎の姪として渡米、一行の子役として巡業したが一座の失敗の結果、在米の畫家青木瓢齋の養女となり、白人劇團のコーラスガールをしてゐたのが見出されて映畫入りをしたのであつた。

一九一三年東部からカメラ一臺かついで南下したトーマス・H・インス監督がサンタモニカ撮影所を持ち、鶴子、栗原及び桑港同胞劇團にゐた小谷ヘンリー(後にカメラマンとなる)を中心に二巻物の日本映畫を撮影し始めたが、

日働きのエキストラに来てゐた美男子早川金太郎こと雪州（一九〇八年頃はSP停車場構内食堂のボーイを勤め、同胞素人演劇團に出演してゐた）が発見され、スター鶴子の相手役となつて『おみみさん』なる映畫を皮切りに八本の短篇を完成したが、主役二人もラブ・シーンを地で行つて結婚した。當時インスの許に一ヶ年長期契約俳優として前記四名の他松本まつ子、伊藤潮花も加はり、吉田稔、山本ハリ、田中八重蔵、山田義雄、木野五郎、森富太郎、關操らも出演してゐた。

一九一四年には資本一萬弗の日米映畫會社が組織され、白人向きの映畫として『寫眞結婚』『闇の女』『日本人飛行家』『刀の誓』等が撮影されたがカメラマンの高田、植田を除く以外は素人揃ひの事と間もなく破産してしまつた。

一九一七年には青山雪夫をスターとして十萬弗の日本人映畫會社が計畫され、ポイルハイト撮影所で撮影を開始した所、有力投資者の金子貞成の死去により、これ又解散した。

續いて一九二五年には邦人向き映畫として『日蔭の命』が南部邦彦主演、安西、太宰出資で撮影された。

越えて一九二七年には井出口、梅田等の出資で『太平洋の娘』が製作されたが共に作品として不成績に終つた。

一九二九年には在米邦人の手になる最初のトーキー『地軸を廻す力』九巻が在米及び日本輸出のために製作された。ジミー・ハウの監督及び撮影で製作されたが、當時まだ日本語を上手に發音出来る二世俳優が不足してゐたため、日本輸出は思ひ止められ沿岸巡業程度の成功をおさめただけであつた。

一九三三年ハリウッド映畫研等會が設立され、十六ミリ六巻の『大地に親む』が二世歸農問題を主材として作られ、一九三五年には育児問題の『移民地の母』翌一九三六年には二世農業組織化を叫んだ『のび行く二世』このカッチングは當時渡米した鈴木傳明が當つてゐる）が同研究所によつて發表されてゐる。

ハリウッド邦人映畫史を二分すれば雪州時代を第一に數えて、一九一七年には日本人活動寫眞俳優組合が出来た程の全盛時代を呼んでゐる。

第二期に入るべきは一九二三年『バグダッドの盜賊』に一躍大役を得て映畫人となつた上山草人、浦路、南部邦彦、森田幹、駒井哲らを擧ぐべきで、トーキーの出現によつて歸國及び死亡により徐々に映畫人の數も少くなつたと同時

に市岡俊恵（ワンパス・スターとなる）山岡アイリス、山岡オット、ロータス・ロング事末富パール等の二世の進出を見た。昭和五年には五十・五十クラブも出来てにぎはつたが、現在ではハリウッド映畫俳優の組織化と日支事變の影響による日本シーンの減少により、駒井、森田、上山平八等少數の人達が戦線を守つてゐるのみである。

技藝方面にはMGMの白鼠とも云はるべき美術監督今津安平、歸朝したカメラマン三村明、RKOスチル寫眞部長高村勘吉、漫畫映畫に桑原バツ、野外セット及び庭園専門家に平井の後を繼いで倉本義夫がある。

日本映畫界よりハリウッドに遊學した映畫人の全部を擧げる事は紙面がゆるさないが諸口十九、牛原康彦、三浦光男、水谷八重子、森岩雄、六車修、千葉早智子、大日方傳、鈴木傳明等それら故國の斯界の發展に貢献してゐる。

日本よりハリウッドへロケーション撮影に來た第一のものに、松竹の草人映畫『愛よ、人類と共にあれ』（昭和五年）があり、續いてPCL千葉早智子映畫『母なればこそ』（昭和十一年）がある事は餘り世に知られて居らない事實である。

演劇

南加演劇界のバイオニアは故西島勇蝶である。同地に最初に組織された劇團は一九〇三年に旗擧をした『南加演藝會』で西島を團長とし、嵐菊平を補佐役とし、勿論衣裳も背景も不完全なるもので、一座の役者も素人の域を抜けず、出し物は舊派劇であつたが村芝居式の貧弱なものであつた。それにもかかはらず非常なる人氣を呼んで度を重ねる度に演出も演技も上達し、三年間はこの劇團獨占の感があつた。

それに遅れる事三年で羅府に『正劇團』なる職業的新派劇團が創生した。一九〇六年の桑港大震災に遇つて南下した常磐操、千代田英夫、女優の延喜代等の桑港俳優連を中心に半素、半玄の一座が活氣にまかせて幽芳、紅葉、浪六ものを上演し、ピストル強盜清水定吉等の際物を演出した。その後この劇團には東洋残月、井上海舟、花房夢蝶等も参加してゐる。

一九〇七年には羅府生梓の『鴛夢會』が最初の文士劇として生れ、一九〇九年（明治四十二年）には『文藝協會』が設立され、早川雪州、常磐操等も参加して、より高級なる翻譯物、沙翁物への試みがあつたが、餘り振はず解散した。

翌一九一〇年には早川雪州等により新派『二葉會』が組織され、又『革新團』『誠美團』等の新派劇團も他地方より乗込み、一時新派黄金時代を現出した。

一九一一年には南加演藝會、正劇團、鴛夢會が合同して、その名も『巴會』と云ふ劇團が組織され、舊劇を主として三、四回の興行で相當の成績を上げた。

一九一九年（大正八年）には故國劇界より『近代劇協會』の上山草人、山川浦路の渡米を機會とし、新派劇中の新人や文士によつて『羅府演劇研究會』が生れ、草人夫妻を中心に『復活』と『マダダ』をエルクス・ホールに三日間上演し、大入札止めの盛況を呈したが第二回公演をもつて解體となつた。

南加演劇團を今日の隆盛ならしめた裏には日本よりの渡米劇團の影響も至大である。ことに一九二七年、故安田義哲によつて日米興行會社が創設されてから渡米した新劇、舊劇、劍戟の諸劇團は相當の足跡を残して行つた。一九二八年渡米した遠山滿、小原小春一座はその現實的な眞剣な闘争場面で見物の白人をアツと云はせ、チャール・チャツプリン、ダグラス・フエヤバンクスマルトン・シルス等ハリウッド映畫大スターの後援で白人相手の興行にさへ成功した。

一九二七年清村師匠門下の米國生れ二世少女十五名よりなる『少女歌舞伎』の一團が日米興行會社後援中村友福指導の下に組織された。花形に中島百合子、濱口須磨子、井上麗子、眞柄愛子、清村照子あり、公開数の重なるにつれ演技は驚異的な上達振を示し、昭和九年には夏期休暇を利用してハワイに渡航、藝術交響使節として大成功ををさめてゐる。

昭和九年正月にはやや沈滞しかけた劇界に『羅府劇談會』が設立され、『假名手本忠臣蔵』『軍國子守歌』『一の谷鐵軍記』『男伊達難波の立引』等の演出により劇界再興の氣運が見えたが、やはり外來の轉業劇團と日本映畫（ことにトーキー）の日本人街進出と地方的及び團體的素人芝居の續出に押されてか昔日の壯を見る事が出来なかつた。

長い南加演劇史は以上を骨子として、地方的（サンピートロ、ソートル、ハリウッド、西南區、上町區等）及び團體的（縣人會、宗教團體、職業別團體等）な枝葉を持ち、一九二九年『ドラマリーグ』一九三七年の『聖林演劇學校』の如き眞面目な研究團體をさえ生んだが、往々小枝に咲いた花とも云ふべき素人劇中の傑作を見る事があつた。市民協會歸米部（昭和十一年）の『嬰兒殺し』西本願寺青年會（昭和十二年）の『船出風景』等それであらう。特筆さるべきは純二世達によつて昭和九年に組織された『小東京プレイヤーズ』で、勿論英語劇ではあるが二世界に人氣を呼んだ。

だ。南加大學日本人學生の演出した英語の『父歸る』（昭和八年）その他白人を觀客とした英譯日本劇が各方面で時折上演された事も忘れてはなるまい。變り種としては昭和九年頃に日本人労働者劇團があつた。

洋 樂 一九一〇年（明治四十三年）に奈古濟一によつて組織された『みかどバンド』（アラス）は種々な意味

で南加日本人の文化史から切り離す事が出来ない。當時みかどバンドの出ない催し事は皆無で、天長節を初めとし、ピクニックや名士の歡迎にまで一種の付物と云つた有様であつた。一九一五年には六ヶ月間桑港のパナマ太平洋博覽會に遠征してゐる。當時『樂友會』なるクラブが存在してゐたが單なる音樂家の集りと云ふより、一般藝術家のセンターとなつてゐた。一九一七年には奈古のバトンの下に最初のオーケストラが生れた。勿論幼稚なものではあつたが在米日本人に洋樂啓蒙のバイオニアとして、日本音樂や芝居や雪洲、鶴子等で客を集めて聞かせた努力は大いに買ふべきである。同年ロングビーチ市のシビック・オトリウムではオーケストラで日本舞踊『梅にも春』『紀伊之國』などを白人に紹介した。その團體も樂事協會と改め、雜誌『ドミナント』まで發行すると云つた勢ひであつた。

一九二三年東京震災の時は洋樂だけの救濟演奏をして金一千弗を送り、羅府管絃團となつてからは 朝香宮殿下の御前演奏の榮を得てゐる。現在では南加音樂協會が組織され、一九四〇年二月第一演奏會が催された。二世間にはピアノ、ヴァイオリン、聲樂等に精進する者多く、邦人の教師も亦それと共に増加してゐる。

輕音樂では一九三六年に『小東京バンド』が二世によつて組織されたが、故國に職業的進出を試みて解散した。その後を引繼いで『ハリウッド・エコー管絃團』が生れ、三谷音樂博士、梅本明、續いて古賀政雄等のよき指導者を得て生長しつつある。昨年は日系市民協會と提携して所謂二世行進曲を作り、板野、有松吹込みのレコードだけで三千を突破して賣り、在米日本人でこの曲を口づさまぬ者はない程の成功ををさめた。今春は又『バイオニアに贈る歌』を募集集中であつた。

琵琶

薩摩正派の師匠として一九一五年（大正四年）頃から鮫島、大迫松香、富田汀水等があつたが、一九二五年には錦心流の山口法水、及び島華聲が斯道發展に努力した。華聲はのち遠井錦聲と號して、一九三二年大絃會を開いた澤巴城（正派）嶺水（錦心）と共に貢献するところ多く、今日では錦友會も亦盛大である。

筑前琵琶のバイオニアは故松岡旭峰で一九一五年頃より斯界發展に努力した。筑前の隆盛時代は一九二九年旭嶺、旭鈴一行の渡米以來で旭芳會、旭蓬會等斯界空前の黄金時代を呼んだ。

山田流では一九一五年に渡米した中村樂子と生田流は後れて一九二六年に教授所を開いた中島智恵子を初めとする。今日では斷然生田流が南加を風靡してゐるが、中村は米國琴曲界の貢献者として各地に足跡を止め、昭和七年の彼女の死は故國斯界でも惜まれた程である。現在では七人の師匠の内、四名の二世師匠を有すると云ふ驚異的な有様で、その旺盛さを推して知るべしである。

尺八 明治時代よりの南加尺八界のバイオニアは井筒四郎、寺澤泰郎、木島劍師、石崎羊重も古くから名手として知られてゐる。一九二五年には琴古流の指南所が出来、現在尺八研究者の數も激増した。

三絃 明治末期に藤間福壽一九一三年より杵屋君代、續いて一九一六年には清村ちき一九三〇年には杵屋彌曾代等の教授所が出来、當初は第一世の同好家、最近に至つて多くの二世門下生を擁して、長唄、常盤津、清元等、日夜日本人街に三味の音の絶えぬ程斯界に精進してゐる。

淨瑠璃 義太夫は一九〇七年代から既に流行し、職業的師匠も絶間なく居住してゐるが、一九二〇年には同好者によつて羅府淨瑠璃會が創立された。月一回の講習會と春秋二回のお習ひ公演會が続けられて今日に至つてゐる。

舞踊 一九一〇年に藤間禮壽が南加最初の「踊のお師匠さん」として現れた以前は日本舞踊は料亭の女給が酒席で踊る程度のものでしかなかつたが、一九一三年に杵屋君代（伊藤）の稽古場が出来、一九一六年に杵屋彌七（清

村）一九三一年に北加より杵屋彌曾代（石川）が來羅して日本舞踊も二世子女の日本文化研究、情操教育の一助として隆盛を加え、最近では清村門下の二世、濱口須磨子と山下春が共に故國で四、五年に渡る演劇舞踊の研究を終え歸米し、藤間勘須磨と坂東三春の藝名の下に最初の二世日本舞踊家として華々しい未來を期待されてゐる。

劍舞 一九一七年故安西秋水によつて神正會が創立され、爾來神明會、國友館等が生れ、今日の隆盛を來してゐる。

弓道 一九〇六年頃井上なるもの今日の天賞堂のあるサンビードロ街と東一街角の建物の横で弓を三張、矢を五本ばかり備えて路行く日本人に貸貸してゐるが、弓に關して第一に數え挙げられべき史實であらう。一九一〇年には同好の人達により梓クラブが作られたが、一九一六年頃の飛躍によつて現在の道場が開かれた。今日の羅府弓道會はその後身である。一九二〇年には米人シー及びプランと佐藤の盡力でグリフス公園に南加米人間最初の「L・A・アーチユリー・クラブ」が出来たが、その後も弓矢による日米親善が行はれてゐる。

刀劍 刀劍愛好家によつて一九二八年六月組織された羅府刀劍保存會は會員三十五名を有し、海外に散離した日本刀の蒐集と日本刀に關する啓蒙を目的とする有意義なる團體である。

書道 一九三四年書道會が生れ、その後大師書道會羅府書道會、柘林書道會、上町書道會及び研究會等と破竹の勢で書道熱が南加を風靡し、會に出席する人數だけで二百八十餘名に登り、その大半が第二世だと云ふ頼しい狀勢である。

華道、茶道 南加華道の隠れたるバイオニアは古澤（霞峰）繁吉で一九一〇年には既に同好の士三、四名で活花會を組織してゐた。一九二三年には江馬宗時も來り、徐々に米人間に起つた日本華道研究と二世婦女子の日本文化繼承の動きに乗つて幾多の師匠の出現を見、今日では師十人を數え、研究生千餘の内四百人は二世、百人は白人研